

大矢沢野田(1)遺跡

発掘調査報告書

平成13年度

青森市教育委員会

大矢沢野田(1)遺跡

発掘調査報告書

平成13年度

青森市教育委員会

序

青森市には、現在、300箇所以上の遺跡が所在しております。これらの遺跡の多くは丘陵地に所在しており、平野部に所在する遺跡はあまり多くはありません。大矢沢野田（1）遺跡は、本市において数少ない、平野部に所在する遺跡の一つであります。

本遺跡は、平成9年度末に横内川多目的遊水地建設工事に伴い発見された遺跡であり、平成10年度の青森県教育委員会の調査では、旧石器時代～縄文時代の埋没林のほか、縄文時代の遺物を包含する河川跡等が検出されました。

当委員会では、平成11年度の堤川広域基幹河川改修事業に先立つ試掘調査及び市道筒井幸畑団地線特殊改良事業に先立つ発掘調査を皮切りに、平成13年度まで両事業に先立つ発掘調査を継続して実施してきており、本市ではこれまで検出例のない縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡のほか、縄文時代前期初頭～後期にいたる遺構・遺物が検出されました。

本書は平成11～13年度の発掘調査成果をまとめたものであります。

最後となりましたが、本書を刊行するにあたり、調査委託者をはじめとした関係各機関・関係各位のご理解・ご協力に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成14年3月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

例　　言

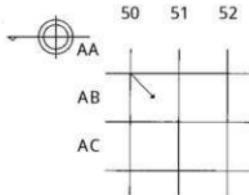
1. 本書は、青森市教育委員会が実施した青森市大矢沢字野田に所在する大矢沢野田（1）遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 大矢沢野田（1）遺跡は青森県遺跡台帳に遺跡番号01292として登録されている。
 3. 発掘調査は平成11～13年度に実施し、発掘調査総面積は3,700m²である。
 4. 本書に記載されている内容は、平成11～13年度に実施した市道筒井幸畠団地線特殊改良一種（特定）事業に伴う発掘調査報告及び平成12～13年度に実施した堤川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査報告である。平成11年度に刊行した『大矢沢野田（1）遺跡調査報告書』は平成11年度に実施した堤川広域基幹河川改修事業に伴う試掘調査成果並びに市道筒井幸畠団地線特殊改良一種（特定）事業に伴う発掘調査成果の概要を所収したものであり、平成12年度に刊行した『大矢沢野田（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』は平成12年度に実施した両事業に伴う発掘調査概要を所収したものである。記載内容については本書を優先する。
- なお、平成10年度には堤川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査が遊水地北側えん堤工事区域を対象として青森県教育委員会によって行われており、当該年度に報告書が刊行されている。
5. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、設楽政健が担当した。
 6. 出土石器の石質鑑定については調査員である、青森県総合学校教育センター指導主事工藤一彌氏に依頼した。
 7. 平野部から採取した泥炭層の分析についてはパリノサーヴェイ株式会社に依頼しており、結果は第IV章に収めている。
 8. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は青森市教育委員会で保管している。
 9. 引用・参考文献は巻末に収めた。
 10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸機関、諸氏からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

青森県教育庁文化財保護課 青森県総合学校教育センター 横内地区連合農事振興会 百原新 木村勝彦 小笠原雅行 木村鉄次郎 小林達雄 斎藤岳 福田友之 小山浩平 斎藤正 中島友文 大田原潤 中村哲也 中村美杉 辻誠一郎 木村真明 佐野忠史 羽生淳子 工藤大 三宅徹也 茅野嘉雄 辻本崇夫 沼宮内陽一郎 千葉操 工藤清衛 野沢与八郎 対馬義道 里村清衛

凡　　例

1. 図版及び表番号は、一冊を通じて連続するものとし、「第1図」「第1表」とした。依頼原稿については「図1」「表1」とした。ただし、依頼原稿については執筆者の指示を踏襲している。
2. 各種平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
3. 遺構の略号は、SI = 竪穴式住居跡、SN = 燃土遺構、SK = 土坑、SP = ピットである。第1号遺物集中ブロックについては略号を付していない。
4. 遺構の規模はcmで表示している。

5. 本報告書の土属注記については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄1993)に準拠した。
6. 繩文原体に関する用語については、『日本先史土器の繩文』(山内清男 1969)に概ね準拠した。
7. 遺物の実測図の縮尺は、土器 = 1/3、石器・土製品・石製品 = 1/2、礫石器 = 1/4である。
8. 石器観察表における石質の略号は次のとおりである。
 「珪」→珪質頁岩、「安」→安山岩、「流」→流紋岩、「石」→石英安山岩、「輝」→輝綠凝灰岩
 「凝」→凝灰岩、「変」→変形安山岩、「泥」→泥岩、「熔」→熔結凝灰岩
9. グリッドの呼称は次のとおりである。(例: AA-50)

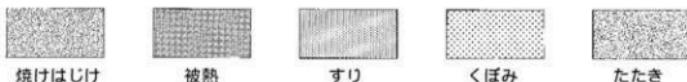


10. 図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

遺構平面図・セクション等



遺物



11. 遺物の分類は次のとおりである。

土 器

第Ⅰ群 繩文時代早期の土器

第Ⅱ群 繩文時代前期初頭の土器

- a. 刺突文・コンバス文が施されるもの
- b. 押し引き沈線文が施されるもの
- c. 器面全面に繩文が回転施文されるもの

1. ループ文が施されるもの
2. 繩端回転文が施されるもの
3. 斜繩文・羽状繩文が施されるもの

d. 脊部・底部の資料

第Ⅲ群 繩文時代前期中葉の土器 (円筒下層a・b式土器)

- a. 繩文が回転施文されるもの

- b . 縄の側面圧痕が施されるもの
- c . 結節回転文が施されるもの
 - 1 . 隆帯をもたないもの
 - 2 . 隆帯をもつもの
 - 3 . 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるもの
- d . 単軸結条体第1類が回転施文されるもの
- e . 単軸結条体第5類が回転施文されるもの
- f . 単軸結条体第6類が回転施文されるもの
- g . 単軸結条体第6A類が回転施文されるもの
- h . 多軸結条体が回転施文されるもの

第IV群 縄文時代中期前半の土器

第V群 縄文時代中期後半～後期初頭の土器

石 器

A 石鎌

- 1 円基鎌
- 2 平基鎌
- 3 尖基鎌

B 石槍

C 石錐

D 石匙

- 1 縦形のもの
 - a . 兩側縁が直線的なもの
 - b . 兩側縁ないし一側縁が椀曲するもの
 - c . 側縁の一部に凸凹がみられるもの
 - d . 下端が鋭く尖るもの
 - e . 下端にむかって細くなるもの
 - f . 丸みを帯びるもの
 - g . 下端にむかって幅広になるもの
 - h . 欠損により分類不能なもの
- 2 横形のもの

E 石範

- 1 片面のみ刃部調整されているもの
- 2 兩面が刃部調整されているもの

F 不定形石器

G 磨製石斧

H 半円状扁平打製石器

I 敲磨器類

1 磨り石

- a . 面的に磨り痕が認められるもの
- b . 側縁に磨り痕が認められるもの

2 凹み石

3 たたき石

J 石皿・台石

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

図版目次

第I章 調査の概要

第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査要項	1
第3節	調査方法	4
第4節	調査経過	4
第5節	本書の編集方針と整理作業	5

第II章 遺跡の環境

第1節	遺跡の地理的環境	9
第2節	周辺の遺跡	9
第3節	遺跡の層序	11

第III章 調査成果

第1節 A地区の調査

1 .	検出遺構と出土遺物	
1)	竪穴式住居跡	13
2)	焼土遺構	16
3)	土坑	16
4)	ピット	17
5)	遺構外出土遺物	32
・	土器	32
・	石器	45

第2節 B地区的調査

1 .	検出遺構と出土遺物	
1)	第1号遺物集中ブロック	58
・	出土土器	59
・	出土石器	80
・	出土土製品・石製品	83

第3節 C地区的調査

2 .	検出遺構と出土遺物	
1)	土坑・Tピット	107
2)	遺構外出土遺物	108

第IV章 自然科学的分析

大矢沢野田(1)遺跡の古環境について	110
--------------------	-----

第V章 分析と考察

第1節 遺跡の時期と地形の相関からみた本遺跡における環境推移について	123
第2節 第II群土器について	124
第3節 第III群土器について	127

まとめ

129

引用・参考文献

写真図版

図 版 目 次

第1図	遺構配置図・調査対象区域図・遺構配置図	7-8
第2図	周辺の遺跡位置図	10
第3図	基本層序	12
第4図	S I- 01	14
第5図	S I- 01内Pitセクション・出土遺物	15
第6図	S N- 01・S K- 01・S K- 02	16
第7図	S P- 01- 18	29
第8図	S P- 19- 35	30
第9図	S P- 36- 47	31
第10図	A地区遺構外出土土器①	35
第11図	A地区遺構外出土土器②	36
第12図	A地区遺構外出土土器③	37
第13図	A地区遺構外出土土器④	38
第14図	A地区遺構外出土土器⑤	39
第15図	A地区遺構外出土土器⑥	40
第16図	A地区遺構外出土土器⑦	41
第17図	A地区遺構外出土土器⑧	42
第18図	A地区遺構外出土土器⑨	43
第19図	A地区遺構外出土土器⑩	44
第20図	A地区遺構外出土石器①	47
第21図	A地区遺構外出土石器②	48
第22図	A地区遺構外出土石器③	49
第23図	A地区遺構外出土石器④	50
第24図	A地区遺構外出土石器⑤	51
第25図	A地区遺構外出土石器⑥	52
第26図	A地区遺構外出土石器⑦	53
第27図	第1号遺物集中ブロックセクション	58
第28図	第1号遺物集中ブロック出土土器①	62
第29図	第1号遺物集中ブロック出土土器②	63
第30図	第1号遺物集中ブロック出土土器③	64
第31図	第1号遺物集中ブロック出土土器④	65
第32図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑤	66
第33図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑥	67
第34図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑦	68
第35図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑧	69
第36図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑨	70
第37図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑩	71
第38図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑪	72
第39図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑫	73
第40図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑬	74
第41図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑭	75
第42図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑮	76
第43図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑯	77
第44図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑰	78
第45図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑱	79
第46図	第1号遺物集中ブロック出土土器⑲	80
第47図	第1号遺物集中ブロック出土石器①	84
第48図	第1号遺物集中ブロック出土石器②	85
第49図	第1号遺物集中ブロック出土石器③	86
第50図	第1号遺物集中ブロック出土石器④	87
第51図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑤	88
第52図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑥	89
第53図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑦	90
第54図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑧	91
第55図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑨	92
第56図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑩	93
第57図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑪	94
第58図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑫	95
第59図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑬	96
第60図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑭	97
第61図	第1号遺物集中ブロック出土石器⑮	98
第62図	第1号遺物集中ブロック出土土製品・石製品	99
第63図	S K- 03・S K- 03出土遺物	107
第64図	S K- 04	108
第65図	C地区遺構外出土遺物	109
第66図	環境変遷模式図	123
第67図	第II群土器各類型における層位ごとの出土量比	124
第68図	3・4層における第III群土器の出土量比	128

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	9
第2表	S I- 01出土土器観察表	54
第3表	S I- 01出土石器観察表	54
第4表	A地区遺構外出土土器観察表	54
第5表	A地区遺構外出土石器観察表	56
第6表	第1号遺物集中ブロック出土土器観察表	100
第7表	第1号遺物集中ブロック出土土器観察表	103
第8表	第1号遺物集中ブロック出土土製品観察表	106
第9表	第1号遺物集中ブロック出土石製品観察表	106
第10表	S K- 03出土土器観察表	107
第11表	C地区遺構外出土土器観察表	107
第12表	C地区遺構外出土石器観察表	107

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

本遺跡は、青森市大字大矢沢字野田に所在する遺跡である。当初、本地域において周知の埋蔵文化財包蔵地は登録されていなかったため、青森土木事務所（以下、土木事務所）による堤川広域基幹河川改修事業（以下、河川改修事業）に伴う遊水地建設工事及び青森市建設部道路課（平成10年度当時。平成13年度から青森市都市整備部道路建設課、以下市道路建設課）による市道筒井幸畑团地線特殊改良一種（特定）事業（以下、市道改良事業）が計画され、一部工事が進捗していたが、平成10年4月9日付け青土木第83号で青森土木事務所より遊水地建設工事中に埋蔵文化財包蔵地を発見した旨の届があつたので、青森県教育委員会によって大矢沢野田（1）遺跡として新規に登録された（青森県遺跡台帳番号01292）。平成10年度には、範囲確認調査、河川改修事業に先立つ発掘調査が青森県教育委員会によって行われ、縄文時代前期中葉の遺物を包含する河川跡、旧石器時代～縄文時代前期に相当する埋没林が検出された他、縄文時代早期の貝殻文土器、縄文時代前期初頭の表館式土器、早稻田6類土器、当該期の土坑が検出されている。

そして平成11年度、土木事務所が計画している河川改修事業に伴う遊水地築堤工事及び築堤工事予定地に隣接する工事用道路について市道路建設課が計画している市道改良事業予定地が遺跡範囲と重複することとなつたため、その取り扱いについて、土木事務所及び市道路課と当委員会が協議を行つた結果、築堤工事予定地については、予定地内における遺構・遺物の有無、発掘調査の必要性を把握するため約2,000m²を対象とした確認調査、市道改良事業予定地については記録保存を目的とし約12,000m²を対象とした発掘調査を実施するという結論に至つた。市道改良事業に伴う発掘調査については、当初、調査対象面積12,000m²のうち、既存の工事用道路を含め約6,000m²を調査する予定であったが、工事車両及び工事用道路に隣接する農地に出入りする農耕車が通行するため、当該年度は工事用道路部分の調査は行わず、工事用道路東側脇の調査実施可能な部分について行うこととした。工事用道路の道路敷部分の発掘調査については、当該年度の確認調査と道路脇部分の発掘調査結果を踏まえて必要箇所を絞り込み改めて協議することとした。

平成12年度は、11年度に実施した築堤工事予定地内の確認調査及び市道改良事業予定地内の発掘調査の結果から、遺構・遺物を確認した部分を絞り込み、2,100m²について発掘調査を実施した。

平成13年度は、12年度の発掘調査の結果、調査区北端から遺構が検出されたことから調査区外北側へ向かって遺構が連続する可能性が想定されたため、平成12年度調査区の北側の隣接地約600m²について発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

1. 調査の目的

堤川広域基幹河川改修事業並びに市道筒井幸畑团地線特殊改良一種（特定）事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

- 2 . 遺跡名及び所在地 大矢沢野田(1)(おおやさわのだかっこいち) 遺跡
(青森県遺跡台帳番号 01292) 青森市大字大矢沢字野田
- 3 . 事 業 年 度 平成11~13年度
- 4 . 発掘調査実施期間 第1年次 平成11年 6月14日~平成11年 9月30日
第2年次 平成12年 8月17日~平成12年10月31日
第3年次 平成13年 7月11日~平成13年 8月 9日
- 5 . 調 査 面 積 3,700m²
第1年次 1,000m²
第2年次 2,100m²
第3年次 600m²
- 6 . 調 査 委 託 者 青森県青森土木事務所
青森市建設部(平成11~12年度)・青森市都市整備部(平成13年度)
- 7 . 調 査 受 諾 者 青森市教育委員会
- 8 . 調 査 担 当 機 閣 青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室(平成11年度)
青森市教育委員会文化財課(平成12~13年度)
- 9 . 調 査 指 導 機 閣 青森県教育庁文化課(平成11~12年度)
青森県教育庁文化財保護課(平成13年度)
- 10 . 予 算 措 置 調査委託者側で措置
- 11 . 調 査 体 制
- 平成11年度
- | | | | |
|-------|-----------|--------------------------|---------|
| 調査指導員 | 村越 潔 | 青森大学教授 | (考古学) |
| 調査員 | 藤沼 邦彦 | 弘前大学人文学部教授 | (考古学) |
| " | 市川 金丸 | 青森県考古学会会長 | (考古学) |
| " | 工藤 一彌 | 青森県総合学校教育センター指導主事(地質学) | |
| 調査事務局 | 青森市教育委員会 | | |
| | 教 育 長 | 池田 敬 | |
| | 生涯学習部長 | 中西 秀吉 | |
| | 生涯学習部次長 | 小山内 博 | |
| | 社会教育課長 | 間山 義弘 | |
| | 埋蔵文化財対策室長 | 遠藤 正夫 | |
| | 同室長補佐 | 蝦名 淳一 | |
| | 主 査 | 堀谷 久子 | |
| | " | 田澤 淳逸 | |
| | 主 事 | 小野 貴之 | |
| | " | 木村 淳一 | |
| | " | 児玉 大成 | |
| | " | 沼宮内陽一郎(調査担当) | |
| | " | 設楽 政健(調査担当) | |

調査補助員 内田祐子、田中美鈴

平成12年度

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
"	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事(地質学)	
調査事務局	青森市教育委員会		
教 育 長	池田 敬		
生涯学習部長	中西 秀吉		
生涯学習部次長	三浦 賢伍		
生涯学習部参事			
文化財課長事務取扱	遠藤 正夫		
同課長補佐	蝦名 淳一		
主 査	堀谷 久子		
主 事	小野 貴之		
"	木村 淳一		
"	児玉 大成		
"	設楽 政健(調査担当)		
調査補助員	柿崎悟、浜田泉、内田祐子、今直子		

平成13年度

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
"	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事(地質学)	
調査事務局	青森市教育委員会事務局		
教 育 長	角田 詮二郎		
事 務 局 長	三浦 賢伍(~平成13年5月31日)		
	大柴 正文(平成13年6月1日~)		
参 事			
文化財課長事務取扱	遠藤 正夫		
同課長補佐	工藤 勝則		
主 査	堀谷 久子		
文化財主事	小野 貴之		
"	木村 淳一		
"	児玉 大成		
"	設楽 政健(調査担当)		
調査補助員	浜田泉、今直子		

第3節 調査方法

グリッドの設定にあたっては、市道改良事業に係る工事用道路中心杭№ 0 と№ 1 を結ぶ南北方向の直線とそれに直行する東西方向の直線を基本に 4 m × 4 m のグリッドを設定した。グリッドの呼称については、工事用中心杭№ 0 を起点として、南側にむかって 1、2、3... の順に算用数字を、東側に向かって Z、Y、X... の順にアルファベットを付し、各呼称についてはその組み合わせで示した。グリッドの南北方向の基準線と磁北のラインとの偏差は西偏 5° である。なお、このグリッドは平成10年度に実施された青森県教育委員会による発掘調査におけるグリッドとは一致していない。

測量原点については青森土木事務所敷地内に所在する原点10.498mを基準とし、南北に細長い調査区に対応するため、調査の進捗に応じて適宜追加していった。

調査対象地区は約600mの延長で南北方向に走る工事用道路と、その道路敷部分に隣接する遊水地築堤工事部分である。当委員会が調査開始した時点で工事用道路の西側即ち遊水地予定地は道路敷の面から約 2 m の深さで切土され、工事用道路に隣接して法面が造成されていた。その法面から観察できる土層の堆積状況からグリッドライン 0 ~ 95付近においては、泥炭層が厚く堆積している状況が確認できた。特に北側においては法面が落ちきった部分よりもさらに下層へ泥炭層が連続しており、南側に向かうにつれて次第に薄くなっていくという状況である。第 1 年次である平成11年度において、発掘調査と併行して行われた河川改修事業に係る試掘調査により、遺物が出土する層位（第 X II ・ X III 層）を把握していったため、それより上位に堆積する無遺物の泥炭層については重機により処理を行い、第 X II ・ X III 層から人力による掘り下げを行った。

遺構の精査にあたっては、竪穴式住居跡については長軸方向と直交するセクションベルトを 2 ~ 3 本、短軸方向と直交するセクションベルトを 1 本設けてを行い、土坑やそれ以外の遺構については 2 分法を探用した。

遺構の平面図作成については、簡易造り方測量・平板測量を併用した。図面の縮尺については基本的に 20 分の 1 を採用し、必要に応じて 10 分の 1、40 分の 1 を採用した。

写真撮影については、35mm のモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用して行った。

第4節 調査経過

平成11年度の調査経過については、『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』に掲載しているので、ここでは平成12・13年度の調査経過について詳述する。

平成12年度

平成11年度の調査成果をもとに A K ~ A H - 24~42 グリッドの範囲、A K ~ A H - 52~62 グリッドの範囲を調査区として設定した。

8月17日 調査開始。これ以前に、A K ~ A H - 24~42 グリッドの範囲については、第 X II ・ X III 層付近まで重機により表土処理を完了していた。

8月下旬

A K ~ A H - 24~42 グリッドの粗掘りを行った。周辺が水田であり、なおかつ水分を吸収しやすい泥

炭層が堆積しているため、水がたまりやすいという調査区の地質的な特徴から、やや標高の高い南側から低い北側に向かって粗掘りを進めていった。第XⅡ・XⅢ層より、縄文時代前期初頭の遺物が出土し、南側から北に向かうにつれて粗→密になっていく傾向がみられた。遺構は、A I-39グリッドよりピット1基、A J-37グリッドより土坑1基、A I-36よりピット1基、A I-31より焼土遺構1基、土坑1基を検出した。いずれも第XⅢ層より掘り込まれていた。

9・10月

大矢沢農事振興会の代表者から、稲刈り時に農耕車が出入りするための通路を車一台分でも確保してほしいとの要望があり、既に精査終了した水田側のA K-A I-24-42グリッドについて部分的に埋め戻しを行った。A I-24グリッドにおいて、昨年度の試掘調査で部分的に検出した縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡を確認し、精査を行った。竪穴式住居跡の精査終了をもって、A K-A H-24-42グリッドの調査を終了し、A K-A H-52-62グリッドの粗掘りを行った。この地区においても、A K-A H-24-42グリッドと同様に南側から北側へ粗掘りを進めていた。遺物は、A K-A I-58-66において縄文時代前期中葉の遺物、A K-A J-52-54において前期初頭の遺物が極少量出土する程度であった。遺構はA K-A I-58-66においてピットを44基検出した。また、A K-A I-52-56において、谷と考えられる落ち込みを検出した。

10月26日 発掘調査会議を開催。当初、当該年度で調査を終了する予定であったが、竪穴式住居跡の北側に遺構・遺物が広がっている可能性が高いのではないかという意見をもとに、13年度において当該部分を調査することを決定した。

10月31日 調査終了。

平成13年度

平成12年度の調査成果をもとに、竪穴式住居跡を検出した部分より北側を調査区として設定した。

7月11日 調査開始。これ以前に重機により表土処理を完了していた。

7月中旬～8月上旬

粗掘りを開始した。やや標高の高い南側から北側に向かって粗掘りを進めていた。雨天の日が多く、また前年よりも標高が微妙に低くなっていることも影響して水分の湧出が激しかったことから、調査は必ずしも順調には進捗しなかったが、遺構を全く検出できず、出土遺物も極めて散発的であり、予定通り8月9日をもって調査を終了した。

第5節 本書の編集方針と整理作業

1. 本書の編集方針

本遺跡の範囲は地形的にみると北側から南側に向かって平野部、丘陵縁辺部、丘陵部に3区分することができる。当委員会が実施した本遺跡の発掘調査は、遺跡範囲を南北に走る工事用道路とそれに隣接する遊水地築堤工事予定地を対象範囲としており、調査の結果、平野部、丘陵縁辺部、丘陵部から確認した遺構及び出土遺物の主体となる時期がそれぞれ異なっていたことから、本書では便宜的に平野部の調査区(グリッドライン0~66)をA地区、丘陵縁辺部の調査区(グリッドライン70~92)をB地区、丘陵部の調査区(グリッドライン125~139)をC地区として分けて取り扱った。

2. 資料の提示方法

本遺跡においてA地区の遺構外から出土した縄文時代前期初頭の土器及びB地区の第1号遺物集中ブロックから出土した縄文時代前期中葉の土器については、当該期の土器型式の新旧関係を明らかにするため、分類した土器を更に層位ごとに下層の土器から一括して掲載している。ただし石器については、定形石器の各器種は縄文時代各時期を通じて基本的に土器ほど形態的な規格性の変化が顕著でないと考えられるため、層位ごとの区別はせず、器種ごとに一括している。

3. 整理作業

本遺跡の発掘調査に係る整理作業は、平成11年度の調査終了時点から開始している。以下、整理作業の概要を示す。

a. 遺構図面

発掘調査時に作成した平面図、セクション図、エレベーション図に関して修正を行い、原則として1/10、1/20の原図を作成し、トレースを行った。

b. 土器

出土した土器は、平成11年度はダンボール40箱、平成12年度はダンボール5箱、平成13年度はダンボール1箱分である。

洗浄・注記

出土した土器のほとんどが第1号遺物集中ブロック及びA地区遺構外の土器であった。ハケ・ブラシによる手洗いによる洗浄の後、乾燥させ、注記を行った。記入事項として調査年度、遺跡名、グリッド名、出土層位、取り上げ番号を記入した。

接合・復元

前述したように出土した土器のほとんどが遺物集中ブロック及び遺構外の土器であり、まずグリッド毎の接合からを行い、さらにグリッド間の接合を実施した。復元には樹脂の充填材を用いた。

分類

復元土器、口縁部破片資料については、既存の型式に照射しそのメルクマールとされている文様モチーフ・施文技法の有無及びその組み合わせから分類した。型式を判別し得る決定的な文様の特徴をもたない胴部・底部破片資料についても施文された文様によって分類している。

c. 石器

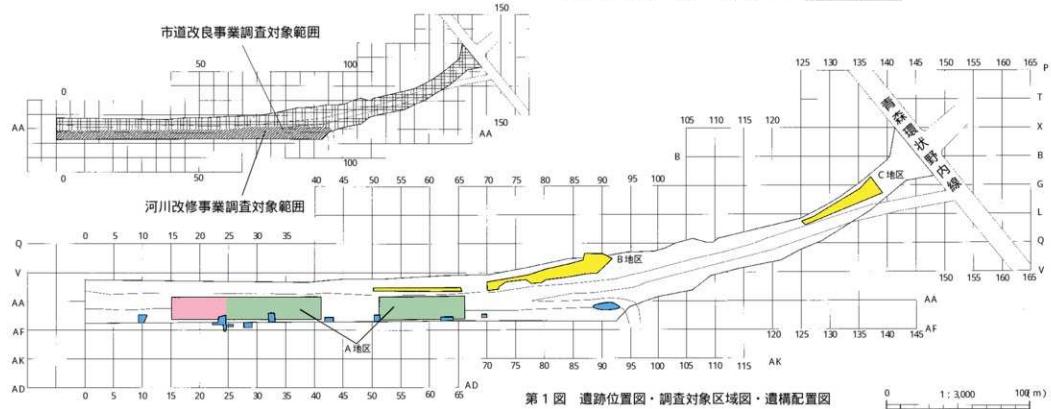
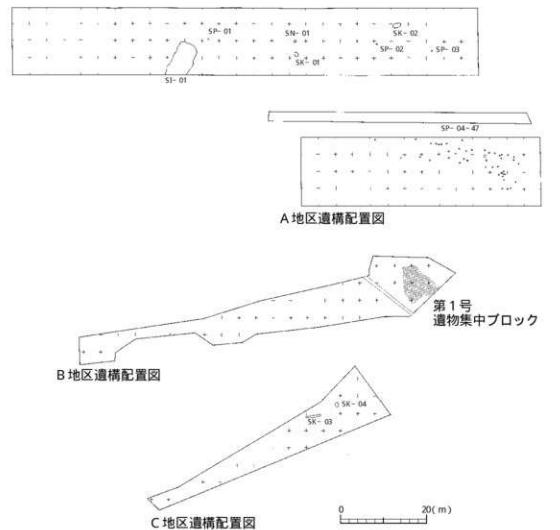
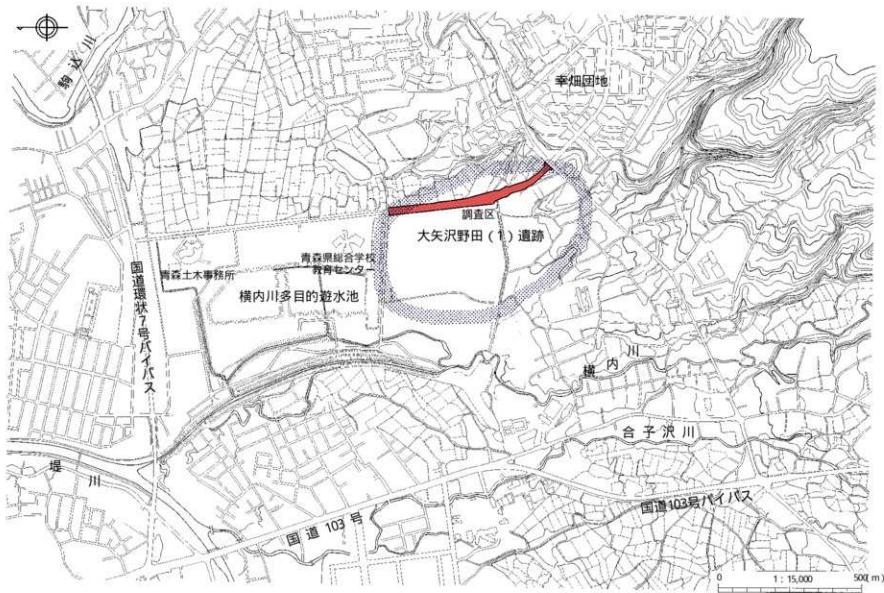
出土した石器は、平成11年度はダンボール8箱、平成12年度はダンボール2箱、平成13年度はダンボール1箱分未満である。

洗浄・注記

土器と同様、出土した石器のほとんどが遺物集中ブロック及び遺構外からの出土であった。ハケ・ブラシによる手洗いによる洗浄、乾燥の後、土器と同じ要領で注記を行った。

分類

まず剥片石器・礫石器の2つに大別し、それらを器種ごとに分類した。さらに必要に応じて、形態・調整等により細分を行った。



第1図 遺跡位置図・調査対象区域図・遺構配置図

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

本遺跡は、青森市街地から直線距離にして約5km南方の青森市大字大矢沢字野田に所在している。青森市の地形は、北を陸奥湾に面して広がる青森平野、平野西側に存在する開析の進んだ丘陵、平野東側の東岳山地、八甲田山から噴出した火碎流堆積物で構成された平野南～南東側の火山性台地から成っている。本遺跡は青森市域北側の青森平野と南～南東側の火山性台地の境界付近にあたり、遺跡範囲内は、標高10m程の平野部がほぼ大半を占め、南方へ向かうにつれて標高12mほどの丘陵縁辺部、標高28m以上の丘陵地が存在し、地形的におよそ3つに区分することができる。遺跡範囲の大半を占める平野部は遊水地建設工事によって既に削平された部分を除けば現況は水田であり、丘陵縁辺部～丘陵部はほとんどが原野・畑地で一部宅地化が進んでいる。遺跡から西側約150mのところには横内川が北流しており、また遺跡周辺には過去に河川によって開析を受けたと考えられる谷地形がいくつか存在している。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡の周辺の遺跡については平成11年度報告で詳述しているので、ここではその概要をとどめる。

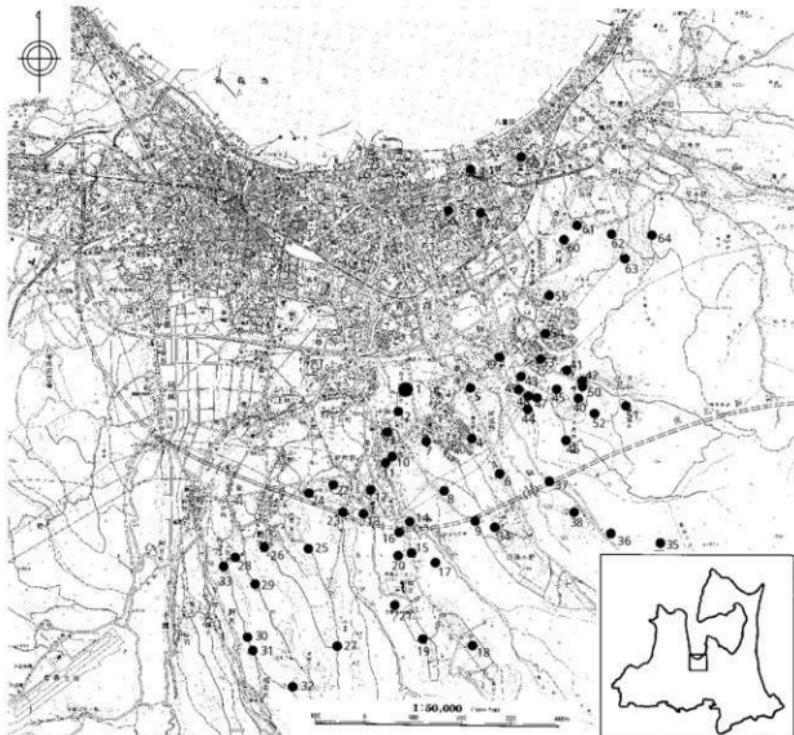
本遺跡の周辺には多くの遺跡が存在しているが、それらの立地をみると、遺跡範囲の大半を平野部が占める本遺跡のように平野部に存在する遺跡は極めて少なく、丘陵縁辺部及び丘陵地上に存在している遺跡がほとんどである。これらの遺跡の時期は縄文時代～平安時代までと多岐にわたるが、縄文時代前期末葉～後期初頭、平安時代に帰属する遺跡が多く、代表的な遺跡として、縄文時代前期末葉～中期中葉までを主体とする横内(1)・(2)遺跡、桜峯(1)・(2)遺跡、縄文時代前中期中葉、平安時代を主体とする新町野遺跡、野木遺跡、縄文時代後期初頭を主体とする四ツ石遺跡が挙げられる。

本遺跡が立地する平野部では、過去にいわゆる「谷地」であった可能性が高い場所が多く、これまで確認されている遺跡は極めて少数である。しかし、本遺跡ではこれまで本市において出土例が少ない縄文時代前期初頭の遺物包含層が、かなりの層厚で堆積する泥炭層の下から確認されていることから、これまで遺跡があまり確認されていなかった平野部から新たに遺跡が確認される可能性がある。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号	番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号
1	大矢沢野田(1)遺跡	縄文	集落跡	01292	14	横内猪沢(1)遺跡	平安	散布地	01284
2	野尻野田(1)遺跡	平安	散布地	01283	15	桜峯(1)遺跡	縄文	散布地	01207
3	野尻館遺跡	中世	館跡	01173	16	桜峯(2)遺跡	縄文	散布地	01208
4	阿部野遺跡	縄文・平安	集落跡	01050	17	鏡山遺跡	縄文	散布地	01209
5	阿部野(2)遺跡	平安	散布地	01219	18	雪谷山吹(1)遺跡	縄文	散布地	01199
6	阿部野(3)遺跡	平安	散布地	01220	19	雪谷山吹(2)遺跡	縄文	散布地	01263
7	大矢沢里見(1)遺跡	縄文	散布地	01236	20	雪谷山吹(3)遺跡	縄文	散布地	01285
8	四ツ石遺跡	縄文(中・後)	散布地	01028	21	雪谷山崎(1)遺跡	縄文・平安	散布地	01247
9	四ツ石(2)遺跡	縄文(中・後)	散布地	01194	22	合子沢松森(1)遺跡	縄文	散布地	01261
10	四ツ石(3)遺跡	縄文	散布地	01215	23	合子沢松森(2)遺跡	平安	散布地	01262
11	横内城跡	中世	館跡	01174	24	新町野遺跡	縄文・平安	散布地	01161
12	横内(1)遺跡	縄文(前)	散布地	01164	25	野木遺跡	縄文・平安	集落跡	01210
13	横内(2)遺跡	縄文	散布地	01206	26	野木沢田遺跡	平安	散布地	01215

番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号	番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号
27	山口遺跡	縄文(前・後)	散布地	01271	46	月見野(6)遺跡	縄文(晩)	散布地	01286
28	葛野(1)遺跡	縄文	散布地	01217	47	玉清水(1)遺跡	縄文(晩)	散布地	01006
29	葛野(2)遺跡	縄文・平安	散布地	01218	48	玉清水(2)遺跡	不明	散布地	01007
30	山吹(1)遺跡	縄文	散布地	01186	49	玉清水(3)遺跡	縄文(前)	散布地	01008
31	山吹(2)遺跡	縄文	散布地	01187	50	沢山(1)遺跡	縄文(晚)	散布地	01042
32	山吹(3)遺跡	縄文	散布地	01188	51	沢山(2)遺跡	縄文・平安	散布地	01043
33	山吹(4)遺跡	縄文・平安	散布地	01237	52	沢山(3)遺跡	平安	散布地	01044
34	田茂木野遺跡	縄文(晩)	散布地	01160	53	蜜沢遺跡	縄文・弥生・平安	集落跡	01057
35	梨の木平牧場遺跡	縄文(中)	散布地	01068	54	赤坂遺跡	平安	散布地	01053
36	深沢(1)遺跡	縄文(後)	散布地	01233	55	戸山遺跡	縄文(前・中)	散布地	01005
37	深沢(2)遺跡	縄文(前・後)	散布地	01234	56	佃遺跡	縄文(前)	散布地	01058
38	梨の木平遺跡	縄文	散布地	01054	57	小柳遺跡	平安	散布地	01059
39	駒込鰐遺跡	平安	館跡	01048	58	沢田遺跡	平安	集落跡	01051
40	月見野雪圓遺跡	平安	散布地	01009	59	露草遺跡	平安	散布地	01061
41	月見野遺跡	縄文(前・後)	散布地	01010	60	戸崎餘遺跡	中世	館跡	01022
42	月見野(2)遺跡	不明	散布地	01192	61	桑原遺跡	縄文	散布地	01046
43	月見野(3)遺跡	縄文・平安	散布地	01221	62	稻山遺跡	縄文(前・後)	散布地	01045
44	月見野(4)遺跡	縄文(後)	散布地	01235	63	牛蒡畠遺跡	縄文・弥生・平安	散布地	01191
45	月見野(5)遺跡	縄文	散布地	01264	64	諏訪沢山辺(1)遺跡	縄文	散布地	01232



第2図 周辺の遺跡位置図

第3節 遺跡の層序

本遺跡の調査区内の基本層序については平成11年度報告に準拠するので、ここでは詳述せず、概要を以下に示す。

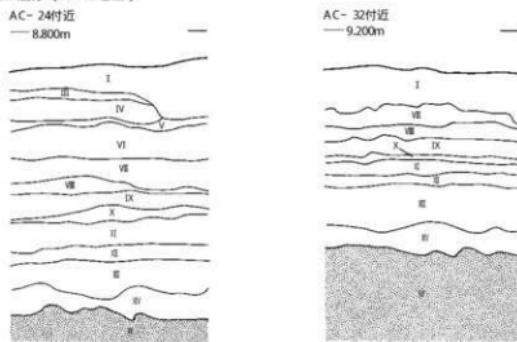
グリッドライン95以北の層序（A・B地区）

- 第I層 暗褐色を呈する。表土。
- 第II層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第III層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）
- 第IV層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第V層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）
- 第VI層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第VII層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）
- 第VIII層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第IX層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）
- 第X層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第?層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）
- 第?層 黒色（10Y R 1.7 / 1）を呈する。泥炭層（分解質泥炭）。上位で中撤浮石を確認できる。
下位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第XIII層 黒色（10Y R 2 / 1）を呈する。粗砂が少量混入。1mm～1cm大の浮石粒が微量混入。
上位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第XVI層 黒褐色（10Y R 3 / 2）を呈する。粗砂を主体とする土。
- 第XV層 明黄褐色（10Y R 6 / 6）を呈する。細砂と粗砂が混じった土。
- 第XVI層 にぶい橙色（7.5Y R 6 / 4）を呈する。八戸浮石流凝灰岩と思われる。
- 第XVII層 にぶい橙色（5Y R 7 / 4）を呈する。八甲田溶結凝灰岩の風化帶と思われる。

グリッドライン95以南の層序（C地区）

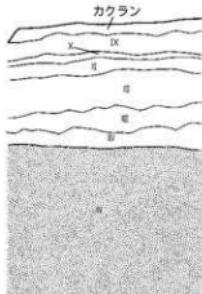
- 第I層 黒褐色（10Y R 2 / 3）を呈する。炭化粒、焼土粒、ローム粒極微量。
- 第II層 黒褐色（10Y R 2 / 2）を呈する。炭化粒、ローム粒極微量。
- 第III層 黒褐色（10Y R 2 / 2）を呈する。ローム粒極微量。縄文時代の遺物を包含。
- 間層1 黒褐色（10Y R 2 / 3）を呈する。ローム粒極微量。
- 間層2 黒褐色（10Y R 2 / 2）を呈する。ローム粒、炭化粒微量。
- 第IV層 暗褐色（10Y R 3 / 3）を呈する。ローム粒多量。漸移層。
- 第V層 褐色（10Y R 4 / 4）を呈する。ローム。

グリッドライン95以北の層序 (A・B地区)



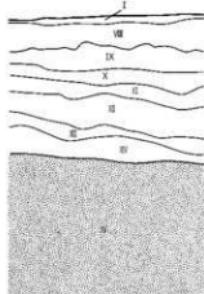
AA - 59付近

— 9.600m



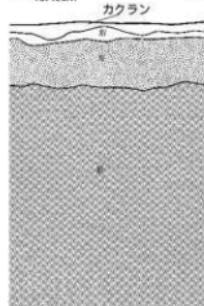
X - 64付近

— 9.800m



U - 83付近

— 10.400m



グリッドライン95以南の層序 (C地区)

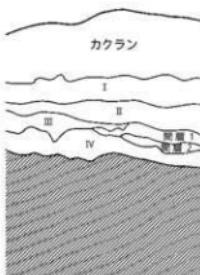
I - 132付近

— 20.100m



J - 132付近

— 25.200m



第3図 基本層序

第三章 調査成果

第1節 A地区の調査

A地区はグリッドライン15~66の遺跡範囲内における平野部にあたり、標高は10m前後である。地形的に起伏は見られず、本地区における北端と南端の比高差は1mである。この地区一帯においては泥炭層が厚く堆積しており、北側から南側の丘陵地へ向かって次第に薄くなっていく状況が確認できた。泥炭層の下層は、目の粗い砂層（基本層序第XV層）である。A地区からは、竪穴式住居跡1軒（注1）、土坑3基、焼土遺構1基、ピット47基の遺構を検出した。これらの遺構は全て泥炭層下位の基本層序第XII層から検出した。また遺物は、縄文時代前期初頭を主体とする遺物が基本層序第XII・XII層からダンボール箱換算で7箱（土器5箱、石器2箱）分出土した。

注1 竪穴式住居跡は平成11年度の試掘調査報告において西側部分を報告済みであるが、全容を提示するために当該部分の原図を合成して図版を作成している。

1. 検出遺構と出土遺物

1) 竪穴式住居跡

S I-01 (第4・5図)

[位置] グリッドAC~AE-24・25に位置しており、基本層序第XIII層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 北西~南東方向を長軸、北東~南西方向を短軸とする隅丸長方形を呈し、832×486cmを測る。床面積は104.54m²を測る。

[壁] 壁の高さは、東壁34cm、西壁34cm、南壁28cm、北壁40cmを測る。いずれの壁も緩やかに立ち上がる。

[床] 基本層序第XV層を床面としており、ほぼ平坦である。

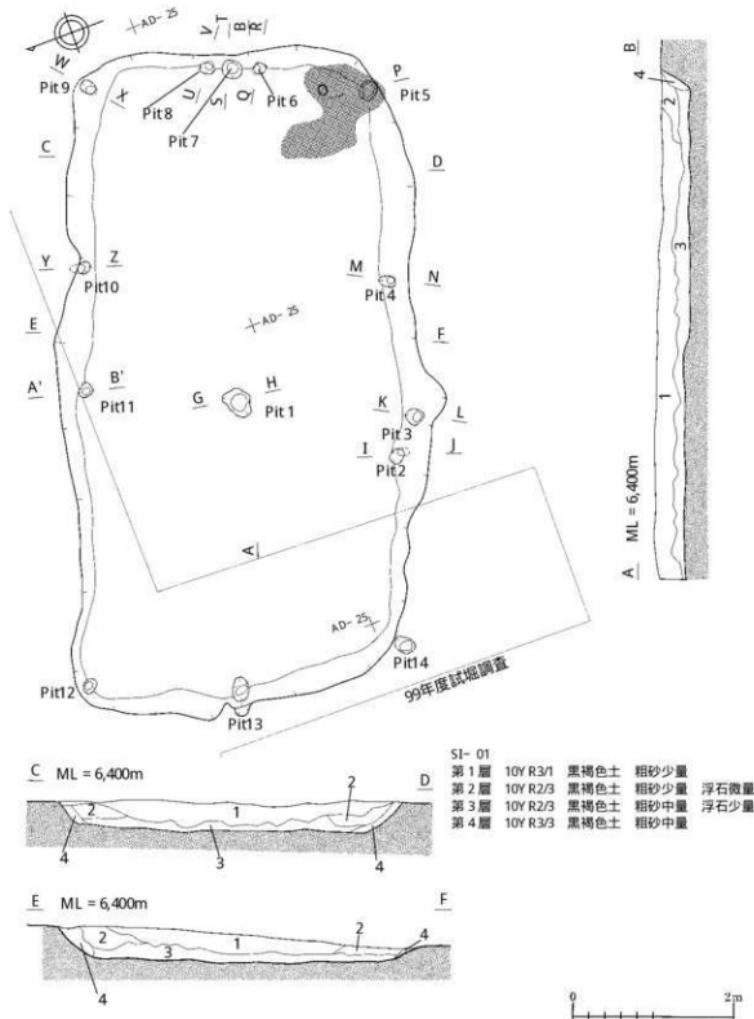
[ピット] 14基検出した。各ピットの規模は、Pit1=40×28×44cm、Pit2=18×16×12cm、Pit3=24×20×12cm、Pit4=20×14×14cm、Pit5=28×20×26cm、Pit6=16×15×17cm、Pit7=24×22×29cm、Pit8=18×14×22cm、Pit9=20×15×25cm、Pit10=16×13×30cm、Pit11=20×18×9cm、Pit12=20×15cm、Pit13=31×20cm、Pit14=25×18cmを測る。床面中央部に位置するPit1は主柱穴、その他のPIT2~14は壁柱穴と考えられる。

[炉] 検出しなかった。

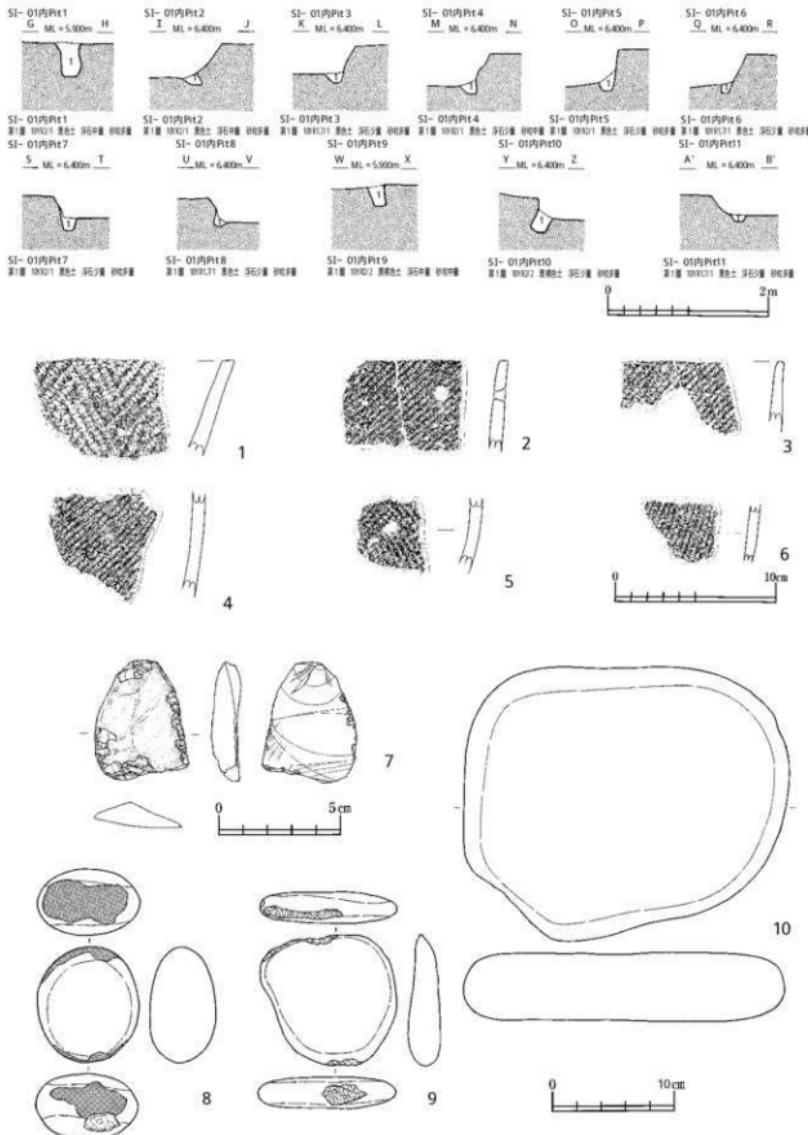
[堆積土] 4層に分層した。黒褐色を主体とする土層が堆積している。いずれの土層においても目の粗い砂粒が混入しており、下層にいくにしたがってその混入量が多い。2層においては微量であるが浮石が確認できる。また、住居南東隅において炭化物を比較的多く含む土層が確認できた。土層堆積状況からみて自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 覆土から第II群土器が6片、剥片石器1点、磨り石1点、敲石1点、台石1点が出土した。土器は同一個体と考えられる。外面の文様はLR縞文（0段多条）の回転によって施文され、胴下半部において羽状を構成する。内面は丁寧に磨かれており、部分的に付着物がみられる。胎土には纖維が混入する。磨り石と敲石は平面形がそれぞれ円形、不整形を呈し、相対する側面に磨りの痕跡、敲打痕が

みられる。台石は平面が隅丸台形を呈し、平坦面を2面有するが、磨り及び敲きの明瞭な痕跡は認められない。



第4図 SI-01



第5図 SI-01内pitセクション・出土遺物

2) 焼土遺構

SN-01(第6図)

[位置] A C - 30グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、直径84cmを測る。

[土層] 被熱の具合によって3層に分層できた。黒褐色を主体とする土層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

3) 土坑

SK-01(第6図)

[位置] A C - 31グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸101×短軸82×深さ26cmを呈する。

[断面形・壁] 鍋底状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。壁付近に浮石・砂粒を少量混入する黒色土、中央部に浮石を少量混入する黒色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

SK-02(第6図)

[位置] A B - 37グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

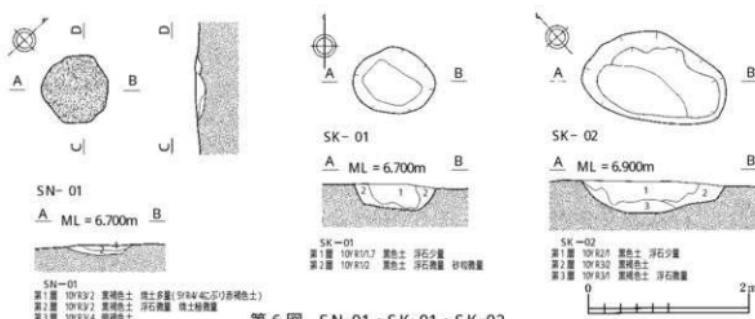
[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸180×短軸110×深さ40cmを呈する。

[断面形・壁] 鍋底状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 3層に分層した。壁付近及び下層において黒褐色土を主体とする土層、中央部において浮石を少量混入する黒色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。



第6図 SN-01・SK-01・SK-02

4) ピット

S P - 01 (第7図)

[位 置] A B - 26グリッドに位置しており、基本層序第 X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、長軸50× 短軸30× 深さ30cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V層を掘り込んで底面としている。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 02 (第7図)

[位 置] A C - 36グリッドに位置しており、基本層序第 X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸30× 短軸21× 深さ14cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 03 (第7図)

[位 置] A C - 39グリッドに位置しており、基本層序第 X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸30× 短軸25× 深さ20cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 04 (第7図)

[位 置] A A - 56グリッドに位置しており、基本層序第 X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸32× 短軸24× 深さ16cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石・砂粒を混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 05 (第 7 図)

[位 置] A B - 57グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸30× 短軸22× 深さ17cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 06 (第 7 図)

[位 置] A A - 58グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸30× 短軸22× 深さ17cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 07 (第 7 図)

[位 置] A B - 58グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸25× 短軸24× 深さ21cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 08 (第 7 図)

[位 置] A B - 59グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸31× 短軸26× 深さ21cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石・砂粒を混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 09 (第 7 図)

[位 置] A A - 59グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸48× 短軸24× 深さ19cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を多量に混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 10 (第 7 図)

[位 置] A A - 59グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸63× 短軸50× 深さ16cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を多量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 11 (第 7 図)

[位 置] A A - 60グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸33× 短軸25× 深さ28cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 12 (第 7 図)

[位 置] A A - 60グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸40× 短軸39× 深さ12cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 13 (第 7 図)

[位 置] A A - 60 グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸 61 × 短軸 33 × 深さ 23cm を測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 14 (第 7 図)

[位 置] A A - 60 グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸 43 × 短軸 25 × 深さ 47cm を測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 15 (第 7 図)

[位 置] A B - 60 グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸 36 × 短軸 28 × 深さ 29cm を測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量、砂粒を少量混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 16 (第 7 図)

[位 置] A A - 61 グリッドに位置しており、基本層序第 X III 層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸 45 × 短軸 29 × 深さ 16cm を測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第 X V 層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

SP-17(第7図)

[位置] A B—60グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸42× 短軸34× 深さ31cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量、砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

SP-18(第7図)

[位置] AA—61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸23× 短軸21× 深さ11cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

SP-19(第8図)

[位置] AA—61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸38× 短軸33× 深さ20cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

SP-20(第8図)

[位置] AA—61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸54× 短軸49× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 21 (第8図)

[位 置] A B - 61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸41× 短軸31× 深さ25cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 3層に分層した。上層は浮石を混入し黒色を呈する土層、下層は砂粒を中量混入する暗褐色を呈する土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 22 (第8図)

[位 置] A B - 61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸34× 短軸26× 深さ29cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 23 (第8図)

[位 置] A B - 61グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸33× 短軸28× 深さ19cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 24 (第8図)

[位 置] A A - 62グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸53× 短軸40× 深さ24cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 25 (第8図)

[位 置] A B - 62グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸63× 短軸33× 深さ44cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。中央部に浮石を少量混入し黒褐色を呈する土層、その外側に浮石を混入し黒色を呈する土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 26 (第8図)

[位 置] A B - 62グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、長軸45× 短軸29× 深さ16cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。上層は浮石を少量混入し黒色を呈する土層で、下層は浮石を中量混入し黒褐色を呈する土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 27 (第8図)

[位 置] A B + A C - 62グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸36× 短軸22× 深さ27cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石・砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 28 (第8図)

[位 置] A A + A B - 62グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 不整形を呈し、長軸46× 短軸25× 深さ21cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 29 (第8図)

[位 置] A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第XⅢ層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸35× 短軸29× 深さ20cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第XⅤ層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 30 (第8図)

[位 置] A A・A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第XⅢ層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸46× 短軸25× 深さ21cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

[底 面] 基本層序第XⅤ層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 31 (第8図)

[位 置] A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第XⅢ層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸41× 短軸28× 深さ18cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

[底 面] 基本層序第XⅤ層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 32 (第8図)

[位 置] A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第XⅢ層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸36× 短軸27× 深さ14cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第XⅤ層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。上層は浮石を中量混入し黒褐色を呈する土層で、下層は浮石・砂粒を極微量に混入しにぶい黄褐色を呈する土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 33 (第8図)

[位 置] A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸41× 短軸34× 深さ18cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。浮石を混入する黒褐色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 34 (第8図)

[位 置] A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸37× 短軸21× 深さ18cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 2層に分層した。上層は浮石を多量に混入し黒色を呈する土層で、下層は浮石・砂粒を少量に混入しにぶい黄褐色を呈する土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 35 (第8図)

[位 置] A A - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸37× 短軸29× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量、炭化物を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 36 (第9図)

[位 置] A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸37× 短軸23× 深さ28cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 37 (第9図)

- [位 置] A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。
[重 複] なし。
[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸49× 短軸40× 深さ15cmを測る。
[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。
[堆積土] 浮石を中量混入し黒色を呈する土層による單一層である。
[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 38 (第9図)

- [位 置] A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。
[重 複] なし。
[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸42× 短軸19× 深さ15cmを測る。
[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。
[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による單一層である。
[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 39 (第9図)

- [位 置] A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。
[重 複] なし。
[平面形・規模] 不整形を呈し、長軸64× 短軸47× 深さ13cmを測る。
[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。
[堆積土] 2層に分層した。浮石を混入し黒色を主体とする土層が堆積している。
[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 40 (第9図)

- [位 置] A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。
[重 複] なし。
[平面形・規模] 楕円形を呈し、長軸47× 短軸36× 深さ22cmを測る。
[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。
[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。
[堆積土] 2層に分層した。浮石を混入し黒色を主体とする土層が堆積している。
[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 41 (第9図)

[位 置] A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整円形を呈し、長軸43× 短軸32× 深さ18cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量、炭化物を極微量に混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 42 (第9図)

[位 置] A C - 64グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 橢円形を呈し、長軸39× 短軸29× 深さ13cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 43 (第9図)

[位 置] A C - 65グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 不整円形を呈し、長軸43× 短軸32× 深さ18cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量、砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 44 (第9図)

[位 置] A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸38× 短軸34× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 45 (第9図)

[位 置] A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸38× 短軸34× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 46 (第9図)

[位 置] A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸38× 短軸34× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒褐色土による単一層である。

[出土遺物] 出土しなかった。

S P - 47 (第9図)

[位 置] A B - 65グリッドに位置しており、基本層序第X III層上面において確認した。

[重 複] なし。

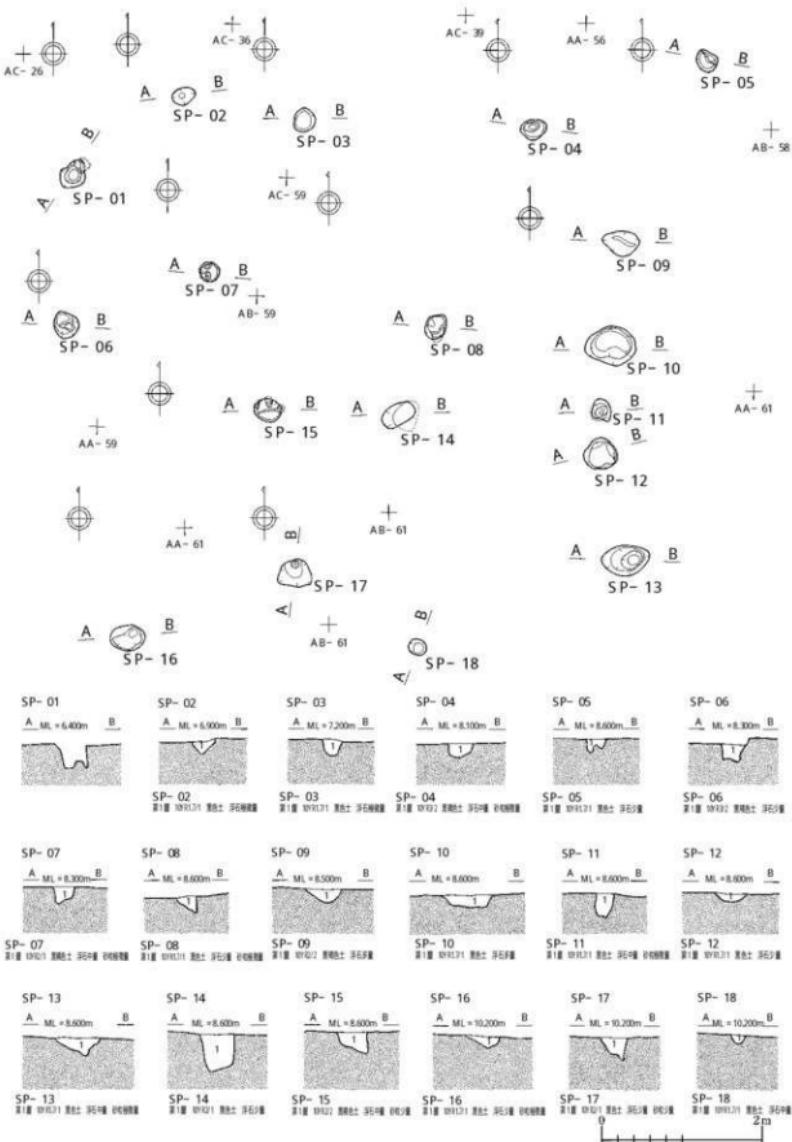
[平面形・規模] ほぼ円形を呈し、長軸38× 短軸34× 深さ15cmを測る。

[断面形・壁] 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

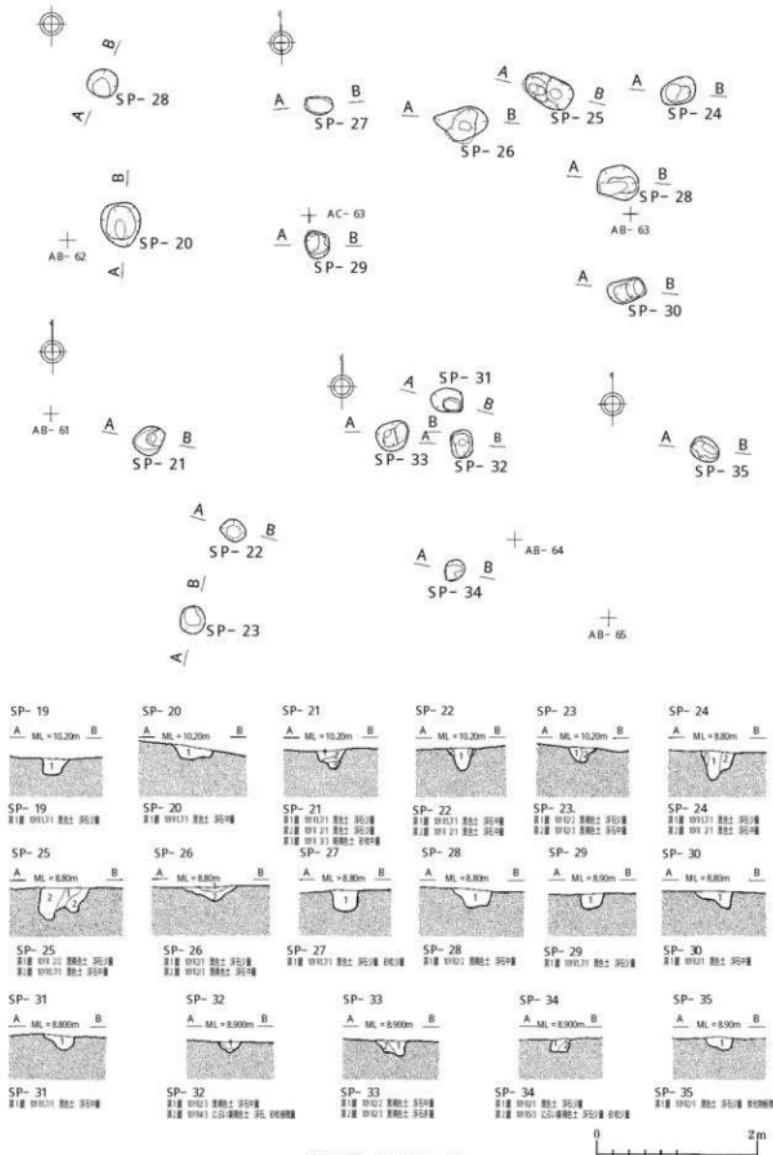
[底 面] 基本層序第X V層を掘り込んで底面としている。

[堆積土] 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

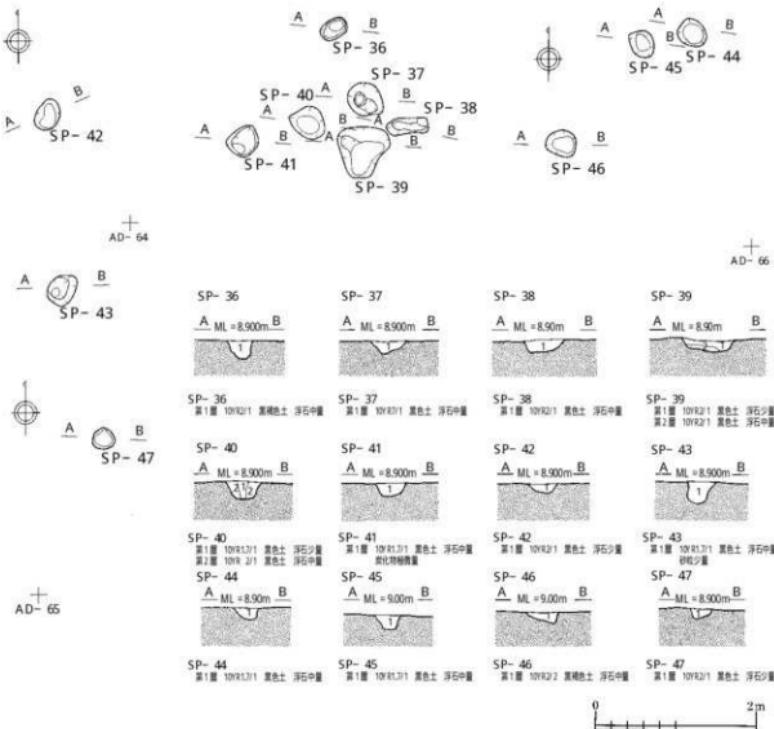
[出土遺物] 出土しなかった。



第7図 SP-01~18



第8図 SP-19~35



第9図 SP-36~47

5) 遺構外出土遺物

・土器

A 地区の遺構外からはダンボール箱換算で 5 箱分の土器が出土した。その時期をみると、縄文時代早期～後期までのものがあるが、なかでも基本層序第 X II ・ X III 層から出土した縄文時代前期初頭に帰属する土器の量が圧倒的に多い。以下、遺構外出土土器について分類ごとに記述する。

第 I 群 縄文時代早期の土器 (第10図 1 ~ 3)

X III 層から破片で 1 個体分が出土した。いずれも胴部の破片である。外面には貝殻条痕が横位に施文されており、条痕の幅は概ね 4 ~ 6 mm である。内面には文様は認められないが、3 の内面には炭化物が付着している。色調は外面が灰褐色、内面は黒褐色を呈する。器厚は 8 ~ 10mm で、焼成は堅緻である。ムシリ I 式に比定される土器である。

第 II 群 縄文時代前期初頭の土器 (第10図 4 ~ 第19図129)

本地区において最も出土量の多い土器であり、第 X II 層と X III 層から出土した。施文される文様によって、a . 刺突文・コンバス文が施される土器、b . 押し引き沈線文が施される土器、c . 器面全面に縄文が回転施文される土器に細分した。これらは縄文時代前期初頭の表館式 (佐藤・渡辺 1961) 、早稻田 6 類 (佐藤他 1957) に比定される土器である。表館式土器と早稻田 6 類土器の前後関係については未だ統一的な見解は得られていないことから、その前後関係を明らかにすることを念頭に置き、各類の土器の図版をそれぞれ層位ごとに分け、下層の第 X III 層のものから掲載している。

a . 刺突文・コンバス文が施されるもの (第10図 4 ~ 第11図)

X III 層出土資料は 4 ~ 22 、第 X II 層出土資料は 23 ~ 24 である。第 X III 層と第 X II 層から出土しているが、第 X II 層出土資料は極めて少量であり、第 X III 層出土資料が主体を占める。4 と 5 、 6 と 7 、 9 ～ 10 、 11 、 15 と 16 、 20 と 21 はそれぞれ同一個体である。全体形状が明らかなものはないため、器形については不明な点が多いが、各部位に着目するとある程度推定が可能である。口唇部形状は内削ぎが施されているものがほとんどであり、9 ～ 10 、 12 はほぼ平坦である。口縁部形状は平縁が多く、15 のみ波状を呈する。口頸部は 4 ~ 7 、 9 、 15 のようにややくびれているものが多く、14 のみ直線的な器形である。胴部は底部にむかって 18 、 22 のように窄まる形状を呈するものと思われる。底部の破片は 21 ～ 22 であり、22 は極めて径の小さな底部である。内面にはミガキが認められるものがあり、いずれの胎土にも繊維の混入が認められる。

それぞれの文様要素に着目すると、個体別にみてコンバス文については大きな差異はみとめられないものの、刺突文については使用された施文具の形状によって施された刺突に差異が認められ、断面が長方形の工具によるもの (4 、 5 、 15 、 16 、 24) 、半裁竹管状の工具によるもの (6 、 7 、 9 、 11 、 12 、 18) 、薄片状の工具によるもの (8 、 9 ～ 11 、 13 、 20 ～ 21) 、断面が円形の工具によるもの (19) 、原体の圧痕によるもの (22) がみられる。9 ～ 11 の個体は断面が長方形の工具による刺突と半裁竹管状の工具による刺突の両者が併存し、特に竹管状の工具による刺突は半裁竹管の内側を押し付けたような「押し引き」に近い文様であり、刺突文とコンバス文はヘラ状工具による沈線で区画されている。12 は沈線により前もって区画を設け、半裁竹管による刺突を施している。文様構成に着目すると刺突文及びコンバス文がセットで施文されるものがほとんどである。刺突文及びコンバス文のみ確認でき

る資料も存在するが、破片であるためにセットで確認できなかったものも存在すると思われる。刺突文とコンバス文がセットで施されているものには、刺突文とコンバス文が重層的に施されているもの（4・5、9～11、21・22）、刺突列による三角繋ぎの区画が構成されその内部にコンバス文が充填されるもの（15・16）、口縁上部及び胴部下半に数条の刺突列とコンバス文が1単位ずつ限定的に施されているもの（6・7、18）、口縁上部に刺突列、胴部にコンバス文が施されるもの（14）がみられる。地文をもつものについてはほとんどがループ文であるが、14を除いてやや太めの原体によつて施されている。20については太めのL原体を縦位に押圧している。

本類土器は刺突文とコンバス文をメルクマールとする表館式・芦野I群に比定される土器である。
b. 押し引き沈線文が施されるもの（第12図～第13図50）

第XIII層出土資料は25～31、第XI層出土資料は32～50である。a類と同様に第XIII層・第XI層から出土しているが、第XIII層出土資料は少なく、第XI層出土遺物が主体を占める。25と27、29と30、36～38、40～43はそれぞれ同一個体である。全体形状が明らかなものはないが、各部位の形状からある程度の推定が可能である。口唇部形状は平坦に成形されているものが多く、口縁部形状は平縁と波状を呈するものがあり、後者はやや外反するものが多い。頸部においてa類のように若干のくびれを有するものは無くほぼ直線的である。底部は29～31、49・50のように尖底を呈する。いずれの胎土においても纖維の混入が認められる。内面にミガキが認められるものが多い。各資料の器面に施されている押し引き沈線による凹みを破断面から観察するといずれもその断面は半円状を呈し、半裁竹管状の工具ないし断面が円形の工具が想定される。その径は3～4mmである。多くは押し引きによって沈線状に落ち込むが、28、45のように押し引きが浅いもの、29・30、48のように「押し」を強く「引き」を弱く施し、一見刺突文状にみえるものもある。文様構成をみると、地文を有し数条の押し引き沈線文が口縁部ないし底部に限定的に施されるもの（25～38、45、47～49）と、器面全面に押し引き沈線文が施されるもの（39～44、46、50）に細分できる。前者の地文にはループ文、縄端回転文、斜縄文がみられる。後者は直線及び曲線状の押し引き沈線文により幾何学的な文様を構成している。

本類土器は押し引き沈線文をメルクマールとする早稻田6類に比定される土器である。
c. 器面全面に縄文が回転施文されるもの（第13図51～第15図）

更に文様によって、1. ループ文が施されるもの、2. 縄端回転文が施されるもの、3. 斜縄文・羽状縄文が施されるものに細分できる。いずれの胎土にも纖維が混入する。

1. ループ文が施されるもの（51～58）

末端にループをもつ原体が回転施文された土器である。第XIII層出土資料は51、第XI層出土資料は52～58である。第XI層出土資料が主体を占める。口唇部形状は51においては内削ぎがみられるがそれ以外は平坦に整形されている。口縁部形状は平縁と波状を呈するものがある。胴部形状は54を除いてほとんどがほぼ直線的に口縁部方向に立ち上がる。51を除いて、内面にはミガキが認められる。文様は54を除いて、いずれも全面にループ文が重層的に施されており、56はループをもつ原体によって羽状縄文が施されている。第XIII層から出土した51に使用されている原体は第XI層出土資料に比べてかなり太く、この施文原体の差異以外にも口唇部形状・内面調整においても52～58とは差異が認められる。54はループ文が口縁部に限定され、胴部はL R（0段多条）を回転方向を変えることによって羽状を構成しており、この文様構成のほか、胴部が張り出し、頸部がくびれ、口縁が外反するという器形上の点においても、他の資料とは異質な土器である。

本類土器について、51は表館式、52・53、55～58は早稻田6類、54は大木1式に比定される。

2 . 縄端回転文が施されるもの（第15図59～64）

全て破片資料である。第X III層出土資料は59～61、第X II層出土資料は62～64である。口縁部形状は平縁のものと波状を呈するものがある。口唇部形状はいずれもほぼ平坦に整形されている。口縁部は61、64はやや外反するが、それ以外は直線的に立ち上がる。いずれの内面においてもミガキが認められる。文様は縄端回転文が重層的に施されている。

本類土器は早稻田6類土器に比定される土器である。

3 . 斜繩文・羽状繩文が施されるもの（第15図65～67）

全て口縁部付近の破片資料である。第X III層出土資料は65、第X II層出土資料は66・67である。口縁部形状はいずれも平縁と考えられ、ほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は65、67はやや丸みを帯びるが、66は平坦に整形されている。66・67の内面にはミガキがみとめられる。文様はいずれも単節繩文が施されており、65は羽状を呈する。

本類土器は口唇部形状からみて早稻田6類に比定される可能性が高い。

d . 胴部・底部の資料（第16～第19図131）

a～c類に分類し得ない胴部・底部の破片資料を一括した。いずれも繩文の回転により文様が施されている資料である。第X III層出土資料は68～103、第X II層出土資料は104～131である。ループ文が施されるものは68～79、104～115、縄端回転文が施されるものは80～92、116～125、斜繩文・羽状繩文が施されるものは93～103、126～131である。各文様要素によって第X III層・X II層出土資料を比較すると、ループ文・縄端回転文については細めの原体によって施文される第X II層出土資料に比べ第X III層出土資料はかなり太い原体によって施文されるものが多い。ループ文が施されているものは内面にミガキが認められるものと認められないものがあるが、縄端回転文と斜繩文・羽状繩文が施されているものについてはほとんどの内面においてミガキが認められる。

a～c類と比較して、太めの原体により文様が施されているものは表館式、細めの原体による縄端回転文が施されるものは早稻田6類に比定されると考えられるが、それ以外については明確に比定できない。

第IV群 繩文時代中期前半の土器（第19図132）

本地区においては第X I層から口縁部破片が1点出土した。波状口縁を呈し、隆帯が貼り付けられている。器面にはL R Lの押圧、隆帯上にはLの押圧が施されている。内面はミガキによって調整されている。纏維の混入はみられない。繩文時代中期前半の円筒上層b式土器に比定される。

第V群 繩文時代中期後半～後期初頭の土器（第19図133）

本地区においては第X層から胴部破片が1点出土した。地文としてL R繩文が施され、4～5mmの大きな沈線により連携三角文・連携渦巻文が施されている。内面はナデによって調整されている。繩文時代後期初頭の弥栄平(2)式（成田 1988）に比定される土器である。

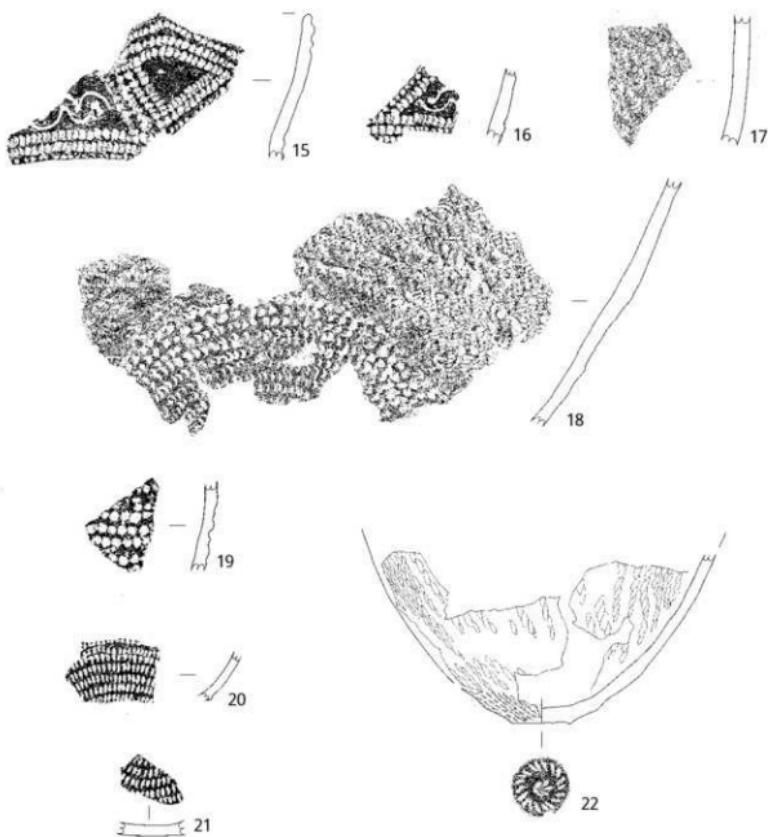
I群- 破片



II群 a類- 破片



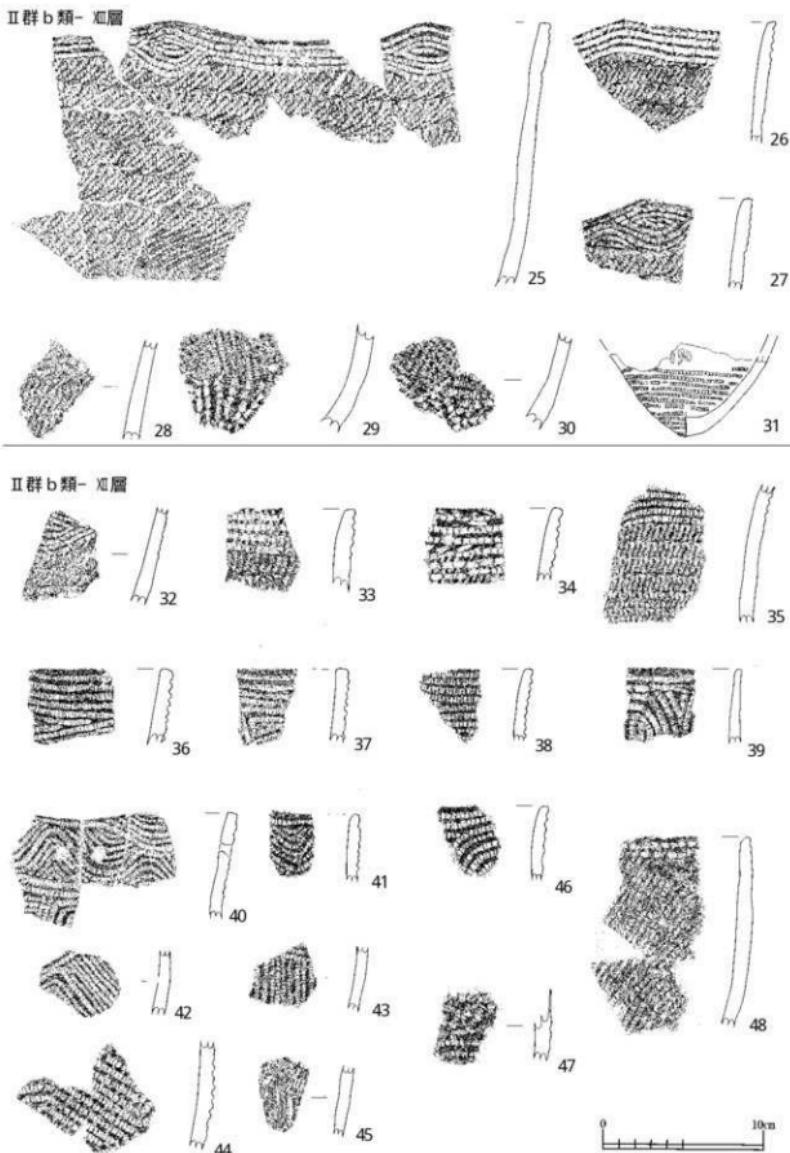
第10図 A地区遺構外出土土器①



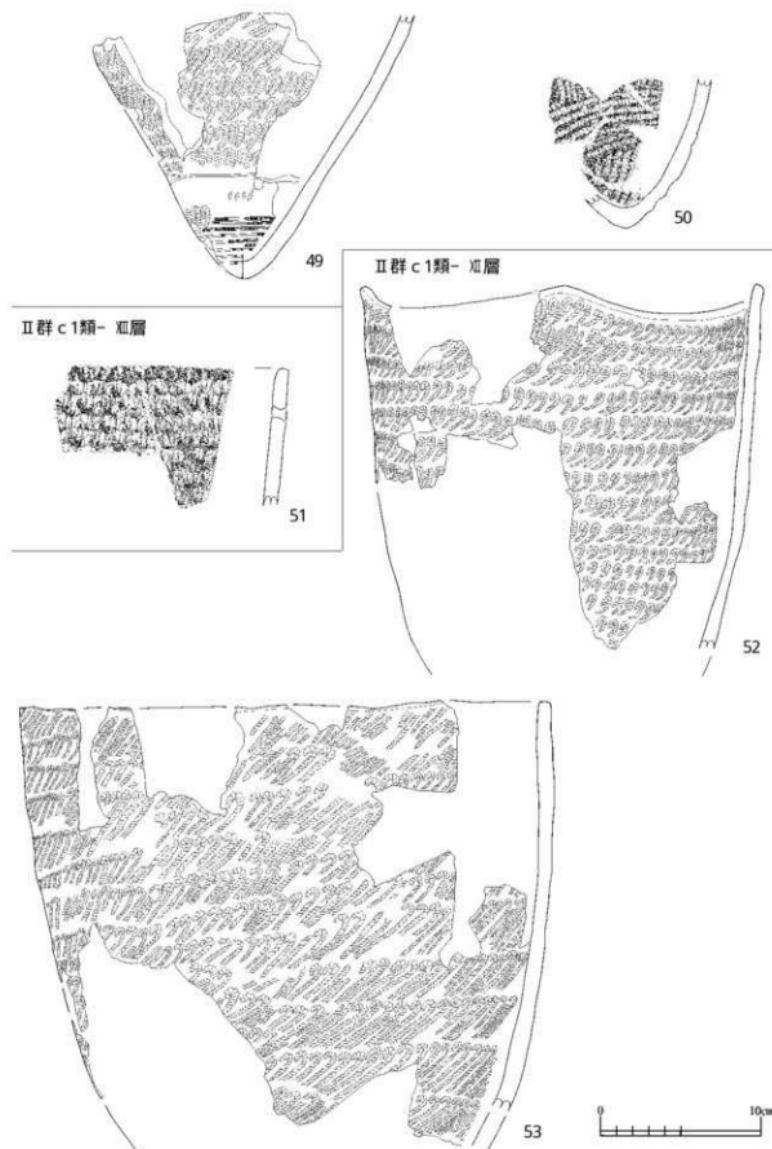
II群 a類- 破片



第11図 A地区遺構外出土土器②



第12図 A地区遺構外出土土器③

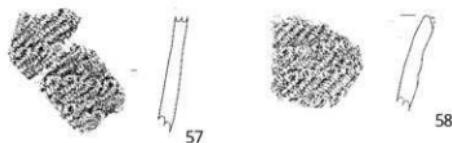
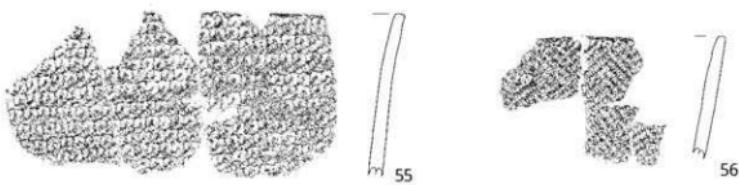


第13図 A地区遺構外出土土器④

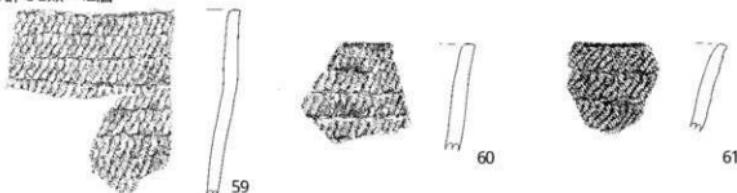


54

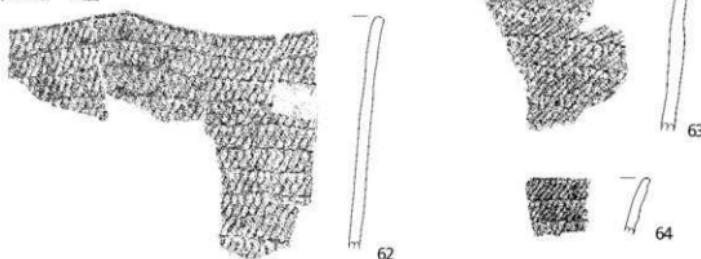
第14図 A地区遺構外出土土器⑤



II群 c 2類- X層



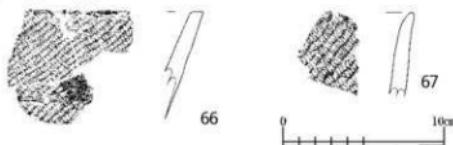
II群 c 2類- X層



II群 c 3類- X層

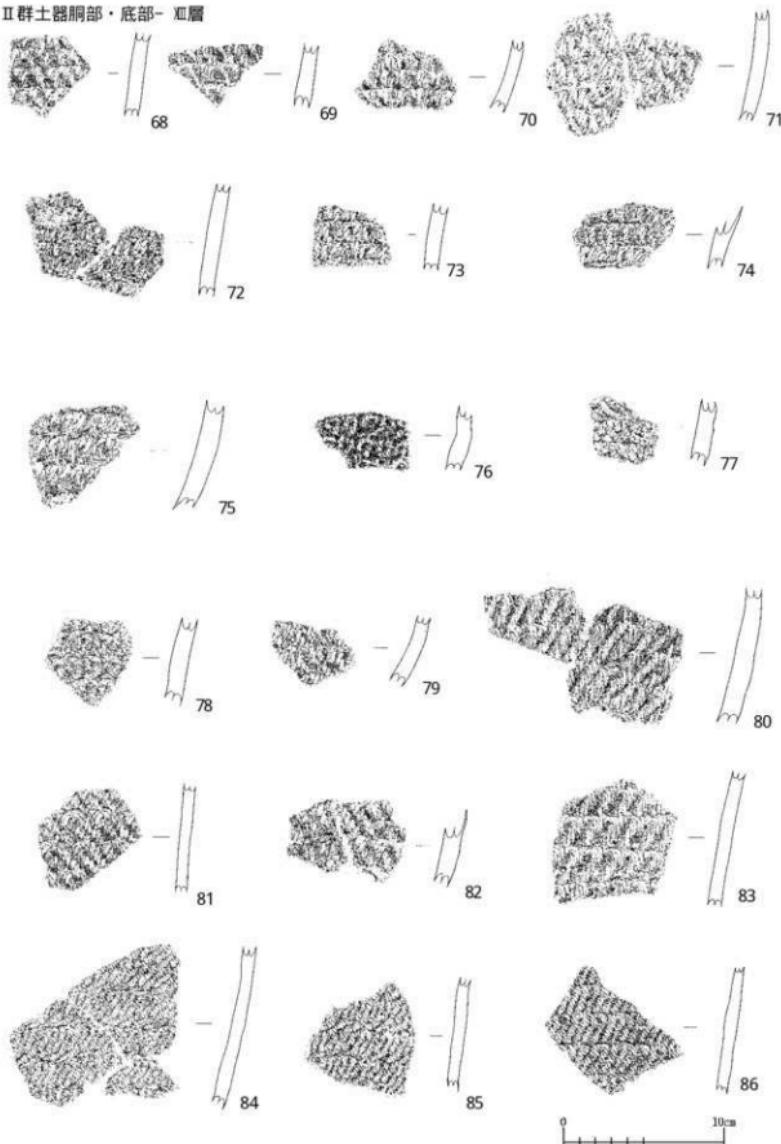


II群 c 3類- X層

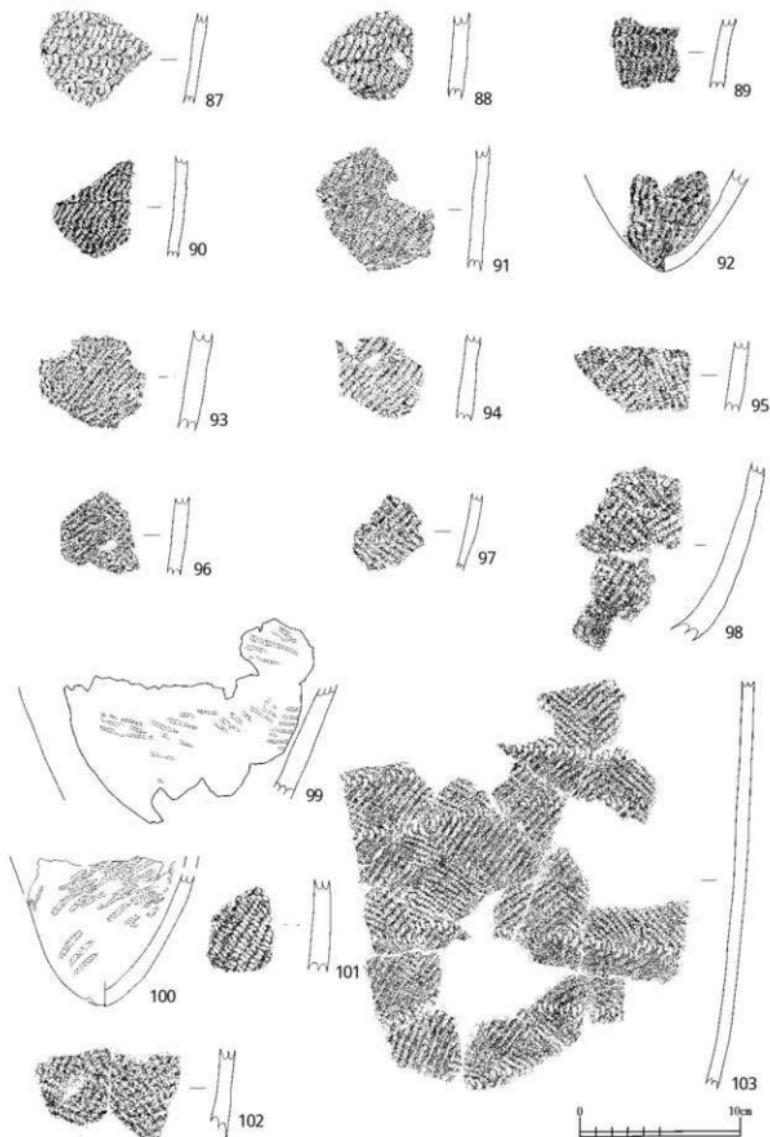


第15図 A地区遺構出土土器⑥

II群土器洞部・底部- 灰層

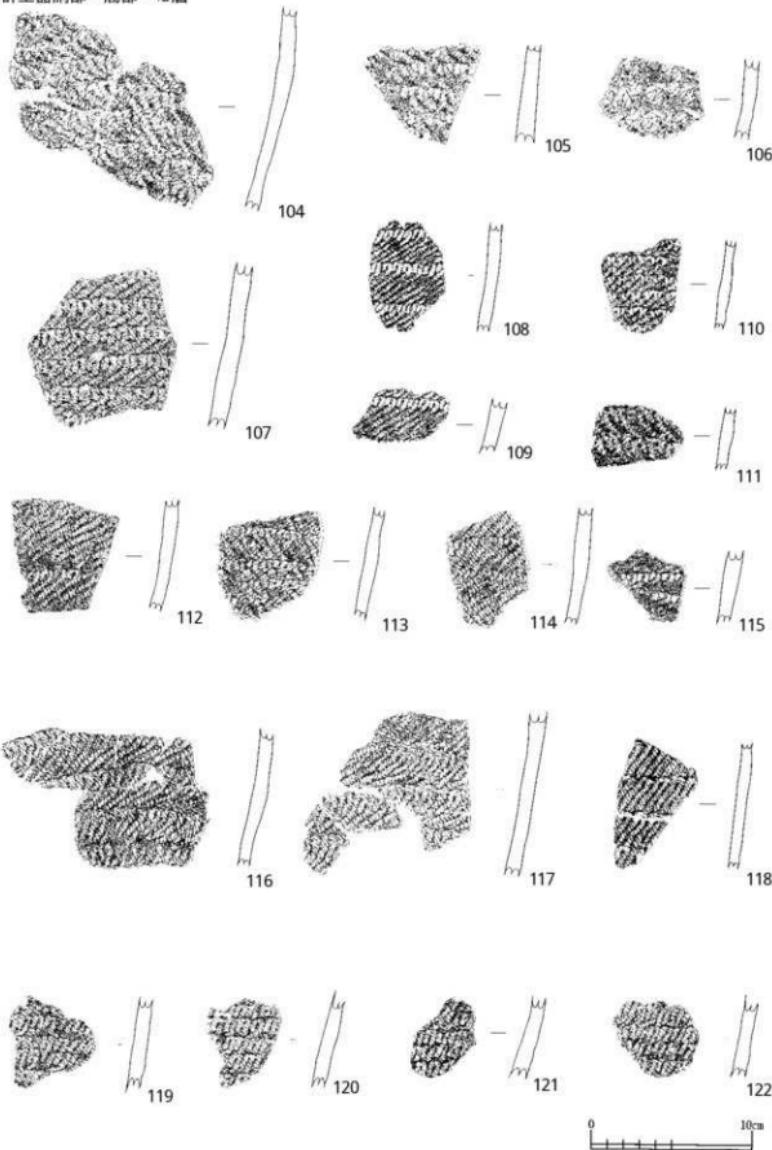


第16図 A地区遺構外出土土器⑦



第17図 A地区遺構外出土土器⑧

II群土器胸部・底部- A層



第18図 A地区遺構外出土土器⑤



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



133



第19図 A地区遺構外出土土器^⑩

・石器

A 地区の遺構外からは60点の石器が出土した（フレイク・チップ・使用痕が認められない礫を省く）。うち剥片石器が30点、礫石器が30点である。全て第XⅡ層とXⅢ層から出土した。以下、A地区の遺構外出土石器について分類ごとに記述する。

A . 石鎌（第20図1・2）

2点が出土した。いずれも平基鎌である。

2 . 平基鎌

いずれも第XⅡ層出土資料で、平面的にほぼ二等辺三角形を呈するが、1は基部においてやや丸みを帯びる。2はほぼ全面に調整が施されているが、1は全面に調整が施されておらず、特に腹面は周縁にのみ調整が施されている。

B . 石槍（第20図3・4）

2点出土した。2点ともほぼ同様の規模である。3は第XⅢ層出土資料であり、両面において押圧剥離により薄い縦長の調整を周縁に施した後、さらに距離の短い調整が再度加えられている。4は第XⅡ層出土資料であり、3と同様に両面において押圧剥離により薄い縦長の調整が施されているが、短い調整は3ほど顕著に認められない。

C . 石錐（第20図5）

第XⅡ層から1点が出土した。一側縁に沿って錐部が作出されており、両面における調整も錐部が作出されている側縁のみにみられる。

D . 石匙（第20図6～9）

4点が出土した。いずれも縦形であり、bが3点、fが1点出土した。

1 . 縦形のもの

b . 兩側縁ないし一側縁が湾曲するもの（6～8）

6・7は第XⅢ層、8は第XⅡ層出土資料である。いずれも細身の剥片を素材とし、湾曲がみられ、末端が尖っている。背面には全面的に調整が施されているが、腹面は一側縁においてのみ押圧剥離による調整が施され、ツマミ部から尖端部まで連続している。

f . 下端に向かって幅広になるもの（9）

第XⅢ層から出土している。比較的幅の広い剥片を素材としており、平面的には台形状を呈する。背面には全面的に調整が施されているが、腹面はツマミ部にノッチが施されるほかは使用に伴って発生したと考えられる微細剥離が一側縁にのみ認められる。

E . 石範（第21図10～21図）

10点が出土した。1類が8点、2類が2点である。

1 . 下端において片面のみ刃部調整されているもの（10～17）

11～13、15～17は第XⅢ層、10、14は第XⅡ層出土資料である。10・11、13～16は背面に全面的に

調整が施され、腹面における調整は両側縁に限定され、主要剥離面を大きく残している。13・14、16の下端には使用に伴って発生したと考えられる微細剥離を認めることができる。12については、上端が欠損しており、背面には両側縁と下端において調整が施され、腹面には全く調整が施されていない。17は10～16とは逆に腹面に全面的な調整が施され、背面は両側縁のみの調整で原礫面が残されている。

2. 下端において両面が刃部調整されているもの（18・19）

2点とも第X III層出土資料である。18は背面において全面的に調整が施され、腹面は上端を除く周縁に調整が施されているが主要剥離面を大きく残されている。19は腹面において全面的な調整が施され、背面は周縁が全局的に調整され、原礫面が大きく残されている。

F. 不定形石器（第22図～第23図31）

12点が出土した。20、24～27、29、31は第X III層、21～23、28、30は第X II層出土資料である。刃部の形状に着目すると、20・21は直線的な刃部、22～29は曲線的な刃部、30・31は直線的な刃部と曲線的な刃部をもつものに細分することができる。20は折損しているが、本地区から出土した定形石器の調整方法と比較すると、本来、石笛であった可能性が高い。腹面の折損部分縁辺には微細剥離が確認できる。

G. 磨製石斧（第23図32）

第X III層から1点が出土した。上半が欠損している。両面ともに欠損部の縁辺部には剥離がみられる。

I. 敲磨器類（第23図33～第25図）

24点出土した。1類が22点、2類が1点、3類が1点である。磨り、凹み、敲きが併存しているものも存在するがその場合は主体的な痕跡によって抽出した。

1. 磨り石

a. 面的に磨り痕が認められるもの（33～45）

33～36、38、40～42、44は第X III層、37、39、43、45は第X II層出土資料である。いずれもその礫における平坦面に磨り痕がみられる。33のように側縁部にも磨り痕が認められるものもある。34、38、40、42には凹み、33、43、44には敲きの痕跡が併存する。

b. 側縁に磨り痕が認められるもの（46～56）

48～50、52は第X III層、53～56は第X II層出土資料である。53～56は剥離が認められる側縁に磨り痕が認められる。46～52には剥離等の調整は認められない。

2. 凹み石（57）

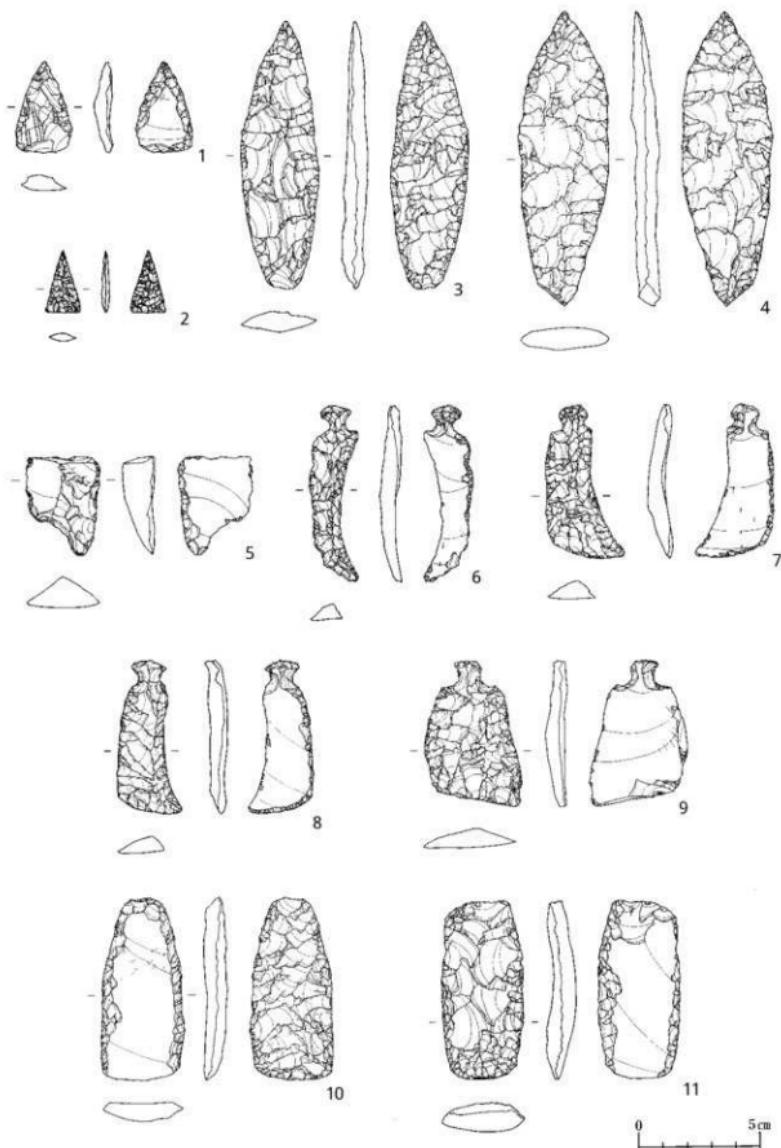
第X II層出土資料である。平面橢円形の礫の両面に凹みが認められ、側面には敲き痕が認められる。

3. たたき石（58）

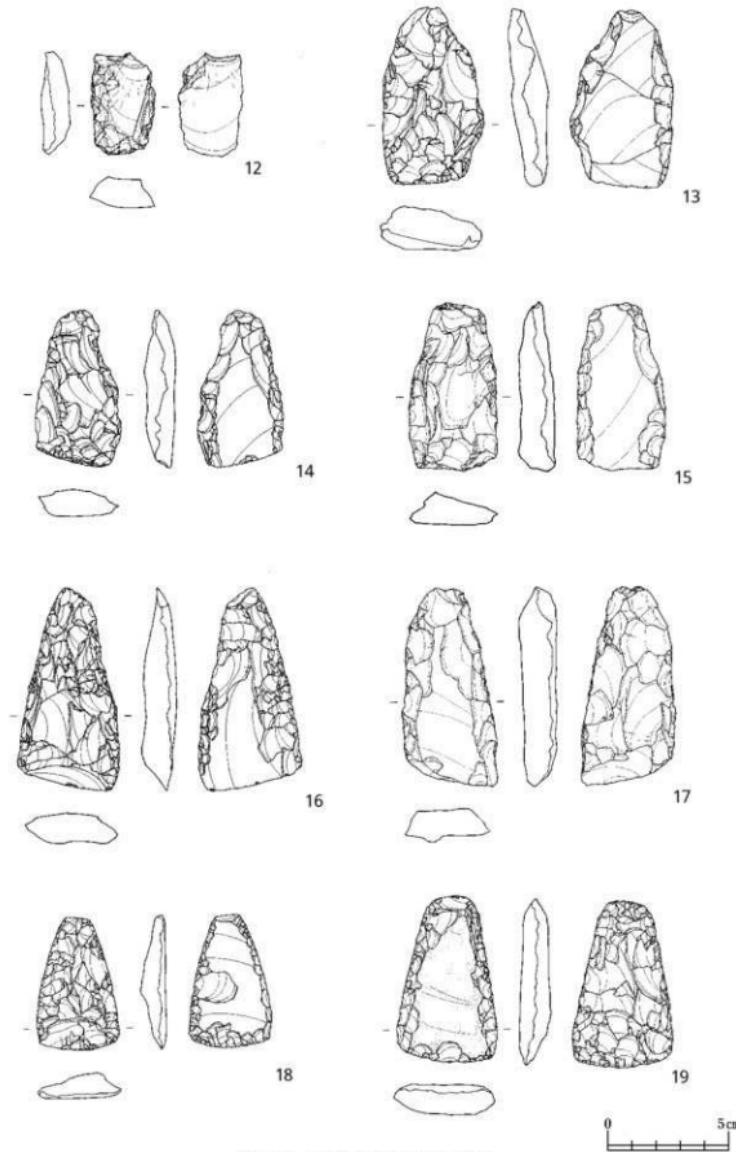
第X II層出土資料である。一部欠損しており、一方の平坦面及び側縁に敲き痕が認められる。

J. 石皿・台石（第26図）

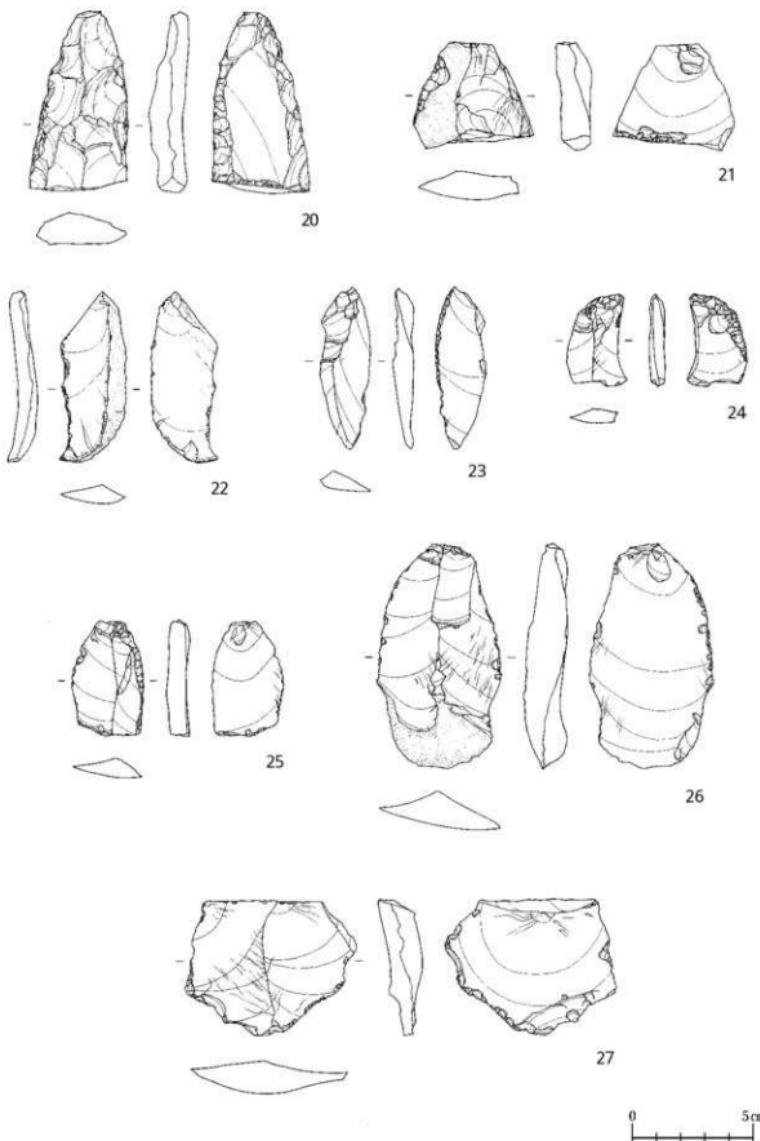
いずれも第X II層出土資料である。59は台石、60は石皿の破片である。



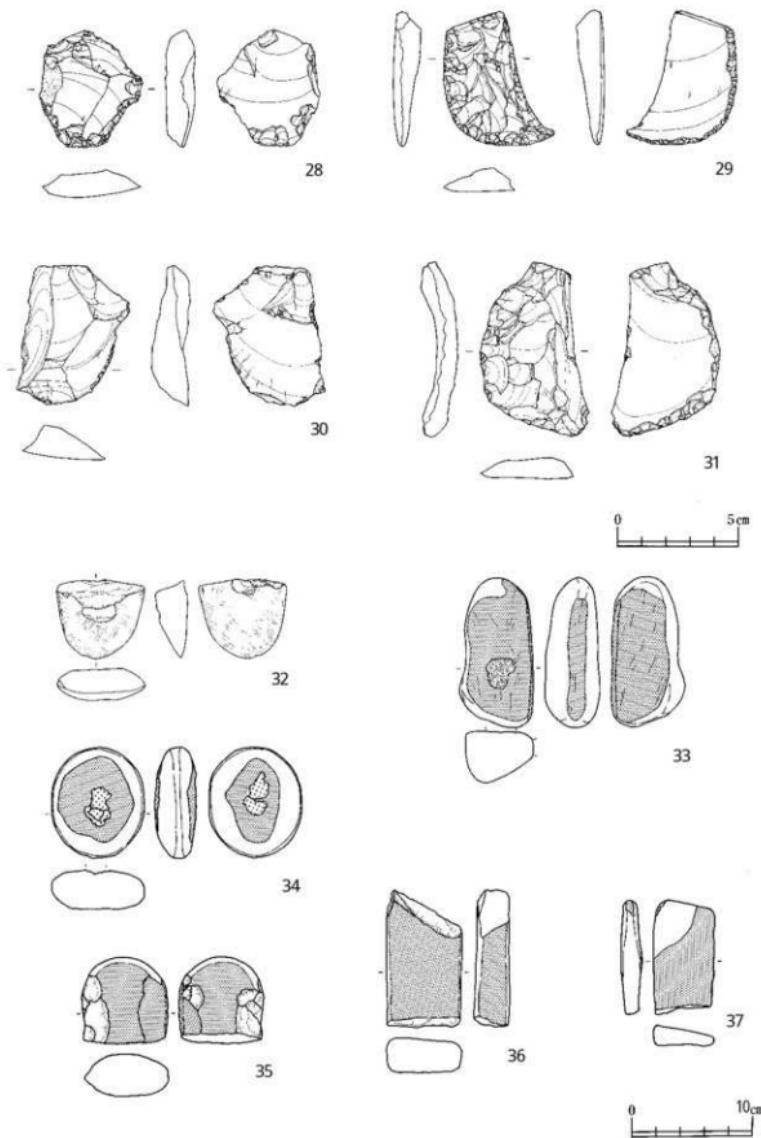
第20図 A地区遺構外出土石器①



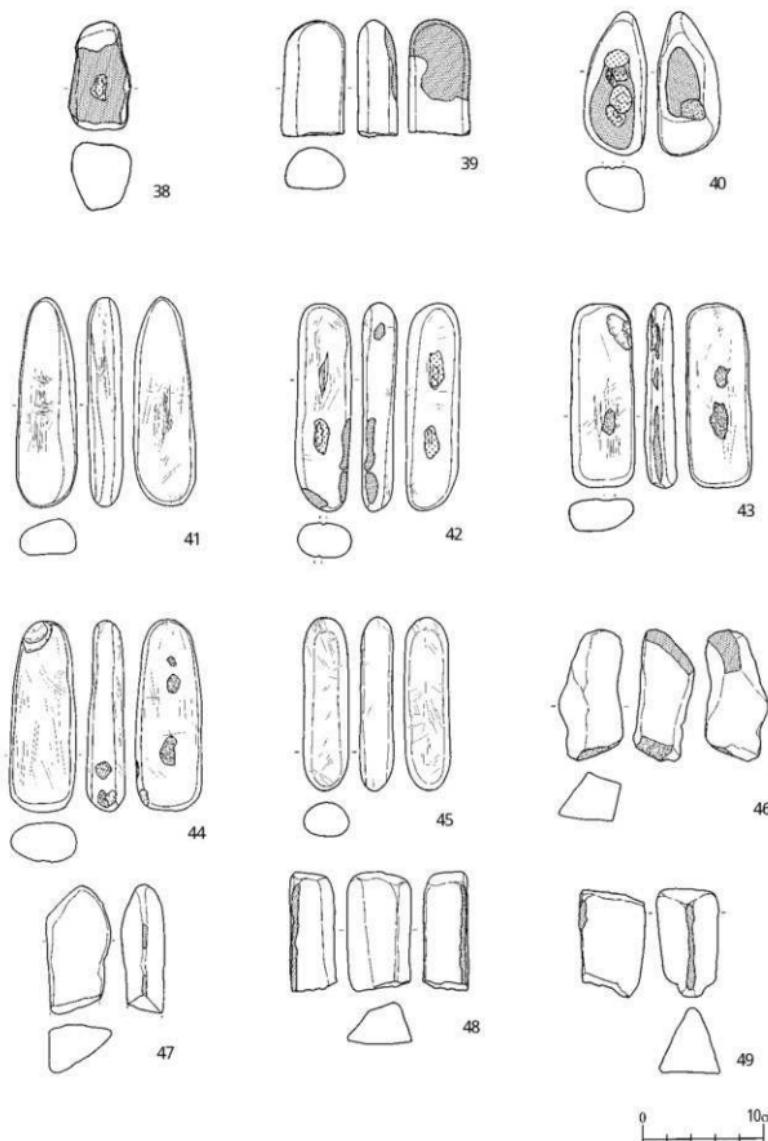
第21図 A地区遺構外出土石器②



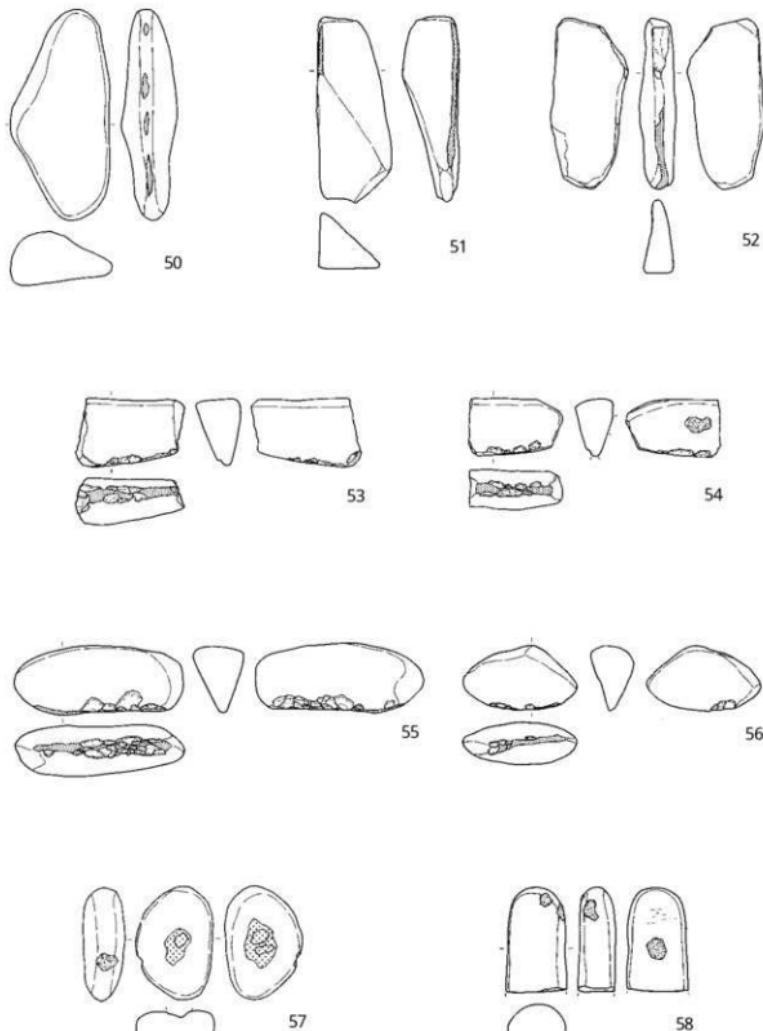
第22図 A地区遺構外出土石器③



第23図 A地区遺構外出土石器④

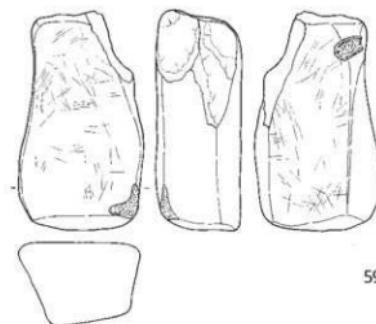


第24図 A地区遺構外出土石器⑤

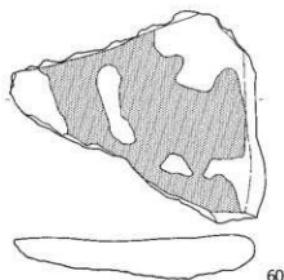


0 10cm

第25図 A地区遺構外出土石器⑥



59



60



第26図 A地区遺構外出土石器②

第2表 S I - 01出土土器観察表

番号	年度	遺構名	層位	器種	部位	文 標	内面調査	焼成	分類	備 考
1 00	SI-01	1層	深鉢	口縁部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着
2 00	SI-01	1層	深鉢	口縁部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着。通称不有り、3・4・6と同一個体
3 00	SI-01	1層	深鉢	胴 部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着。2・4・6と同一個体
4 00	SI-01	1層	深鉢	胴 部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着。2・3・6と同一個体
5 00	SI-01	1層	深鉢	胴 部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着
6 00	SI-01	1層	深鉢	胴 部	LR (0段多条)	三ガキ 堅織	IIc 3			内面に炭化物が付着。2・3・4と同一個体

第3表 S I - 01出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	量大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備 考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
7 00	SI-01	3	49	39	12	29.3	珪	F		
8 00	SI-01	1	86	83	54	624.0	安	M1a		
9 00	SI-01	1	106	112.5	27	408.0	#	M3		
10 00	SI-01	1	267	225	57	5005.0	#	N		

第4表 A地区遺構外出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 標	内面調査	焼成	分類	備 考
1 00	AA-28	X III	深鉢	胴 部	貝殻条痕文	—	堅織	I		
2 00	AA-28	X III	深鉢	胴 部	貝殻条痕文	—	堅織	I		
3 00	AA-28	X III	深鉢	胴 部	貝殻条痕文	—	堅織	I		
4 00	AB-34	X III	深鉢	口縁部	刺突文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			外面がやや剥落している。5と同一個体
5 00	AB-31	X III	深鉢	口縁部	刺突文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			4と同一個体
6 00	AB-31	X III	深鉢	口縁部	刺突文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			7と同一個体
7 00	AB-31	X III	深鉢	口縁部	刺突文・コンバス文・RL(ループ文)	ミガキ 堅織	IIa			6と同一個体
8 00	AB-25	X III	深鉢	口縁部	刺突文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			
9 00	AA-34	X III	深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			半根竹管状工具による押し引きに近い。10・11と同一個体
10 00	AB-27	X III	深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			9・11と同一個体
11 00	AD-38	X III	深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			半根竹管状工具による押し引きに近い。9・10と同一個体
12 00	AA-32	X III	深鉢	口縁部	沈線・刺突文	ミガキ 堅織	IIa			
13 00	AA-34	X III	深鉢	口縁部	刺突文	ミガキ 堅織	IIa			
14 00	AA-19	X III	深鉢	口縫部・肩	刺突文・RL(ループ文)・コンバス文	—	堅織	IIa		
15 00	AC-30	X III	深鉢	口縫部	刺突文・コンバス文	ナデ 堅織	IIa			三角繋ぎの刺突
16 00	AC-31	X III	深鉢	頭 部	刺突文・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa		"	
17 00	AA-37	X III	深鉢	胴 部	RL(ループ文)・コンバス文	ミガキ 堅織	IIa			
18 00	AA-35	X III	深鉢	胴 部	RL(ループ文)・コンバス文・刺突文	ミガキ 堅織	IIa			
19 00	AA-34 AB-34	X III	深鉢	口縫部?	刺突文	ナデ 堅織	IIa			
20 00	AC-34	X III	深鉢	肩 部	刺突文	ミガキ 堅織	IIa			
21 00	AB-29 AD-28	X III	深鉢	底 部	刺突文	ミガキ 堅織	IIa			
22 00	AB-AC-34	X III	深鉢	胴 - 底部	RL押圧・R押圧	ミガキ 堅織	IIa			
23 00	AC-28	X II	深鉢	頭 部	コンバス文・RL(ループ文)	ミガキ 堅織	IIa			
24 00	AD-31	X II	深鉢	頭 部	刺突文・RL(ループ文)	ミガキ 堅織	IIa			
25 00	AB-29	X III	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR(縹緲回転文)	—	堅織	IIb		波状口縫
26 00	AA-27	X III	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR(縹緲回転文)	—	堅織	IIb		波状口縫
27 00	AB-29 AD-28 AC-2	X III	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR(縹緲回転文)	—	堅織	IIb		波状口縫
28 00	AB-25	X III	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR(縹緲回転文)	—	堅織	IIb		
29 01	AC-16	X III	深鉢	底 部	LR・押し引き沈線文	—	堅織	IIb		尖底
30 01	AC-16	X III	深鉢	底 部	LR(羽状)・押し引き沈線文	ミガキ 堅織	IIb			尖底
31 00	AA-28	X III	深鉢	底 部	LR(ループ文)・押し引き沈線文	ナデ 堅織	IIb			尖底
32 00	AA-25	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR	—	堅織	IIb		波状口縫
33 00	AC-26	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR	—	堅織	IIb		
34 01	AB-20	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文	—	堅織	IIb		
35 01	AA-20	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文・LR	ミガキ 堅織	IIb			
36 00	AC-28	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文	—	堅織	IIb		37と同一個体
37 00	AB-28	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文	—	堅織	IIb		36と同一個体
38 01	AA-20	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文	ミガキ 堅織	IIb			
39 00	AC-28	X II	深鉢	口縫部	押し引き沈線文	—	堅織	IIb		

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文様	内面調整	焼成	分類	備考
40 00	AC- 27	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	—	堅織	II b	41・42・43と同一個体、穿孔が2ヶ所みられる	
41 00	AC- 27	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	—	堅織	II b	40・42・43と同一個体	
42 00	AC- 28	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	—	堅織	II b	40・41・43と同一個体	
43 00	AC- 29	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	—	堅織	II b	40・41・42と同一個体	
44 01	AB- 20	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	ミガキ	堅織	II b		
45 00	AC- 27	X II	深鉢	脇部	押し引き沈線文	—	堅織	II b		
46 01	AB- 16	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文	ナデ	堅織	II b		
47 01	AA- 20	X II	深鉢	脇部	押し引き沈線文・LR(ループ文)	ナデ	堅織	II b		
48 01	AD- 18	X II	深鉢	口縁部	押し引き沈線文・RL	ナデ	堅織	II b		
49 00	AI- 28	X II	深鉢	脇部・底部	LR(ループ文)・押し引き沈線文	ナデ	堅織	II b		
50 00	AC- 27	X II	深鉢	底部	押し引き沈線文	—	堅織	II b	尖底	
51 00	AB- 31	X III	深鉢	口縁部	RL(ループ文)	—	堅織	II c1	穿孔有り。太い原体	
52 00	AC- 27	X II	深鉢	口縫部・脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II c1	波状口縁	
53 00	AC- 28	X II	深鉢	口縫部・脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II c1		
54 01	AD- 18	X II	深鉢	口縫部・脇部	LR(ループ文)・LR(羽状構成)	ナデ	堅織	II c1	波状口縁。脇部下半に穿孔が数箇所ある	
55 01	AB-AC-16-18	X II	深鉢	口縫部	LR(ループ文)	ミガキ	堅織	II c1	口唇が平坦に調整されている	
56 01	AC- 16	X II	深鉢	口縫部	LR(羽状構成)	ミガキ	堅織	II c1	口唇が平坦に調整されている	
57 00	AB- 29	X II	深鉢	口縫部	LR(ループ文)	ミガキ	堅織	II c1	58と同一個体	
58 00	AB- 29	X II	深鉢	口縫部	LR(ループ文)	ミガキ	堅織	II c1	口唇部が平坦、やや剥落する。57と同一個体	
59 00	AB- 29	X III	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2	波状口縁	
60 00	AA- 26	X III	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2		
61 00	AA- 26	X III	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2	口唇がやや丸みをおびる	
62 00	AB- 29	X II	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2	波状口縁。	
63 01	AB- 15	X II	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2	口唇が平坦に調整されている	
64 00	AC- 28	X II	深鉢	口縫部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II c2	口唇が平坦に調整されている	
65 00	AA- 26	X III	深鉢	口縫部	LR(羽状構成)	ミガキ	堅織	II c3		
66 00	AC- 27	X II	深鉢	口縫部	LR(0段多条)	ミガキ	堅織	II c3	口唇部剥落	
67 00	AC- 27	X II	深鉢	口縫部	LR(0段多条)	ミガキ	堅織	II c3	口唇部剥落	
68 00	AA- 34	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	69と同一個体	
69 00	AA- 34	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1	原体の幅が太い(4mm)・68と同一個体	
70 00	AB- 28	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	原体の幅が大きい(7mm)	
71 00	AA- 35	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1	原体の幅が大きい(7mm)	
72 00	AB- 31	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	73・74と同一個体	
73 00	AB- 31	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	72・74と同一個体	
74 00	AB- 31	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	72・73と同一個体	
75 00	AA- 34	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	ミガキ	堅織	II d1	原体の幅が大きい(7mm)	
76 01	AA- 18	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1		
77 00	AB- 34	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1		
78 00	AB- 25	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1		
79 00	AA- 35	X III	深鉢	脇部	RL(ループ文)	—	堅織	II d1	原体の幅が大きい(6mm)	
80 00	AB- 34	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	—	堅織	II d1	原体の幅が大きい(6mm)	
81 00	AA- 35	X III	深鉢	脇部	RL(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d1	原体の幅が大きい(6mm)	
82 00	AC- 30	X III	深鉢	脇部	RL(繩端回転文)	—	堅織	II d1		
83 00	AA- 34	X III	深鉢	脇部	RL(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	原体の幅がなり太い(8mm)	
84 00	AA- 28	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	85と同一個体	
85 00	AD- 28	X III	深鉢	脇部	RL(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	84と同一個体	
86 01	AB- 19	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2		
87 00	AB- 29	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	88と同一個体	
88 00	AA- 27	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	87と同一個体	
89 00	AC- 26	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2		
90 00	AA- 27	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2		
91 00	AA- 37	X III	深鉢	脇部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	内面に炭化物が付着	
92 00	AA- 26	X III	深鉢	底部	LR(繩端回転文)	ミガキ	堅織	II d2	尖底	
93 00	AA- 28	X III	深鉢	脇部	LR(0段多条)	ミガキ	堅織	II d3		
94 00	AA- 37	X III	深鉢	脇部	RL(0段多条)	ミガキ	堅織	II d3		
95 00	AA- 26	X III	深鉢	脇部	RL(0段多条)で羽状構成	ミガキ	堅織	II d3		
96 00	AB- 27	X III	深鉢	脇部	LR(0段多条)で一部羽状を構成	ミガキ	堅織	II d3		
97 00	AA- 37	X III	深鉢	脇部	LR+RL(0段多条・羽状構成)	ミガキ	堅織	II d3		

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文様	内面調整	焼成	分類	備考
98 01	AC- 18	X III	深鉢	脇部- 底部	RL (羽状構成)	—	堅緻	II d3	尖底	
99 00	AB-29・30	X III	深鉢	脇 部	RL	ナデ	堅緻	II d3		
100 00	AA- 27	X III	深鉢	脇部- 底部	RL	ナデ	堅緻	II d3	尖底	
101 01	AA- 20	X III	深鉢	脇 部	LR	ナデ	堅緻	II d3		
102 01	AC- 20	X III	深鉢	脇 部	RL	ナデ	堅緻	II d3		
103 01	AA- 28	X III	深鉢	脇 部	LR (結束第1種羽状)	ナデ	堅緻	II d3		
104 00	AD- 31	X II	深鉢	脇 部	RL (ループ文)	ミガキ	堅緻	II d1		
105 00	AC- 33	X II	深鉢	脇 部	RL (ループ文)	—	堅緻	II d1		
106 00	AC- 37	X II	深鉢	脇 部	RL (ループ文)	—	堅緻	II d1		
107 01	AB- 21	X II	深鉢	脇 部	LR (ループ文)	ミガキ	堅緻	II d1		
108 00	AC- 27	X II	深鉢	脇 部	LR (ループ文)	—	堅緻	II d1	109と同一個体	
109 00	AC- 28	X II	深鉢	脇 部	LR (ループ文)	—	堅緻	II d1	108と同一個体	
110 00	AC- 29	X II	深鉢	脇 部	RL (ループ文)	ミガキ	堅緻	II d1		
111 00	AD- 31	X II	深鉶	脇 部	RL (ループ文)	—	堅緻	II d1		
112 01	AB- 20	X II	深鉶	脇 部	LR (ループ文)	ミガキ	堅緻	II d1		
113 01	AB- 20	X II	深鉶	脇 部	RL (ループ文)	ナデ	堅緻	II d1		
114 01	AC- 18	X II	深鉶	脇 部	RL (ループ文)	ナデ	堅緻	II d1		
115 01	AC- 18	X II	深鉶	脇 部	RL (ループ文)	ナデ	堅緻	II d1		
116 00	AB- 29	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2	縫合部付いたれられ文様が記されている。既削り、115月- 傷	
117 00	AD- 28	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2	縫合部付いたれられ文様が記されている。既削り、114月- 傷	
118 00	AD- 29	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2		
119 00	AC- 27	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2	文様帶の上下幅がcm. 120- 122と同一個体	
120 00	AC- 27	X II	深鉶	底	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d3	文様帶の上下幅がcm. 119- 121- 122と同一個体	
121 00	AC- 27	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2	文様帶の上下幅がcm. 119- 120- 122と同一個体	
122 00	AC- 27	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2	文様帶の上下幅がcm. 119- 121と同一個体	
123 01	AC- 28	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ミガキ	堅緻	II d2		
124 01	AA- 20	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ナデ	堅緻	II d2		
125 01	AA- 22	X II	深鉶	脇 部	LR (纏端回転文)	ナデ	堅緻	II d2		
126 00	AC- 29	X II	深鉶	脇 部	LR (O段多条)	ミガキ	堅緻	II d3		
127 00	AC- 29	X II	深鉶	脇 部	LR (O段多条)	ミガキ	堅緻	II d3		
128 01	AA- 21	X II	深鉶	脇 部	LR (羽状構成)	ナデ	堅緻	II d3		
129 01	AA- 22	X II	深鉶	脇 部	LR (羽状構成)	ナデ	堅緻	II d3	尖底	
130 01	AC- 17	X II	深鉶	脇部- 底部	RL (羽状構成)	—	堅緻	II d3	尖底	
131 01	AB- 16	X II	深鉶	脇部- 底部	LR (羽状構成)	ミガキ	堅緻	II d3	尖底	
132 00	AA- 54	X I	深鉶	口縁部	隕帶・ L 印痕	ナデ	堅緻	IV		
133 00	AA- 36	X	深鉶	脇 部	連携三角文・ 連携渦巻文・ LR	ナデ	堅緻	V		

第5表 A地区遺構外出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
1 00	AC- 29	X II	37	23	7	4.8	珪	A2		
2 00	AC- 27	X II	25	14	3	2.9	#	A2		
3 00	AA- 26	X III	110	32	11	32.2	#	B		
4 01	AB- 20	X II	121	37	12	42.0	#	B		
5 00	AB- 30	X II	40	31	13	14.3	#	C		
6 00	AC- 29	X II	73	20	9	8.0	#	D1b		
7 00	AC- 27	X II	63	32	8	11.5	#	D1b		
8 01	AB- 20	X III	63	26	9	10.7	#	D1b		
9 00	AB- 30	X II	60	40	8	16.1	#	D1f		
10 00	AC- 27	X II	75	36	9	30.1	#	E 1		
11 00	AA- 35	X III	74	35	14	29.4	#	E 1		
12 01	AB- 18	X III	42	26	11	11.1	#	E 1		
13 00	AA- 28	X III	74	42	18	27.7	#	E 1		
14 00	AC- 27	X II	64	36	13	17.9	#	E 1		
15 01	AB- 20	X III	69	36	14	22.6	#	E 1		
16 00	AA- 55	X III	84	42	15	46.7	#	E 1		
17 01	AB- 18	X III	81	38	16	28.6	#	E 1		

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
18 00	AA- 37	X III		35	34	10	15.3	#	E 2	
19 00	AB- 28	X III		69	42	12	42.9	珪	E 2	
20 01	AC- 18	X III		74	41	14	42.6	#	F	
21 00	AC- 31	X II		50	44	15	29.3	#	F	
22 01	AC- 18	X II		70	27	8	15.0	#	F	
23 00	AC- 31	X II		66	21	9	7.4	#	F	
24 00	AB- 28	X III		38	25	7	6.3	#	F	
25 00	AA- 32	X III		53	30	10	12.4	#	F	
26 00	AB- 28	X III		93	52	18	63.3	#	F	
27 00	AB- 25	X III		71	56	18	48.2	#	F	
28 00	AC- 34	X II		48	43	13	23.8	#	F	
29 00	AA- 34	X III		55	46	12	19.9	#	F	
30 01	AC- 17	X II		57	46	15	29.6	#	F	
31 01	AB- 28	X III		71	45	14	33.0	#	F	
32 00	AB- 28	X III		62	72	29	163.4	輝	G	
33 01	AA- 20	X III		125	60	45	468.7	安	I 1a	
34 00	AC- 30	X III		90	76	34	326.0	#	I 1a	
35 00	AA- 29	X III		70	69	34	280.0	変	I 1a	
36 00	AA- 26	X III		111	63	30	326.0	石	I 1a	
37 00	AD- 28	X II		93	51	17	114.0	安	I 1a	
38 01	AA- 19	X III		88	48	45	342.3	#	I 1a	
39 01	AC- 18	X II		92	50	34	256.8	石	I 1a	
40 00	AA- 26	X III		118	51	37	300.0	安	I 1a	
41 01	AB- 20	X III		171	49	29	362.9	石	I 1a	
42 01	AC- 18	X III		169	44	27	339.0	#	I 1a	
43 01	AA- 22	X II		151	52	26	295.3	#	I 1a	
44 01	AB- 20	X III		155	54	31	380.5	#	I 1a	
45 00	AC- 31	X II		142	37	28	226.0	#	I 1a	
46 00	AC- 28	X II		108	52	49	246.0	流	I 1b	
47 00	AC- 29	X II		94	35	52	176.0	安	I 1b	
48 01	AA- 20	X III		99	53	36	252.3	#	I 1b	
49 00	AB- 31	X III		98	53	37	286.0	#	I 1b	
50 00	AC- 31	X III		89	51	54	288.0	石	I 1b	
51 01	AC- 18	X II		171	81	43	634.0	安	I 1b	
52 00	AA- 32	X III		152	60	46	414.0	#	I 1b	
53 00	AD- 28	X II		139	30	60	324.0	#	I 1b	
54 00	AC- 27	X II		90	37	56	242.0	石	I 1b	
55 01	AD- 18	X II		86	47	47	161.2	安	I 1b I 1a	
56 00	AC- 29	X II		138	42	54	392.0	#	I 1b	
57 01	AA- 18	X II		93	64	33	242.7	輝	I 2	
58 01	AB- 18	X II		85	48	32	208.9	石	I 3	
59 00	AC- 27	X II		180	102	70	1902.0	安	J	
60 00	AA- 37	X IV		210	173	34	1202.0	#	J	

第2節 B地区の調査

B地区はグリッドライン70~92の遺跡範囲内における丘陵縁辺部にあたり、標高は11~14mである。丘陵地における急斜面から緩斜面に移行する部分に相当し、A地区に比べるとやや斜度のある地形である。本地区は全域にわたって削平を受けており、本地区南側においては多量の廃材等が出土し、北側においては表土を除去すると直ちに第XV層が現れるという状況であったことから、遺構・遺物は残存していないと思われたが、南側の廃材等を混入する表土を除去したところ、多量の土器・石器が出土する範囲（第1号遺物集中ブロック）を検出した。これ以外には遺構・遺物を検出しなかった。

1. 検出遺構と出土遺物

1) 第1号遺物集中ブロック

S-U-88-91グリッドに位置する。地形的には南~北へ下るごく緩やかな斜面地に相当する。

当初、本地域周辺の刈り払いを行った時点で地面からビニール片やプラスチック廃材等が確認でき、かなり削平を受けていることが推定されたが、その攢乱土を除去したところ、土層が残存しており、土器や石器を多量に混入する土層が確認できた。これらの多量の遺物は平面的には範囲をもって拡がっており、遺跡内における他の地点と比べて遺物の出土量が突出していたことから、「捨て場」と考えられ、第1号遺物集中ブロック（以下、ブロック）とした。

本ブロックは、東~北側を用水路、西側を工事用道路、南側を農地専用の取り付け道路に囲まれており、これらの築造によって削平を受け範囲が減じられていると考えられ、本来の状態を示すものではないと考えられる。本ブロックに設定したセクションベルトにおける土層観察の結果、6層に分層できたが、周囲がかなり削平を受けていることから周辺の土層との連続性が不明確であり、各土層における混入物も周辺と比べて特異であることから、基本層序との対応関係を明らかにすることはできなかった。遺物は第3層及び第4層から出土しており、その出土量はダンボール箱換算で47箱分である。土器は全て縄文時代前期中葉に帰属する土器（第III群土器）であり、横転してそのまま土圧により押し潰されたような出土状態を呈するもののほか多くが破片で出土した。復元できた土器は70個体以上にのぼる。石器は定形石器・不定形石器・礫石器等300点以上が出土した。

なお、本ブロックより西側の法面においては、同じく縄文時代前期中葉の遺物を包含する河川跡の断面が検出されている。



第27図 第1号遺物集中ブロックセクション

・出土土器

本ブロックにおいては、第3・4層からダンボール箱換算で40箱に及ぶ土器が出土した。うち7割は第4層からの出土である。出土土器は全て縄文時代前期中葉の円筒下層a・b式土器の範疇で捉えられるものである。円筒下層a式土器、b式土器については、山内清男により型式設定され、以降、発掘調査資料の増加に伴い両型式についていくつかの分類案が提示されているが、未だ統一的な見解は得られていない。したがって、ここでは本ブロック出土土器を第III群土器として一括して主に口縁部文様からa~h類に細分し、両型式における諸属性の前後関係を明らかにするため、第1節5)の第II群土器と同様に各類型をそれぞれ層位ごとに分け下層のものから図版を提示した。以下、本ブロック出土第III群土器について、分類ごとに記述する。

第III群 縄文時代前期中葉の土器(第28図~第46図)

a. 縄文が回転施文されるもの(第28図1~第30図25)

4層出土資料は1~17、3層出土資料は18~25である。口縁部破片から推定すると4層からは復元資料、破片資料を含めて約30個体分、3層からは復元個体が1個体、破片資料が11個体分出土している。口縁部形状は平縁を呈するものと波状を呈するものがあり、前者が多い。口唇部は丸みを帯びるもの(1~3、8~14、17、18~25)が多く、4、5、6、7のように先細りの形状を呈するもののが少数ある。胴部から口縁部までの形状はほぼ垂直ないしやや傾斜をもって直線的に立ち上がるものが多いが、1、8、23のように口縁が外反するもの、5のようにやや傾斜をもって直線的に立ち上がり口縁部付近から垂直に立ち上がるものもある。いずれの胎土においても纖維が混入する。文様は複節縄文を同一方向に回転して施文しているものがほとんどであるが、1~3、14、18のように単節の回転施文によるものも少数認められる。25は口唇部においても複節縄文が施されている。隆帯をもたないものがほとんどであり、隆帯をもつものは少ない。隆帯をもつものは地文を施した後貼り付けられており、15は無文であるが、16、17はR L Rの側面圧痕、25は地文と同様に複節縄文が施された後、指頭圧痕が施されている。また25は口縁上部と隆帯の上部と下部にR L Rの側面圧痕が施されている。

3・4層における隆帯をもたないものとの量比の差は顕著ではない。

b. 縄の側面圧痕が施されるもの(第30図26~第32図45)

4層出土資料は26~37、3層出土資料は38~45である。口縁部破片から推定すると4層からは復元資料5個体、破片資料は約30個体分、3層からは破片資料で8個体分が出土している。口縁部形状はほとんどが平縁を呈し、波状を呈するものは少数である。口唇部は丸みを帯びるものが多く、平坦に整形されているもの(27、32・33、37、44、45)は少数である。胴部から口縁部までの形状は32、37、39でやや外反が認められる以外はほとんどが直線的に立ち上がる。文様は地文を施した後、口縁部に縄文原体の側面圧痕を1~3条施している。側面圧痕に用いられる原体はほとんどが3段の縄であり、地文も複節縄文が施されるものが多いが、35は地文にR単軸絡条体第1類が回転施文され、口縁部にR L Rの側面圧痕が1条施されている。

c. 結節回転文が施される土器(第32図46~第42図105)

本群の土器の中で最も出土量が多く、6割を占める。4層出土資料は46~85、3層出土資料は86~100、101~105は出土層位不明なものである。口縁部破片から推定すると、4層からは100個体以上、3層からは50個体以上が出土している。いずれの胎土においても纖維の混入が認められる。

隆帯の有無等から1. 隆帯をもたないもの、2. 隆帯をもつもの、3. 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるものに細分した。4層、3層ともに隆帯をもたないものと隆帯をもつものの量比は6:4程度である。

1. 隆帯をもたないもの (46~72, 86~95)

口縁部形状は波状を呈するものが多く、平縁のものは少ない。復元資料をみると、波状を呈するものに比べ、平縁を呈するものの方が大型になる傾向が強い。口唇部形状は丸みを帯びるものが多いが、平縁を呈するものの中には口唇を平坦に調整したものが少數みられる(64, 68, 89)。胴部～口縁部までの形状はほとんどがほぼ垂直ないしはやや角度をもって直線的に立ち上がるが、51, 55, 63, 67, 72, 95のように口縁部が外反するものもみられる。とくに63は胴部上半がやや張り出し、頸部がくびれ、口縁部が外反する小型の土器である。文様については、口縁部に施される結節回転文は、54のようにL Rで施される1点を除いて、1段の縄によって施されているものが多く、そのほとんどがRである。地文は、複節縄文がほとんどであるが、無節(89)、単節(68)、直前段反燃(70~72, 94, 95)、単輪絃条体第1類(69, 93)も少數みられる。結節回転文と地文以外の文様が施されるものは少なく、46のようにRの側面圧痕が施されるものと、93のようにR L Rの側面圧痕が2条施されるものがあり、いずれも口縁部に施された結節回転文と地文を区画している。67の口唇部には竹管状工具による刺突が施されている。

2. 隆帯をもつもの (73~85, 96~100)

隆帯をもたないものと同様に、口縁部は波状を呈し口唇部は丸みを帯びるものが多いが、概して隆帯をもたないものに比べて大型の器形が多いようである。胴部～口縁部にいたる形状については、隆帯をもたないものと比べると、口縁が外反するものが多く、とくに79は胴部が張り出し、頸部にはくびれが認められる。文様については、結節回転文は、全て1段の縄によって施されており、地文もほとんどが複節縄文である。隆帯に施される文様は縄の側面圧痕が施されるもの(73~77, 79~82, 96~99)、指頭圧痕が施されるもの(85)、竹管状工具による圧痕が施されるもの(83・84, 100)に大きく分けられる。側面圧痕は、隆帯の中央に輪を同じくして横位に1条押圧されるもの(73~77)、隆帯に対して斜位に押圧されるもの(80~82, 98・99)、横位・斜位を併用するもの(79, 96)、縄端が押圧されるもの(97)に細分できる。ほとんどの資料においては、隆帯によって区画された口縁部文様帶に地文が認められるものが多く、地文が施された後に隆帯が貼り付けられている。ただし、84は例外で、隆帯の上下に施されている複節縄文は隆帯上にも及んでおり、隆帯貼り付け後に複節縄文が施されたと考えられる。77, 96のように隆帯と器面の接合部にあたる上下に1条づつ側面圧痕が施されている資料の存在も併せ、これは単に装飾を施すだけでなく、隆帯と器面の接合部を強固にするためのねらいがあったものと推定される。

3. 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるもの (101~105)

半裁竹管状の工具により弧状の圧痕が連続的に施された文様をもつものである。縄で施された文様でないため、本類とすることにやや抵抗はあるが、弧が連続する点で結節回転文と類似していることから同様の文様効果をもつものと考えられ、結節回転文の一類型とした。遺物取り上げ時のミスにより、出土層位は不明である。いずれも同一個体である。101の形状からみて、口縁部形状は本来波状を呈すると考えられる。口唇部は丸みを帯びる。胴部にはR L Rが回転施文されている。101、105において穿孔がみられる。本資料と類似した資料が三内丸山遺跡第6鉄塔地区から出土している。(青

森県教育委員会 1998)

d . 単軸絡条体第1類が回転施文されるもの（第42図106～112）

4層出土資料は106～108、3層出土資料は109～112である。111と112は同一個体である。復元資料及び口縁部破片から推定して、4層・3層ともに破片資料で3個体程度である。全体形状を窺い知れる資料が限られているため、細部については不明である。106は波状口縁を呈し、やや外反して立ち上がる。口縁部文様は単軸絡条体第1類（R）の回転施文、胴部文様はR L Rの回転施文による。108は全面に単軸絡条体第1類（R）が回転施文される。109はつまみ出し隆帯をもち、口縁部には単軸絡条体第1類（R）回転施文に加え、L Rの側面圧痕が縦位・横位に施される。胴部文様は単軸絡条体第1類（R）が回転施文され、隆帶上にはRの側面圧痕が施されている。111・112は単軸絡条体第1類（R）を地文とし、隆帯には竹管状工具による刺突が施されている。

e . 単軸絡条体第5類が回転施文されるもの（第43図～第44図125、127～133）

4層出土資料は113～126、3層出土資料は127～136である。復元資料及び口縁部破片資料から推定して、4層からは少量の復元個体と破片資料をあわせて22個体分、3層からは破片資料で7個体分が出土した。口縁部形状は波状を呈するものと、平縁のものがあるが、波状を呈するものが多い。平縁のものは口縁が直線的に立ち上がり、波状を呈するものは口縁が外反するものが多い。隆帯をもつもの（124・125、131～133）もみられるが、隆帶上の文様は、側面圧痕（124・125、131、133）によるものと竹管状工具による刺突（132）によるものがみられる。胴部文様は複節縄文が多く、直前段反燃（131）、単軸絡条体第1類（133）によるものも少数存在する。

f . 単軸絡条体第6類が回転施文されるもの（第44図126、134～136）

4層出土資料は130、3層出土資料は134～136である。134・135は同一個体である。出土量は極めて少量である。微細な破片であるため、形状については不明な点が多いが、口縁部は外反するものが多いようである。いずれの資料も文様については、単軸絡条体第6類の回転による文様と縄の側面圧痕が併存する。

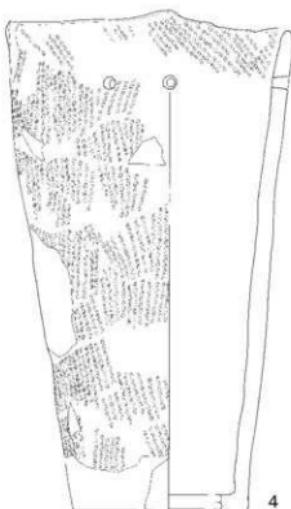
g . 単軸絡条体第6A類が回転施文されるもの（第44図137～第46図165）

4層出土資料は137～147、3層出土資料は148～165である。161・162は同一個体である。復元資料及び口縁部破片資料から推定して、4層からは12個体分、3層からは20個体分が出土している。口縁部形状は波状を呈するもののがほとんどである。口唇部形状は先細りで丸みを帯びるものが多く、152、164のように平坦に調整されているものも少しがみられる。隆帯をもつものともたないものがあるが、頸部を残存する資料が少ないためその量比は不明である。口縁部の文様は単軸絡条体第6A類の回転による文様と縄の側面圧痕が併存するものが多く、148～150、160・161、163、165のように地文を認めることができるものもある。胴部文様は複節縄文、直前段反燃、単軸絡条体第1類がみられる。胴部まで残存する破片が少ないため不明な点は多いものの、他の類型に比べ単軸絡条体第1類の占める割合が多いようである。隆帶上の文様は縄の側面圧痕によるものと竹管状工具による刺突によるものがある。

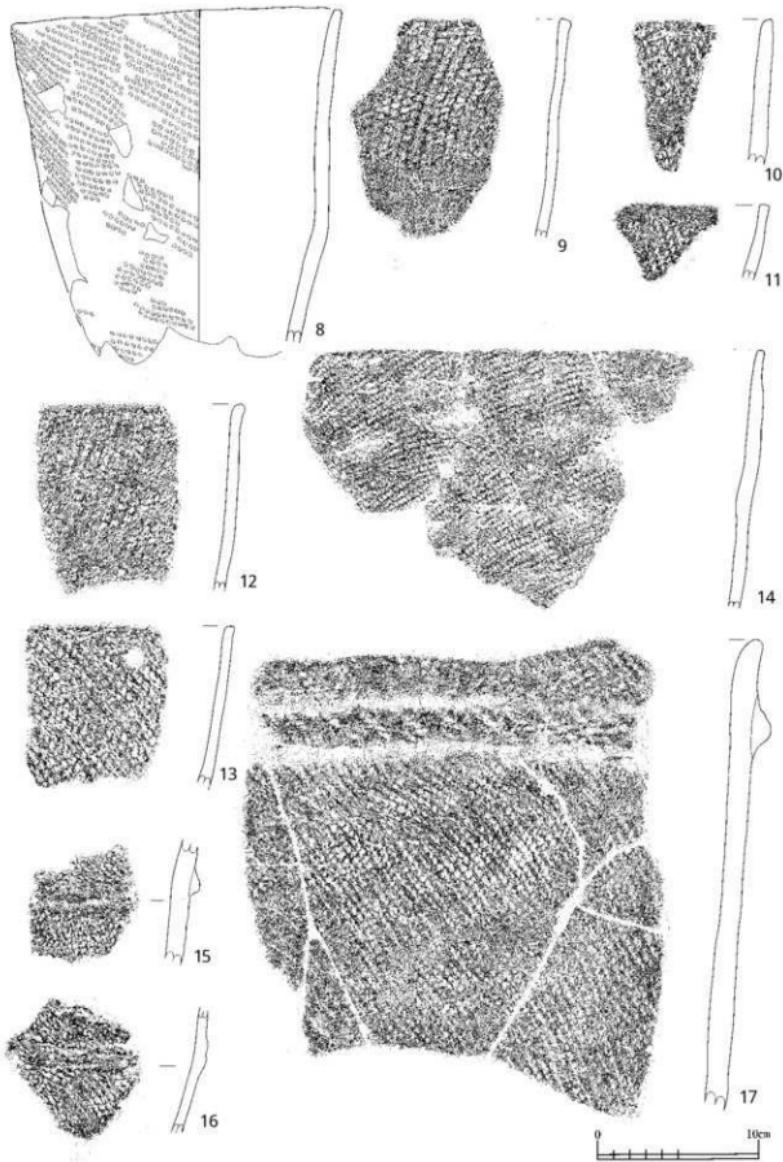
h . 多軸絡条体が回転施文されるもの（第46図166）

3層から1点が出土した。隆帯をもつ口縁部破片である。隆帯はつまみ出しにより作出されており、無文であるが隆帶下部にR L Rの側面圧痕が施されている。口縁部には多軸絡条体（R）が回転施文されている。胴部の文様は不明である。

III群 a類- 4層

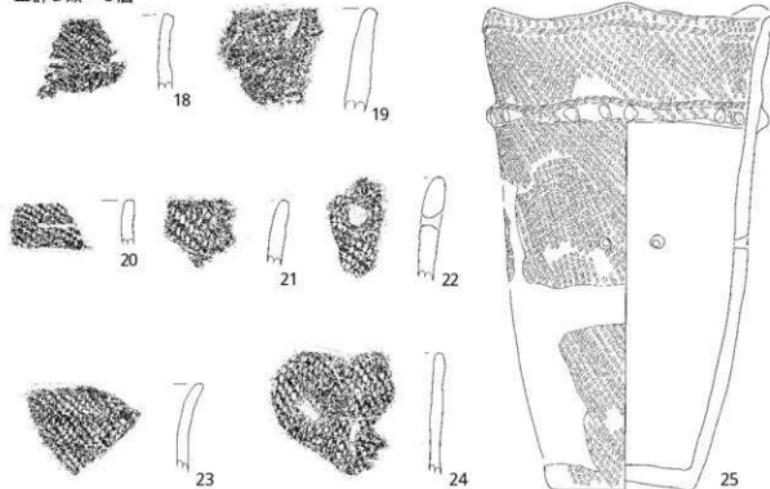


第28図 第1号遺物集中ブロック出土土器①



第29図 第1号遺物集中ブロック出土土器②

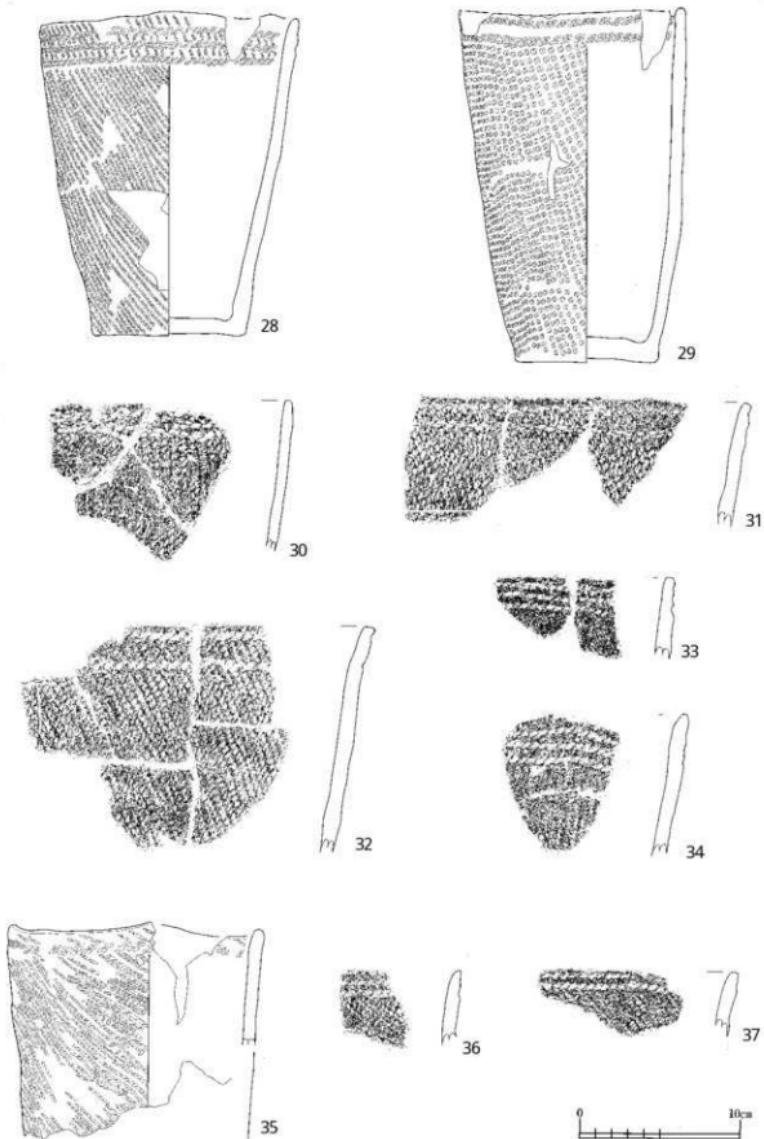
III群 a 類 - 3層



III群 b 類 - 4層

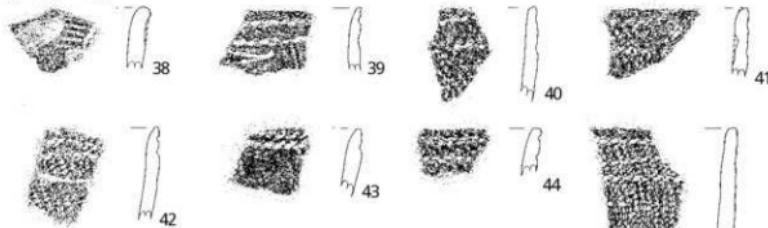


第30図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤

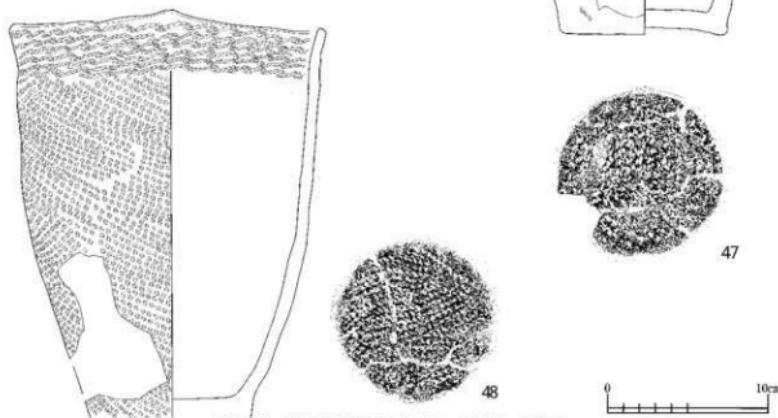
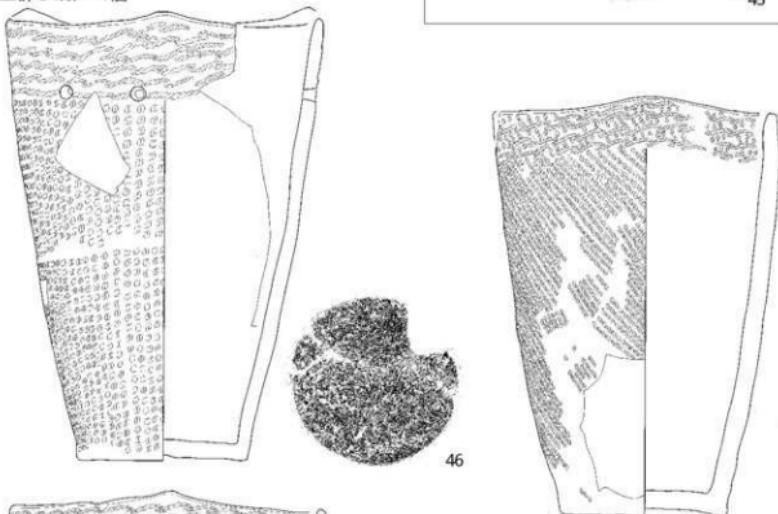


第31図 第1号遺物集中ブロック出土土器④

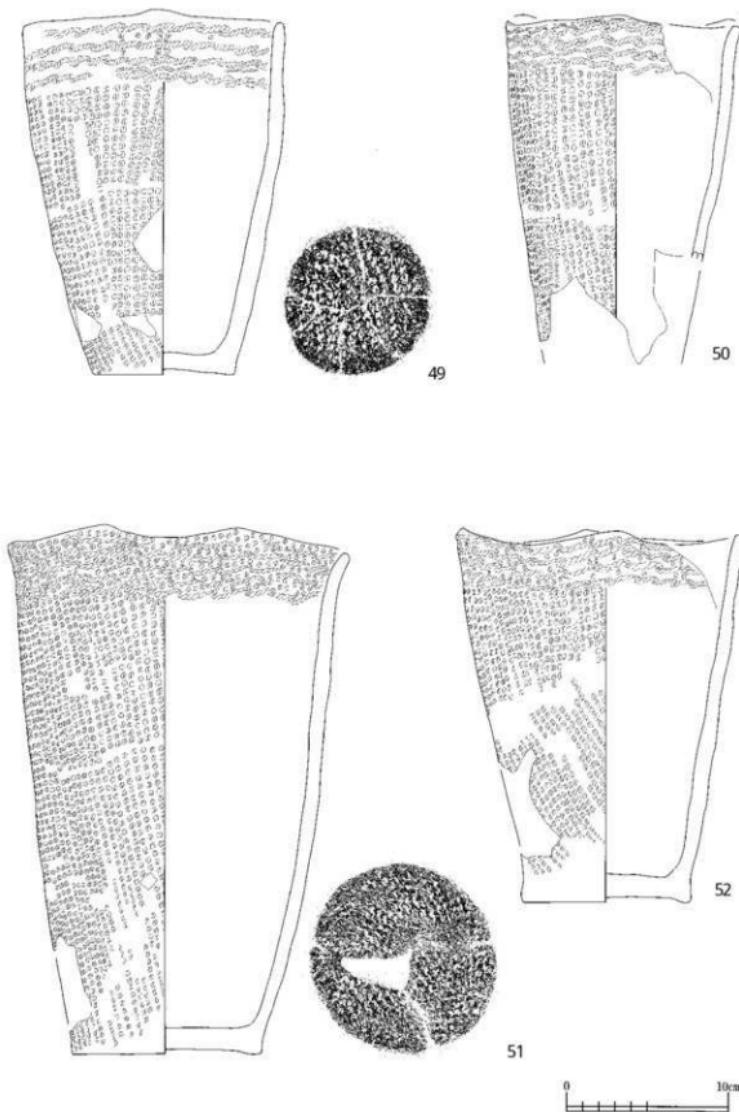
III群 b 類- 3層



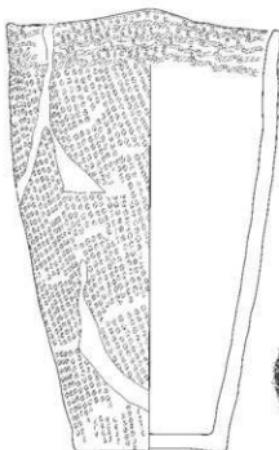
III群 c 1類- 4層



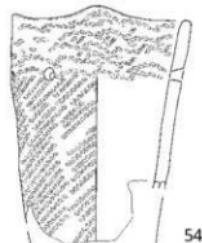
第32図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤



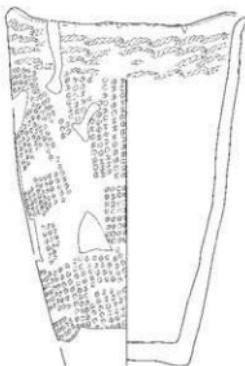
第33図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑥



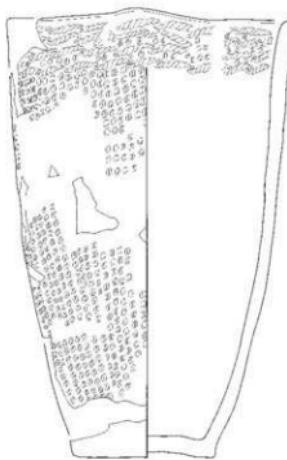
53



54



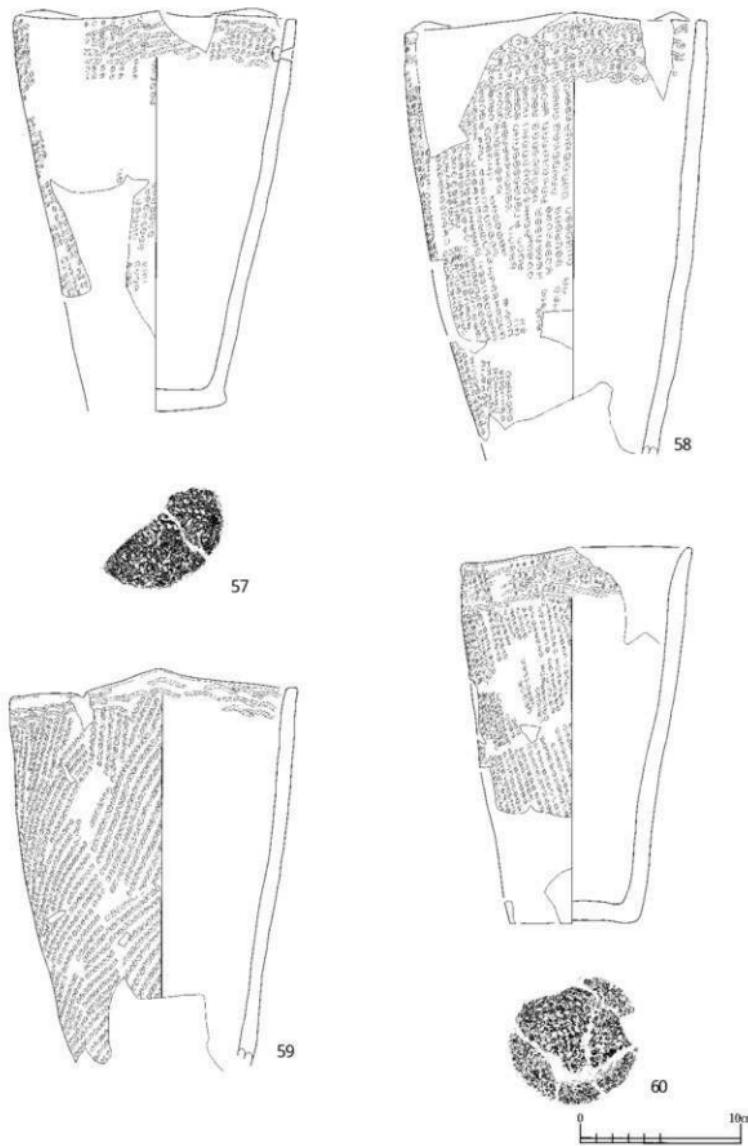
55



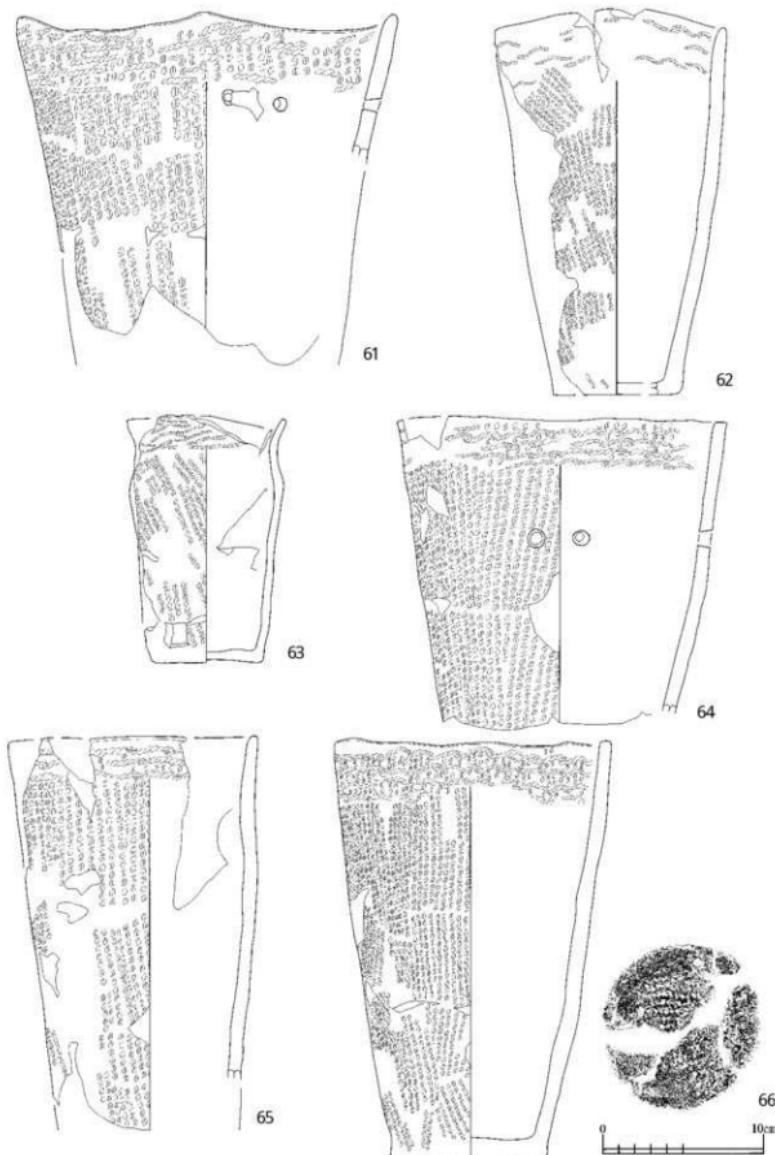
56



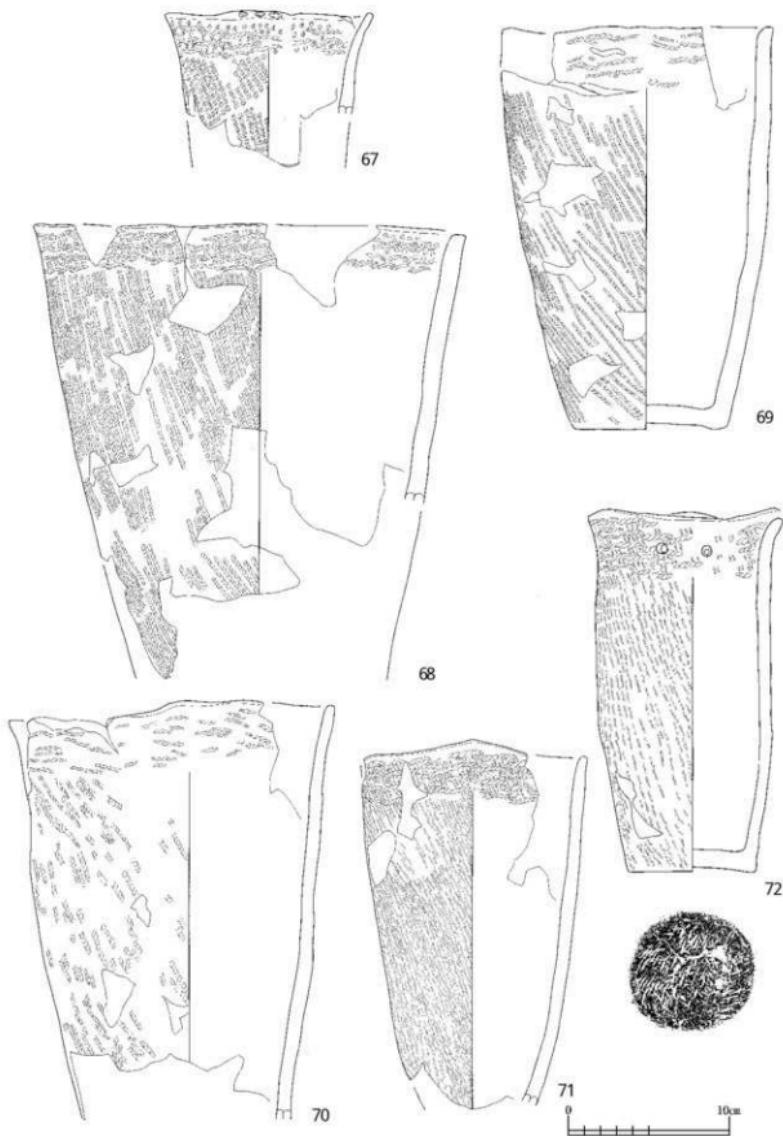
第34図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑦



第35図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑥

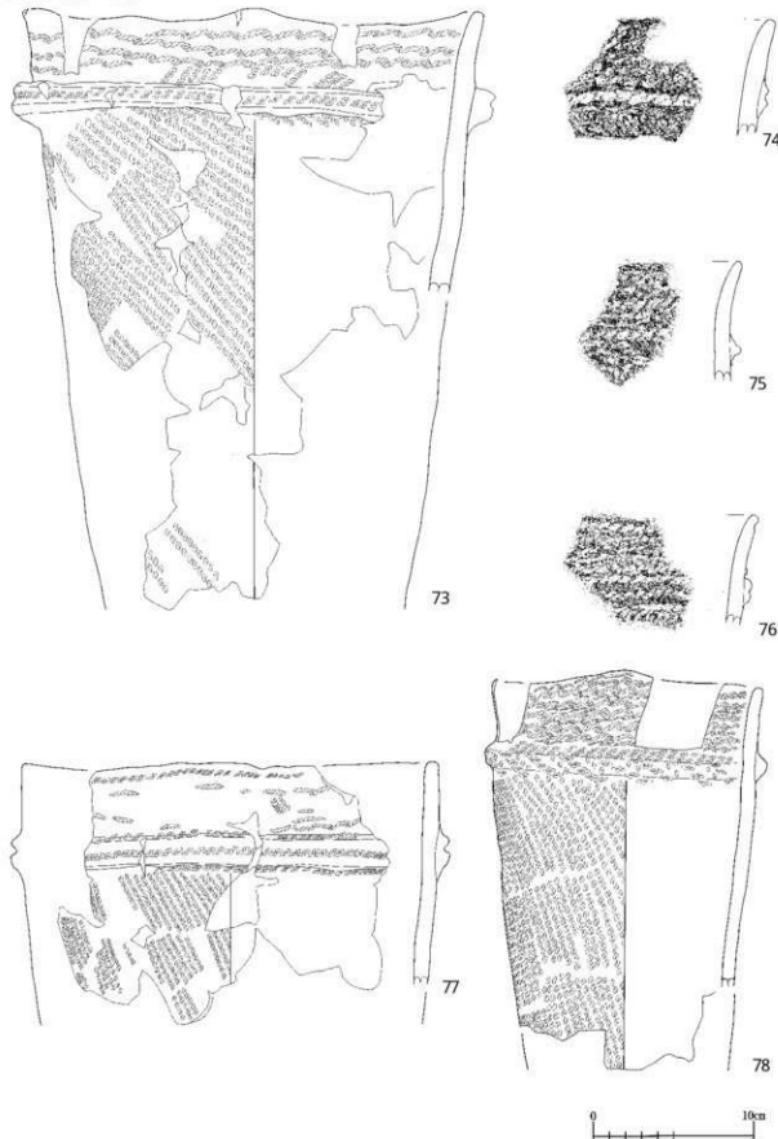


第36図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤

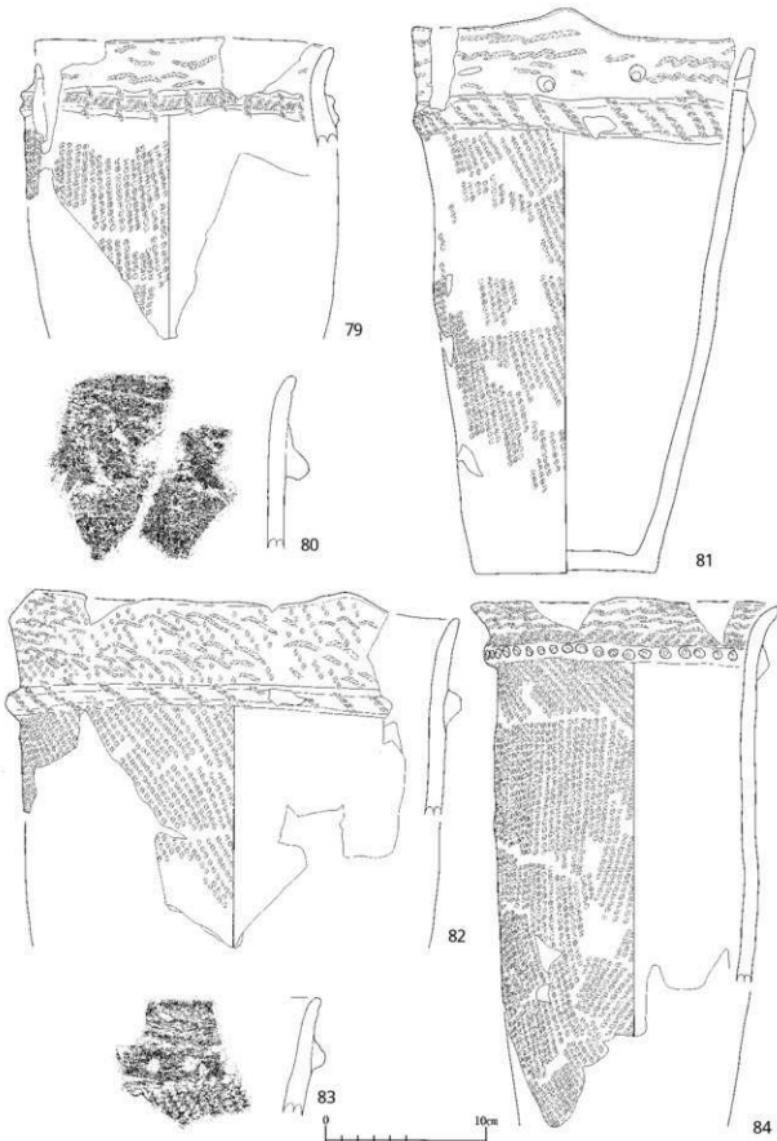


第37図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤

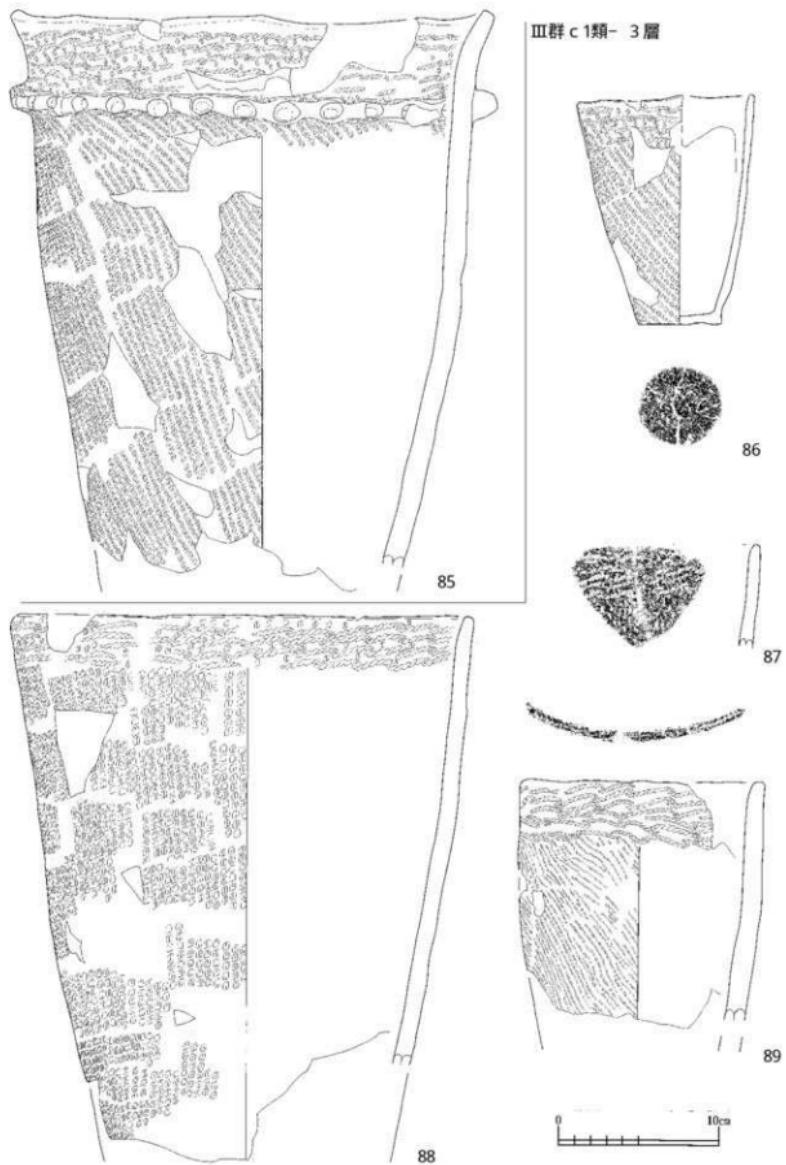
II群c 1類-4層



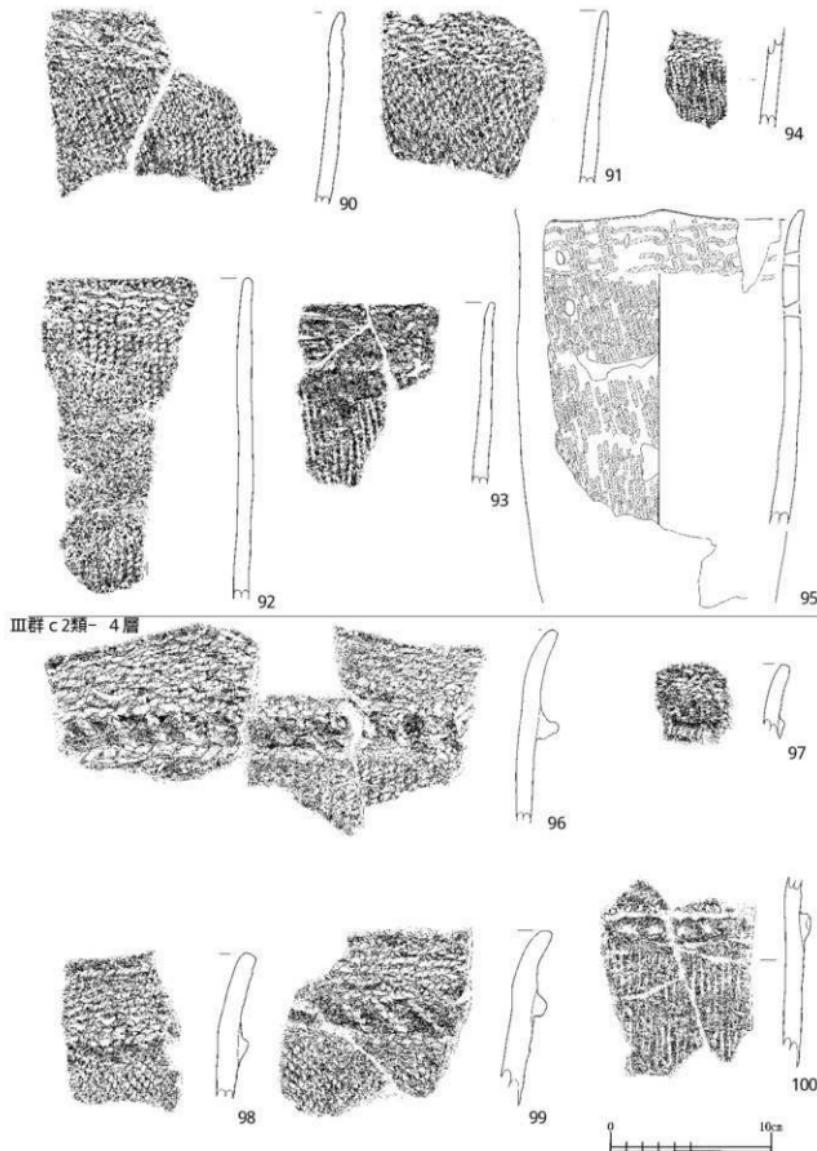
第38図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑩



第39図 第1号遺物集中ブロック出土土器②

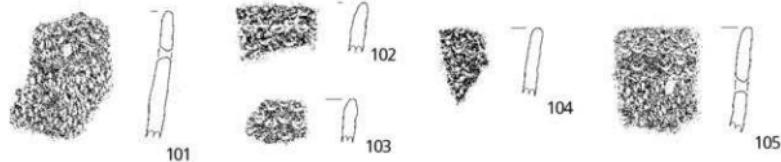


第40図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤

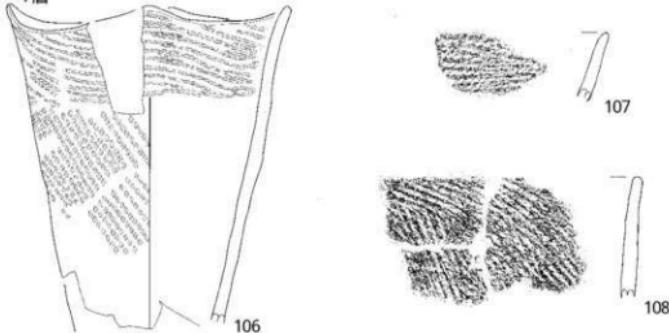


第41図 第1号遺物集中ブロック出土土器④

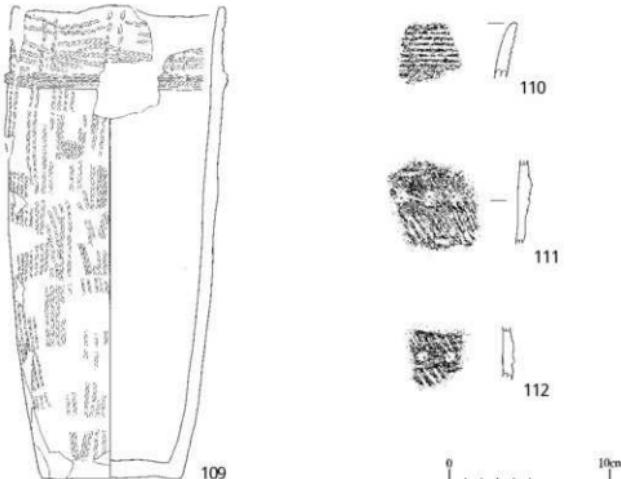
III群c類



III群d類-4層

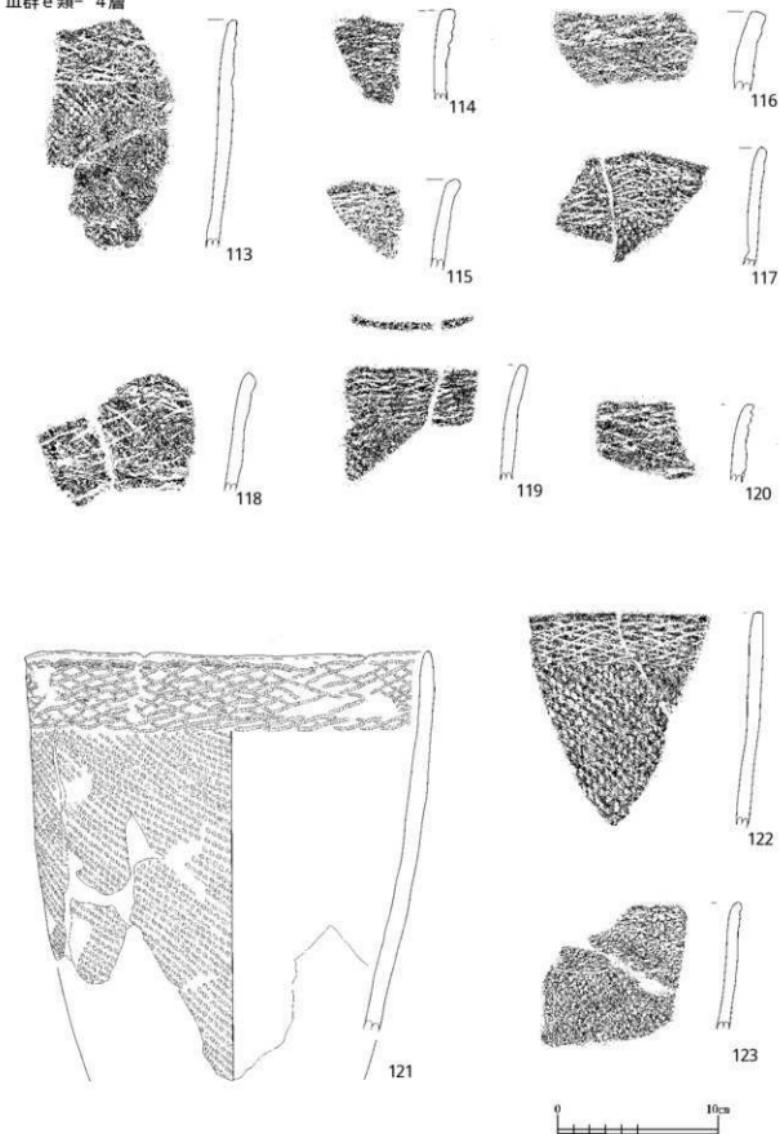


III群d類-3層

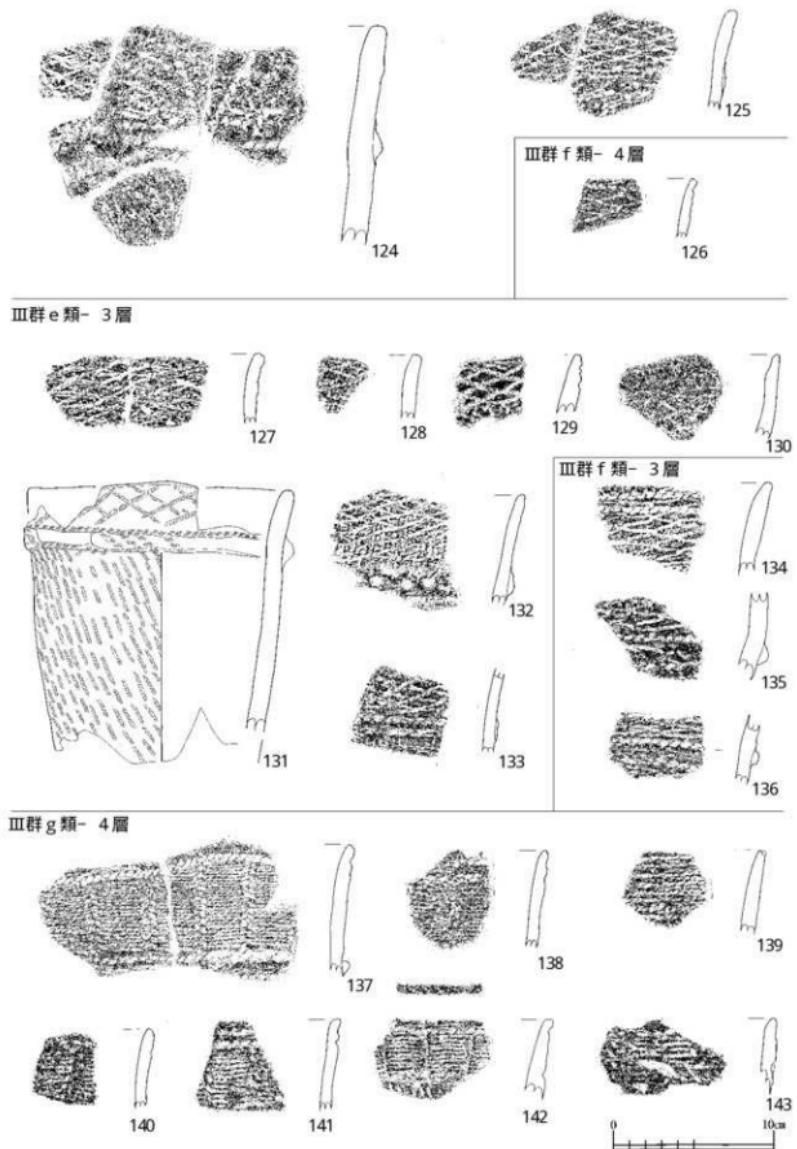


第42図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤

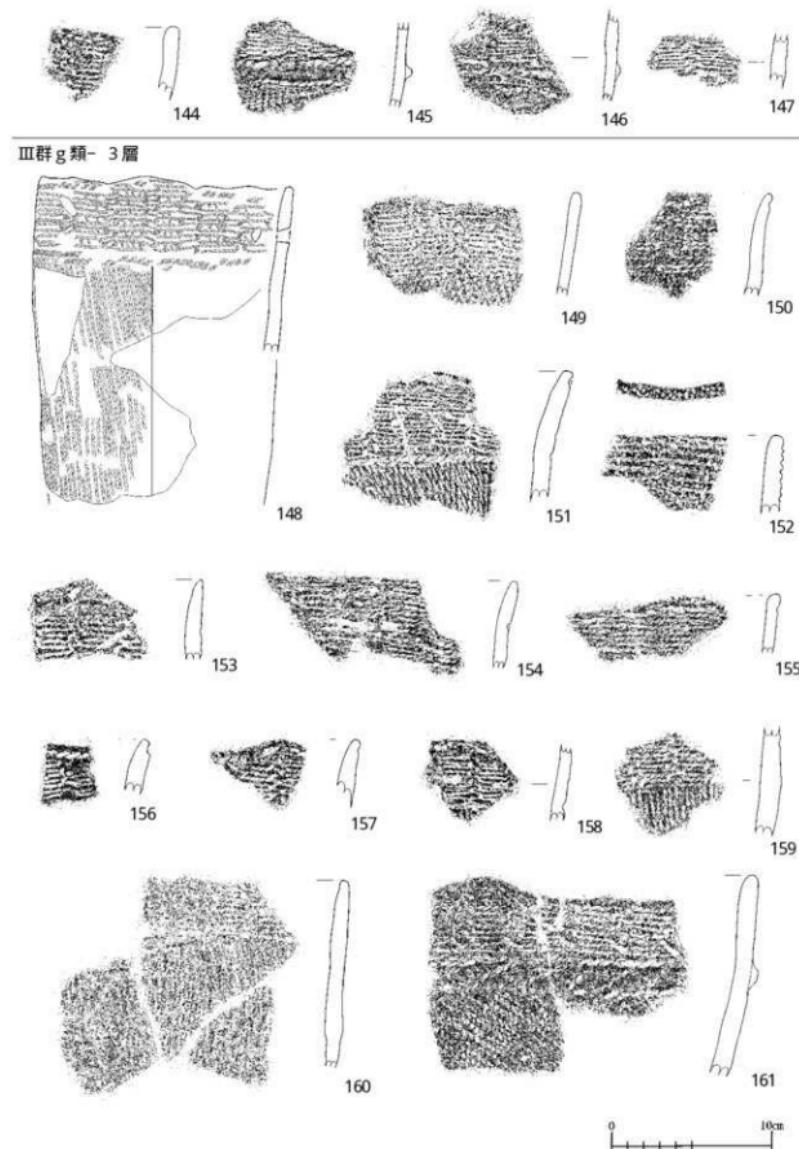
III群 e 類- 4層



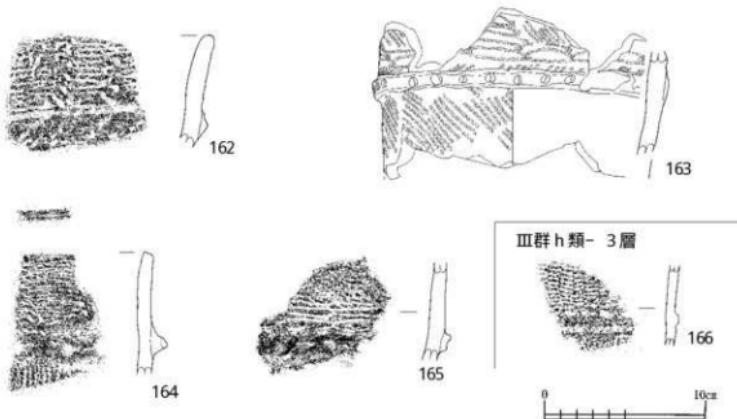
第43図 第1号遺物集中ブロック出土土器◎



第44図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑤



第45図 第1号遺物集中ブロック出土土器®



第46図 第1号遺物集中ブロック出土土器⑧

・出土石器

本ブロックからは199点の石器が出土した（フレイク・チップ・使用痕が認められない礫を省く）。うち剥片石器が191点、礫石器が8点である。土器と同様に出土層位は3層と4層である。

以下、本ブロック出土石器について分類ごとに記述する。

A. 石鏃（第47図1～11）

11点が出土した。内訳は円基鏃が3点、平基鏃が7点、尖基鏃が1点である。

1. 円基鏃（1～3）

4層出土資料は1、3で、3層出土資料は2である。いずれの資料についても周縁部が主体的に調整されている。3はやや幅のある資料である。

2. 平基鏃（4～10）

4層出土資料は6、8～10で、3層出土資料は4・5、7である。4～6、8は平面的にほぼ二等辺三角形を呈する。7は基部がやや丸みを帯び、9・10は平面的にみて軸に対して基部がやや傾斜している。4～6は両面において全面が丁寧に調整されているが、7～9は背面においては全面に調整が施されているが、腹面における調整は周縁に限定されている。10は背面において周縁部にのみ調整が施され、腹面においては調整が全くみられない。

3. 尖基鏃（11）

4層から1点が出土した。基部付近はやや丸みを帯び、欠損している。背面においては基部付近を除いてほぼ全面的に調整が施されているが、腹面における調整は周縁部に限定される。

B. 石槍（第47図12）

4層から1点が出土した。平面的には先端部は二等辺三角形を呈し、長い茎部をもつ。茎の両側縁

の中間部には凸部がみられる。調整は押圧剥離によって施されている。茎部にみられる凸部は獲物の体に刺さった場合に抜けにくくするための機能をもつと考えられ、そのような機能を考慮すると石錐とすることも可能であるが、現在のところ石槍と石錐について形態的に明確な区分がなされていない。本遺跡においては石錐等の漁労具は出土していないことから、石器の器種構成から判断し、ここでは石槍として分類した。

C . 石錐（第47図13～第48図19）

7点が出土した。4層出土資料は15、17～19で、3層出土資料は13・14、16である。14、16、19は錐部が明確に作出されており、それに伴い頭部も平面的には円形ないし方形のツマミ状を呈する。13、15、17・18は不定形を呈する剥片の一端を調整して錐部を作出している。

D . 石匙（第48図20～第55図98）

79点が出土した。本ブロックから出土した定形石器の中で最も出土量が多い。縦型のものが75点、横型のものは4点であり、縦型のものが圧倒的に多い。

1 . 縦型のもの

aが23点、bが19点、cが6点、dが2点、eが3点、fが4点、gが8点、hが10点出土している。
a . 兩側縁が直線的なもの（20～42）

23・25、27、31～33、35、38・39は4層、20・22、26、29・30、34、36・37、40～42は3層、28は表土から出土した資料である。縦長を呈する細身の剥片が用いられており、ほぼ直線的な刃部が両側縁に作出されている。基本的に背面において全体に調整が施されているが、腹面にはツマミ部の調整のみが認められるものが多く、22、27、28、32、34のように末端において調整が認められる少数の資料を除けば、使用に伴う微細剥離が認められる程度である。

b . 兩側縁ないし一側縁が湾曲するもの（43～61）

43～47、51、54、56、59は4層、48・49、52・53、55、57・58、60・61は3層、50は表土出土資料である。57を除けば、a類と同様に細身の剥片を素材としている。平面的には、両側縁が湾曲し、くの字状ないし逆くの字状を呈するもの（45、58～61）。一側縁は直線的であるがもう一方が曲線的なもの（43・44、46～57）に細分できる。a類と同様に、背面側に主体的に調整が施されるが、腹面側においては側縁に調整が施される45、47、50、52、54、60・61を除いて、ツマミ部の抉りと微細剥離のみ認められる。

c . 側縁の一部に凹凸がみられるもの（62～67）

62・63、66は4層、64、67は3層、65は表土出土資料である。62～64は一側縁に凸部がみられ、65・66、67は一側縁に凹部がみられる。前者はこれまでのa～b類と異なり腹面側においても調整が施されている。62、65～67の背面は、主に周縁に調整が施されている。

d . 下端が鋭く尖るもの（68・69）

68は4層出土資料であり、両面において周縁に調整が施されており、鋭い尖端部が作出されている。69は3層出土資料であり、両面において三角形状を呈する尖端部の周縁に調整が限定されており、ツマミ部をのぞいた部分には目立った調整が施されていない。

e . 下端に向かって細くなるもの（70～72）

いずれも4層出土資料であり、やや幅広の剥片を素材としている。70は小型で両面ともに周縁に調整が施されている。71・72は背面において周縁に調整が施されているが、腹面においてはツマミ部の抉り以外に調整は認められない。

f. 丸みを帯びるもの(73~76)

73・74、76は4層、75は3層出土資料である。いずれもやや幅広の剥片を素材としており、背面においては周縁に丁寧な調整が施されている。腹面においては末端から側縁にかけて微細剥離が認められ、73、75においては末端に調整が施されている。

g. 下端にむかって幅広になるもの(77~84)

79、81、83は4層、78、80、82は3層、77、84は表土出土資料である。背面の調整をみると、79、84は全面的に調整が施されているが、それ以外の資料はツマミ部と周縁に調整が限定されている。腹面の調整については、いずれも明確に認められるものではなく、微細剥離が認められる。77、82は末端方向が欠損しているために不明であるが、末端に微細剥離が認められるものが多い。

h. 欠損により分類不能なもの(85~94)

85、94は4層、86、88~92は3層、87、93は表土出土資料である。ツマミ部が残存しているため、石匙と認定できるものの下半が欠損しているために分類不能なものを一括した。85~89は縦長を呈する細身の剥片、90~94はやや幅広の剥片を素材としていると考えられる。

2. 構型のもの(95~98)

95、97は4層、96、98は3層出土資料である。95は幅広の剥片、96~98は縦長の剥片を構置きにしている。背面側の調整は全面的に調整が施されるものが多い縦型と異なり、周縁部にのみ調整が施されている。腹面は95のツマミ部周辺においてやや広めに調整が施されている他は、微細剥離がみられる程度である。

E. 石範(第55図99~第56図105)

7点が出土した。1類が4点、2類が3点である。

1. 下端において片面のみ刃部調整されているもの(99~102)

100~102は4層、99は3層出土資料である。99~101は上端が欠損している。いずれにおいても背面側においては周縁部が主体的に調整されている。腹面においてはいずれも主要剥離面を大きく残しており、99、101、102において末端及び側縁に剥離が認められる。

2. 両面が刃部調整されているもの(103~105)

いずれも4層から出土しており、両面において丁寧な調整が施されている。

F. 不定期石器(第56図106~第60図148)

100点以上が出土したが、うち刃部が明確なものの43点を図示した。107、109~111、113~115、117~124、128~129、131、133、136、139~142、144~148、150は4層、108、112、116、125~127、130、132、134~135、137~138、143は3層出土資料である。刃部の形状に着目すると、106~115は直線的な刃部、116~126は曲線的な刃部、127~140、147は直線的な刃部と曲線的な刃部、141~146、148は凹凸のある刃部とすることができる。128~131については部分的に欠損しているため推定の域を出ないが、残存部分の形状及び調整方法からみて、本来、定期石器であった可能性が高い。128は

石鎧、129～131は石匙の可能性がある。

G. 磨製石斧（第61図149・150）

150は4層、149は3層出土資料である。いずれも刃部が欠損している。149は上端と欠損部の縁辺において剥離が見られ、刃部を欠損した後も使用されていたことが想定される。欠損部の縁辺部付近には擦痕も認められる。150はやや薄手であり、上半部の側縁及び下半が欠損している。

H. 半円状扁平打製石器（第61図151～153）

4層から3点が出土した。いずれにおいても、全体的な形状は磨りによって整えられており、側縁には剥離が認められ、その縁辺部には磨りが認められる。151・152の平坦面においては敲きの痕跡が認められる。

I. 敲磨器類（第61図154～158）

5点出土した。1類が1点、2類が2点、3類が2点である。磨り、凹み、敲きが併存しているものも存在するがその場合は主体的な痕跡によって抽出した。

1. 磨り石

b. 側縁に磨り痕が認められるもの（154）

4層から出土している。隅丸三角形状の扁平な礫の縁辺に磨りが認められる。一側縁において剥離が認められる。

2. 凹み石（155・156）

4層から2点出土している。155は不整橢円形を呈する扁平な礫であり、2つの平坦面においてそれぞれ2箇所の凹みが認められる。156は円形を呈する扁平な礫であり、2つの平坦面においてほぼ中央部に複数の凹みが重複している。両面ともに相対する両側縁において剥離が施されているが、磨りは認められない。

3. たたき石（157・158）

4層から2点出土している。157は縦長の礫における2つの平坦面に敲きが認められ、部分的に磨りが認められる。158は縦長で扁平に近い礫の平坦面と一側縁に敲きが認められる。敲きを有する側縁には剥離が施されている。

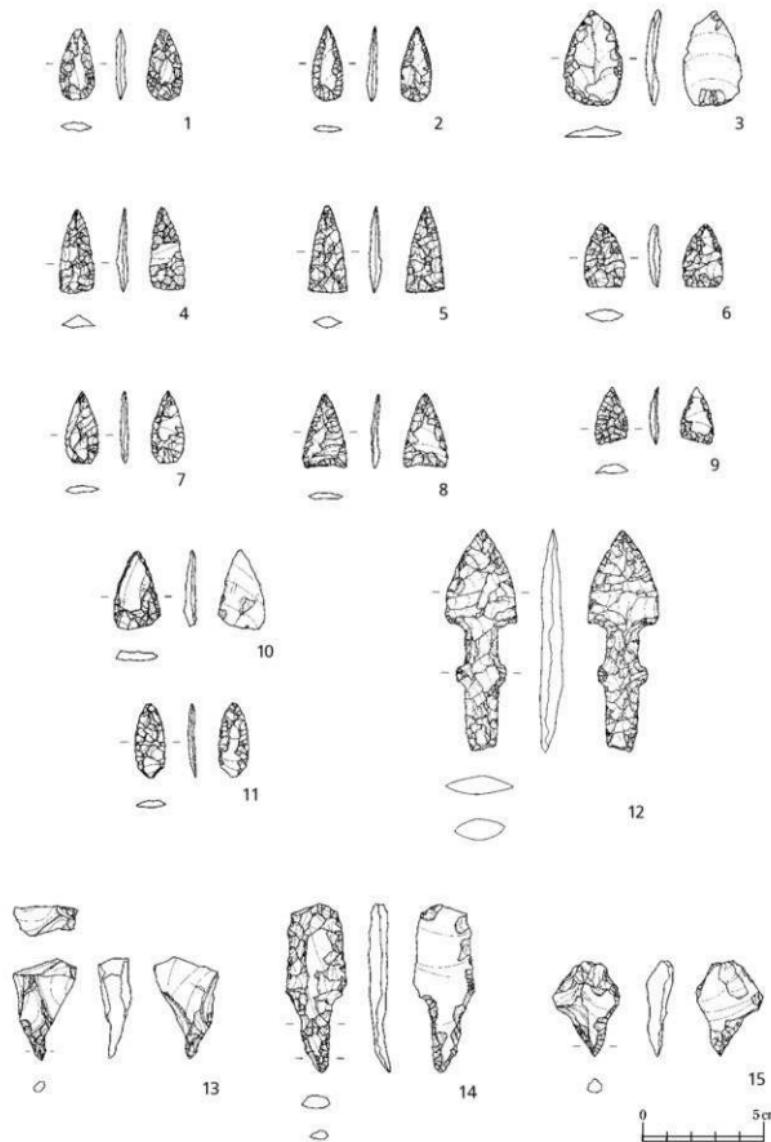
・出土土製品・石製品

ミニチュア土器（第62図1～4）

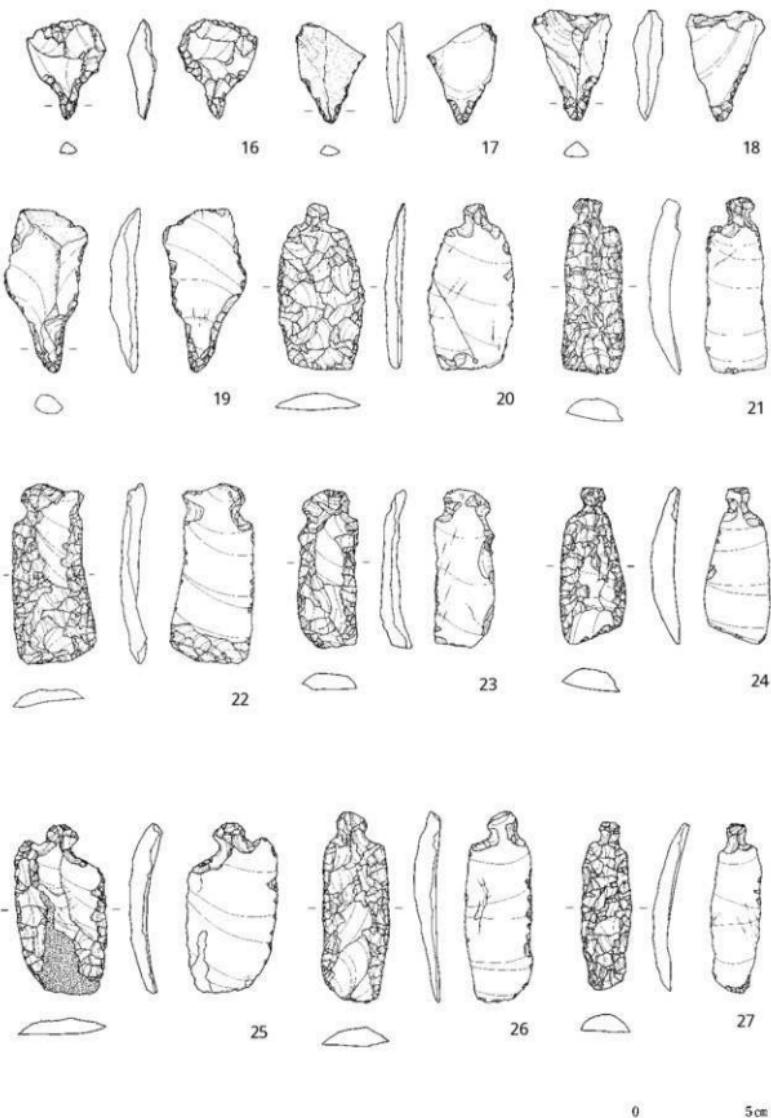
2、4は4層、1、3は3層出土資料である。いずれも欠損している。1はR L Rが回転施文されている。2～4は無文で、3は底部にかなり厚みがあり上底状を呈し、4は口縁部の一部のみが破損しほぼ完形で、胴部がやや張り出している。

用途不明の石製品（第62図5）

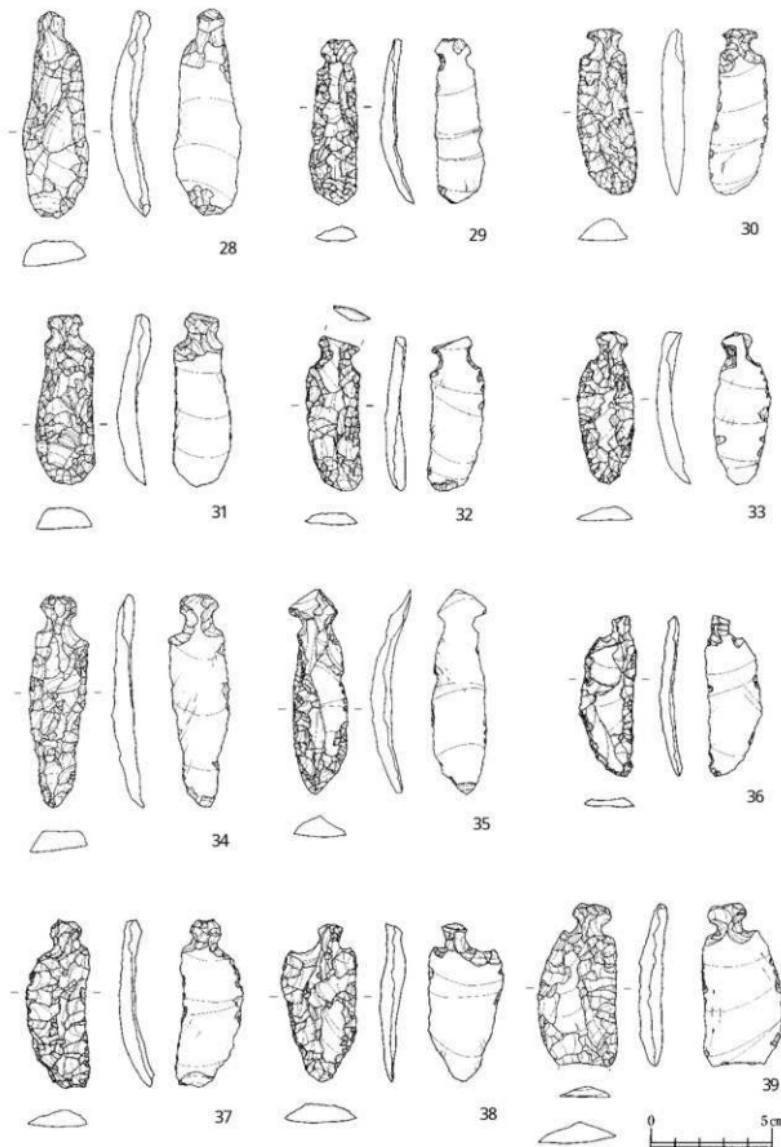
出土層位は不明である。欠損しており、全体形状は不明である。先端が丸みを帯び、棒状を呈する。全体的に同一方向の磨りが施された後、沈線が3条施されている。



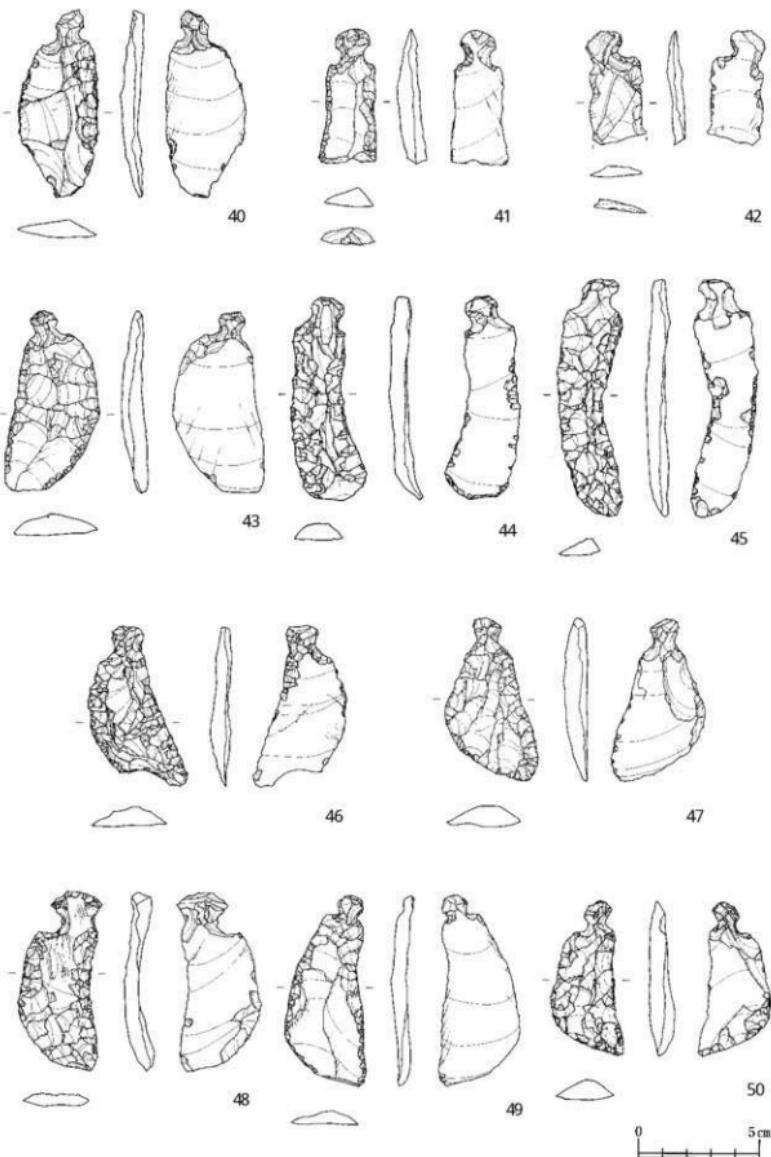
第47図 第1号遺物集中ブロック出土石器①



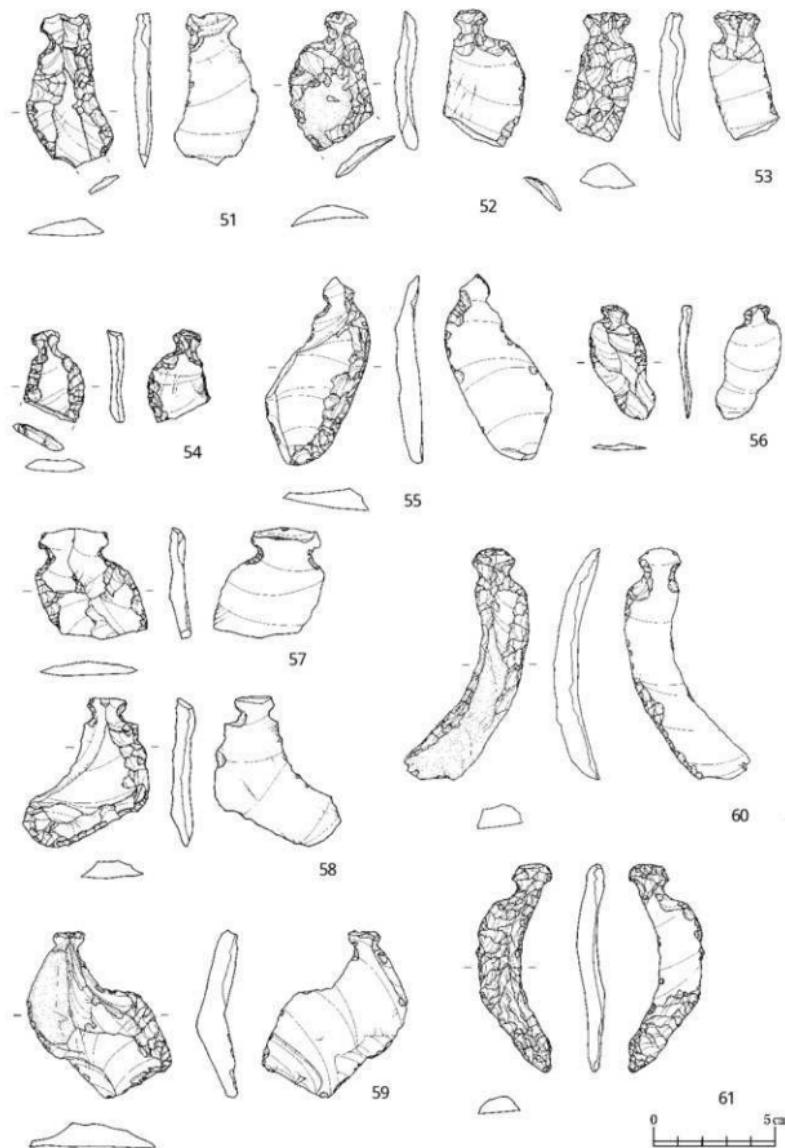
第48図 第1号遺物集中ブロック出土石器②



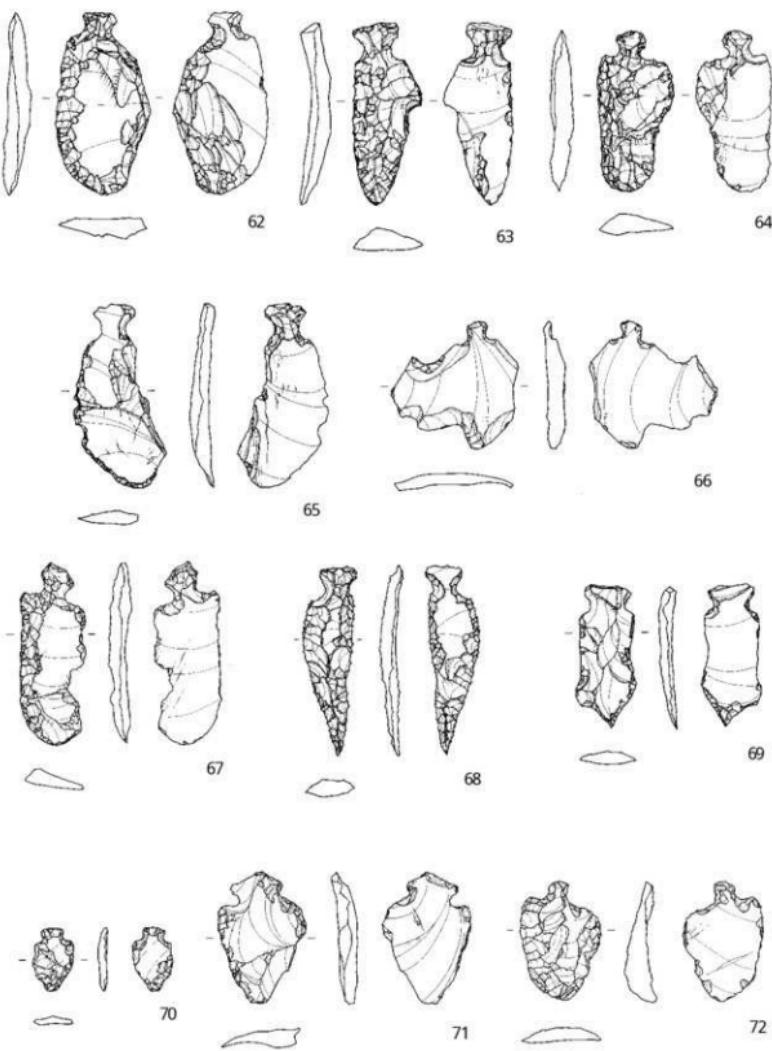
第49図 第1号遺物集中ブロック出土石器③



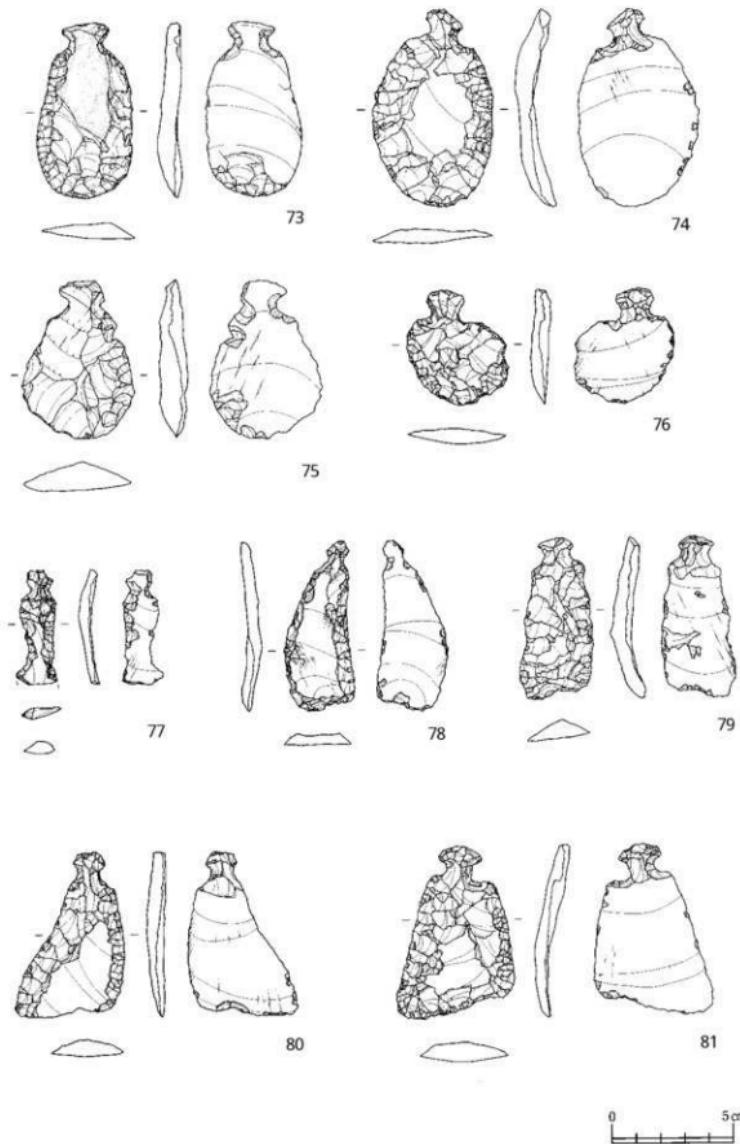
第50図 第1号遺物集中ブロック出土石器④



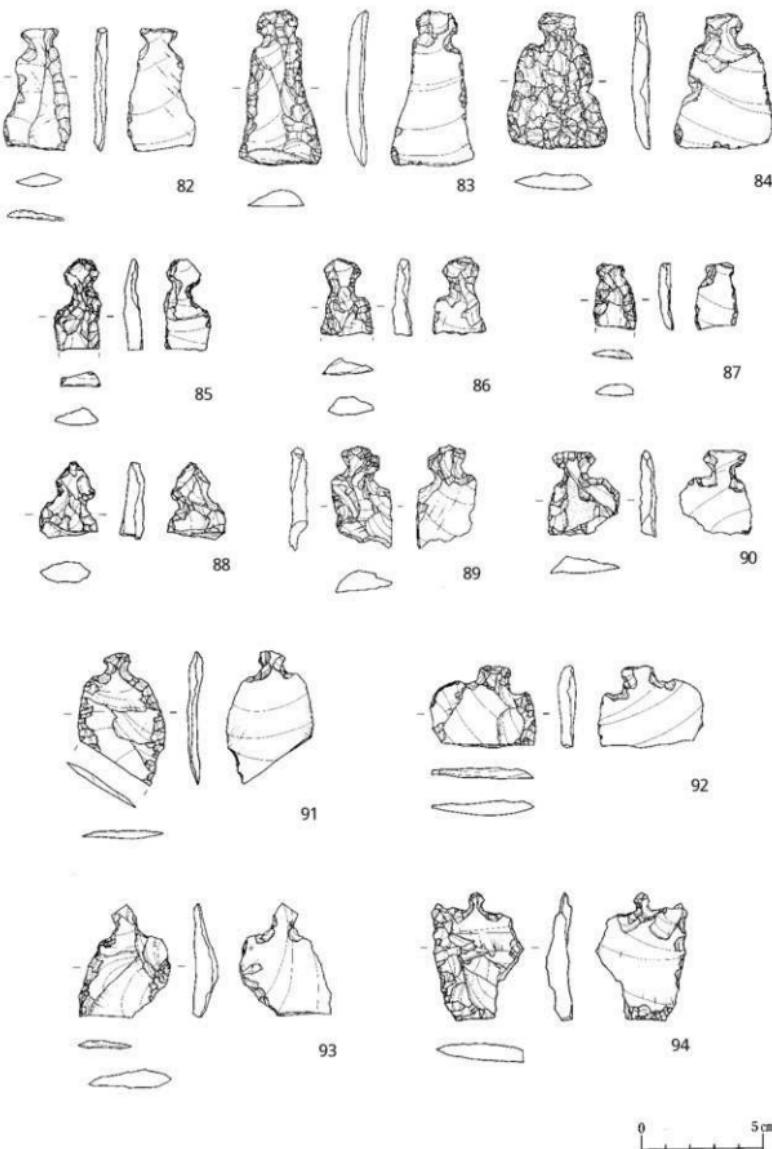
第51図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



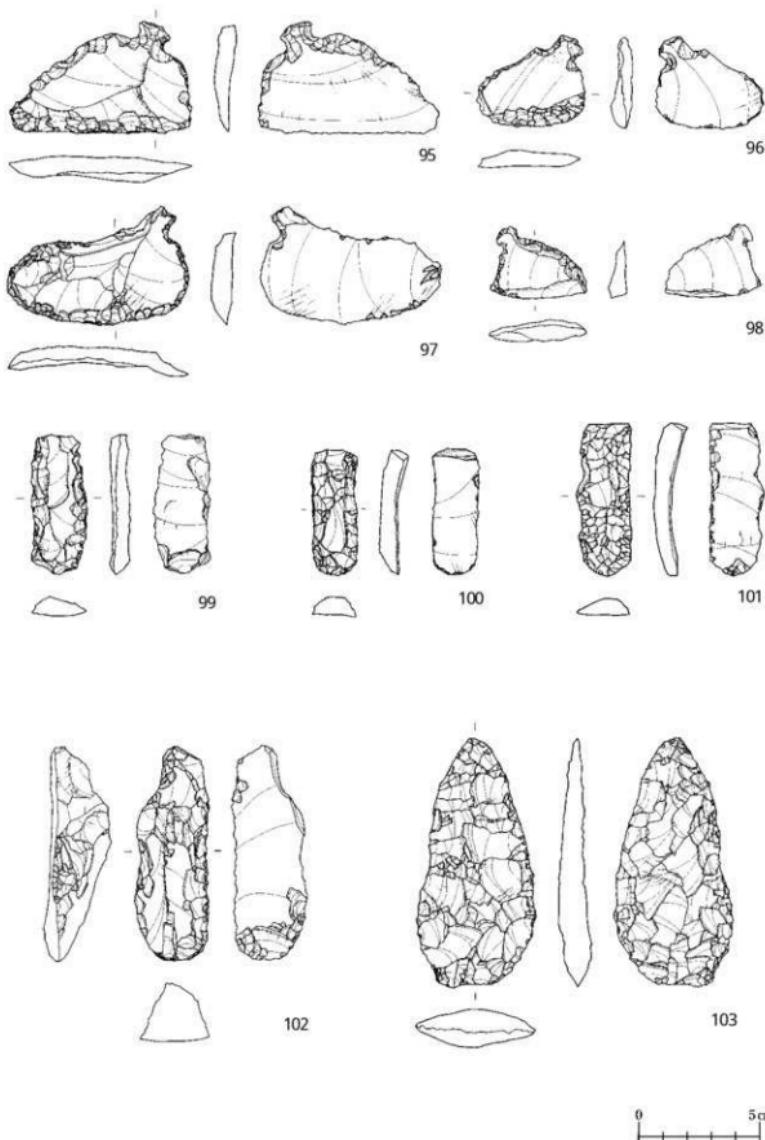
第52図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



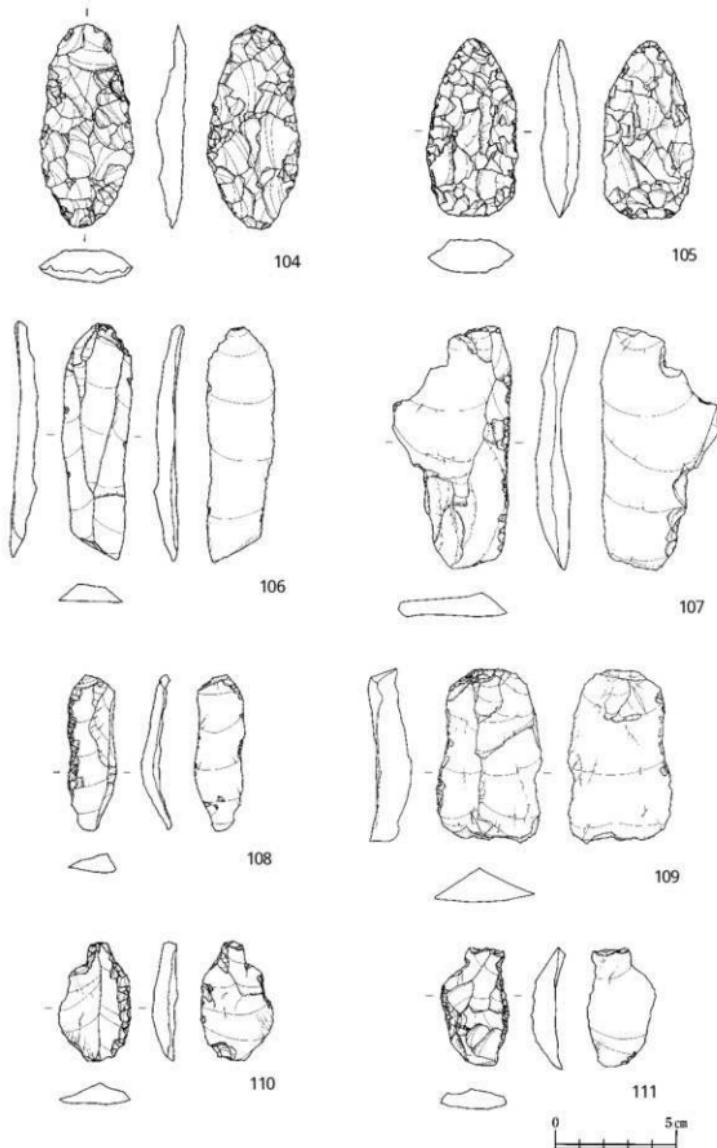
第53図 第1号遺物集中ブロック出土石器②



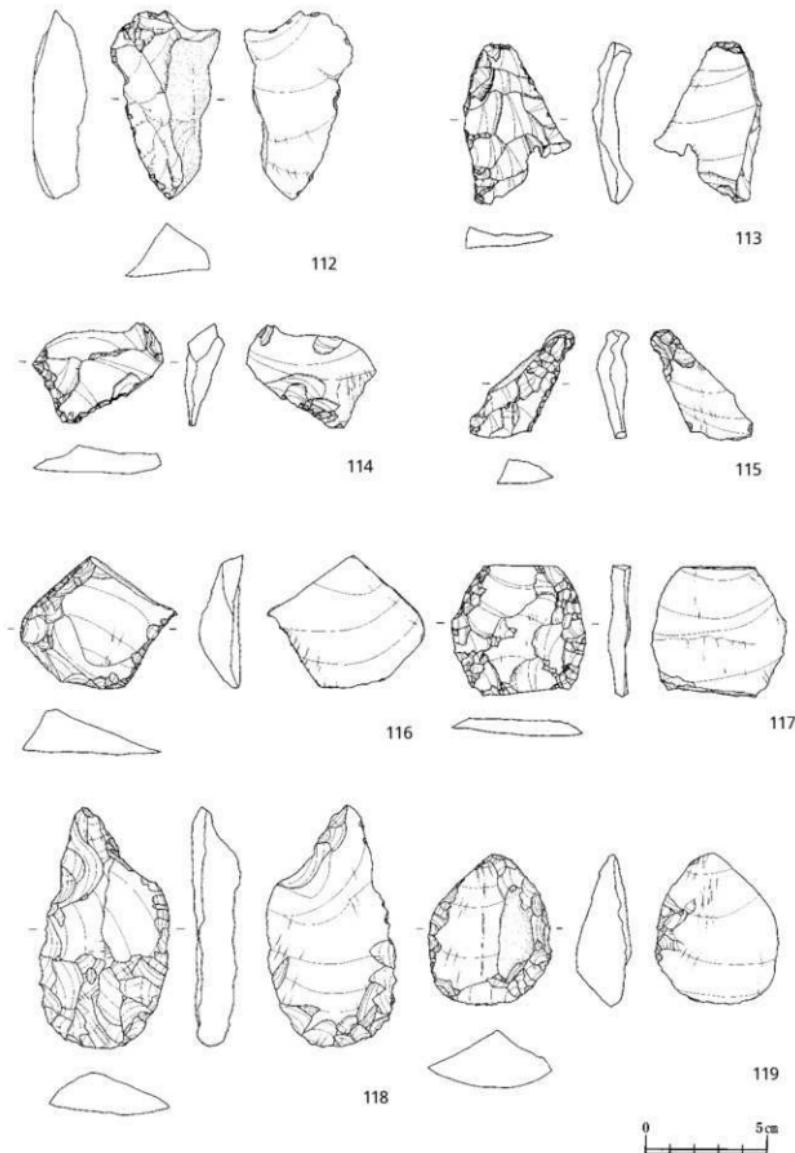
第54図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑧



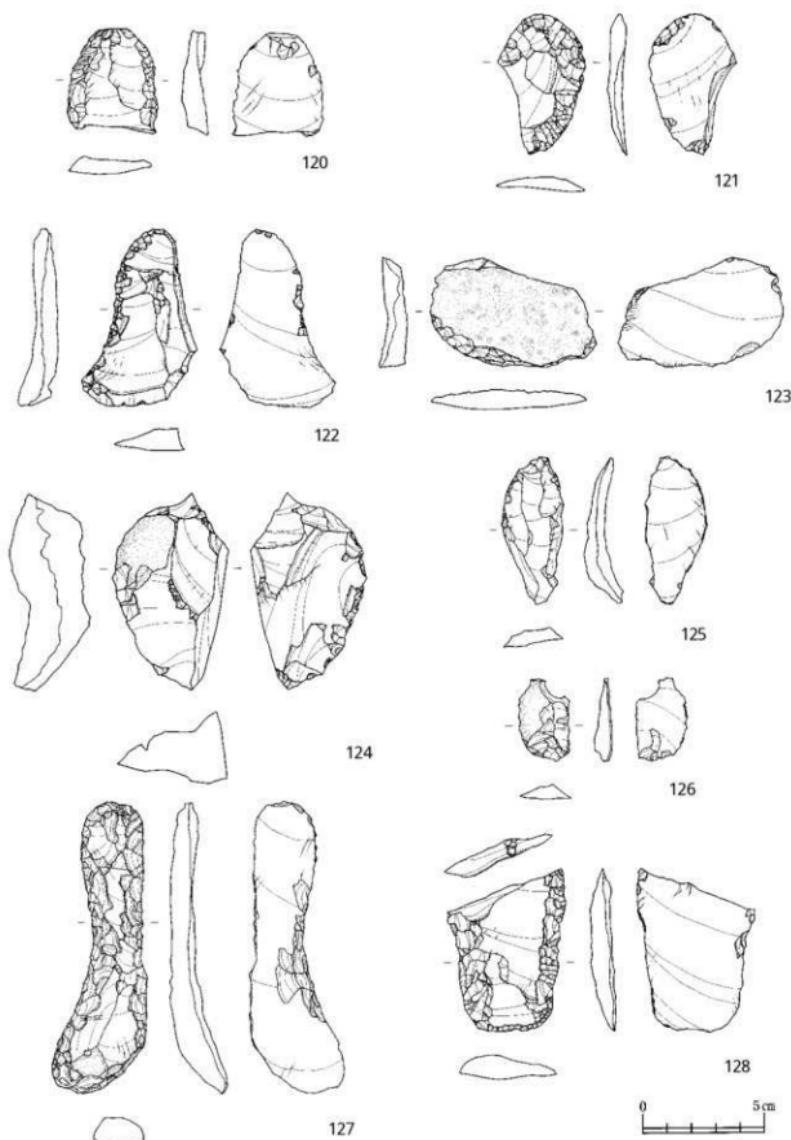
第55図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



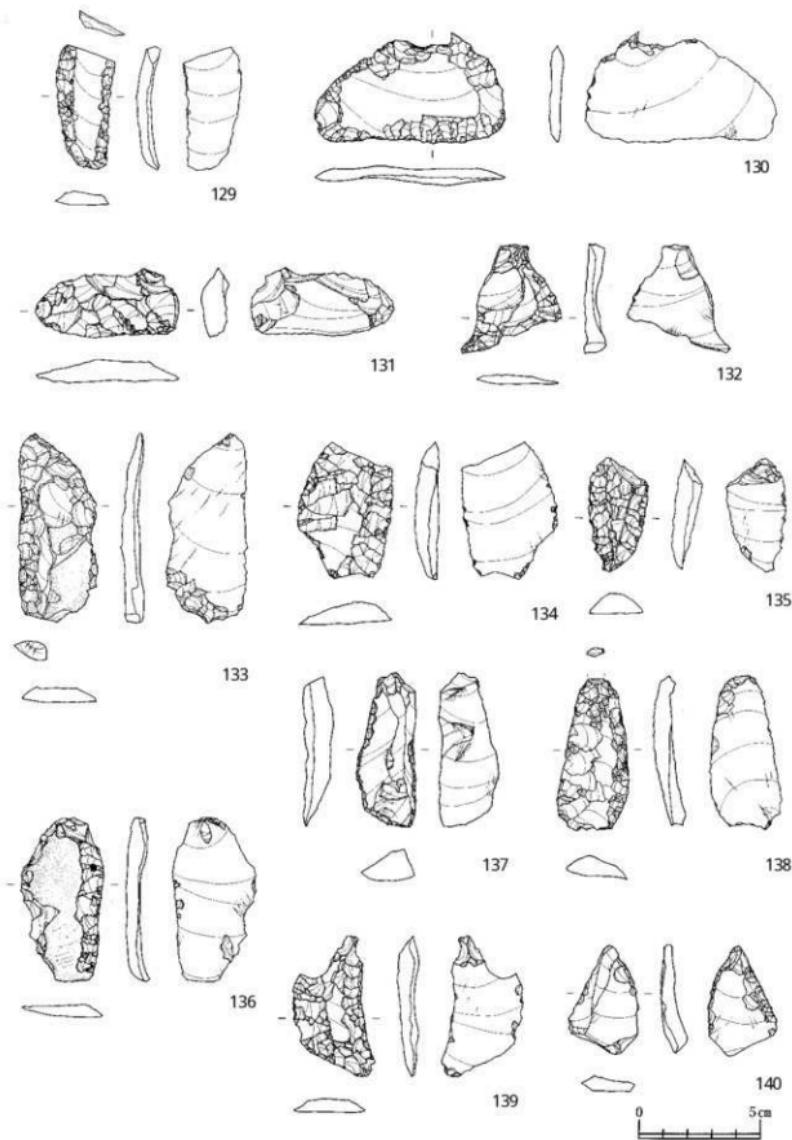
第56図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



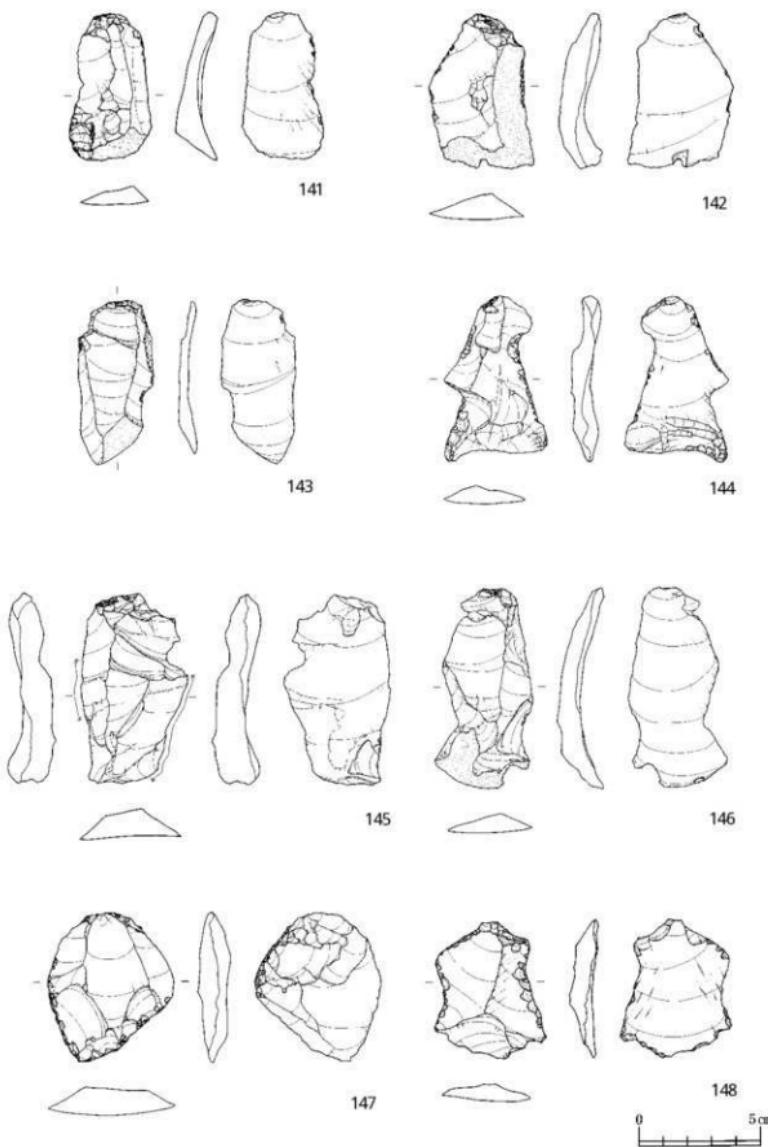
第57図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑩



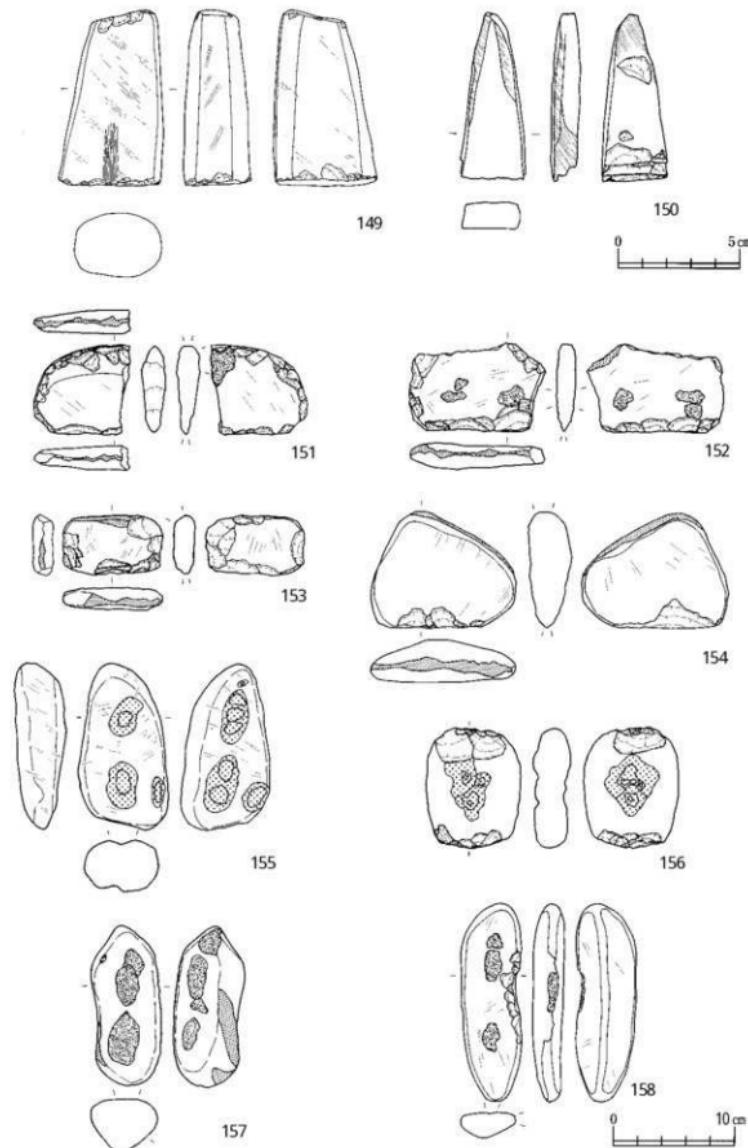
第58図 第1号遺物集中ブロック出土石器②



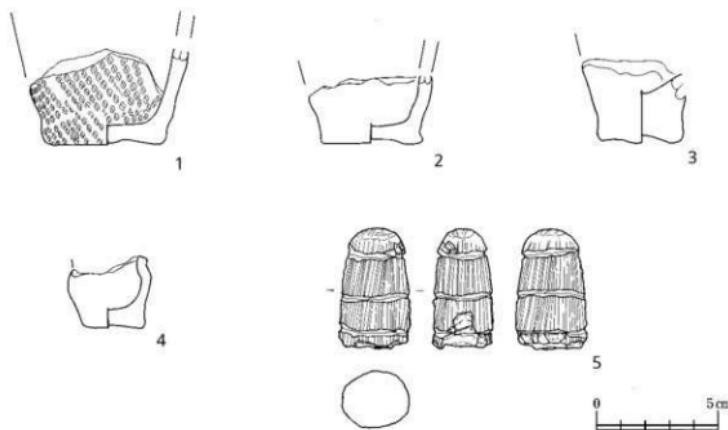
第59図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



第60図 第1号遺物集中ブロック出土石器④



第61図 第1号遺物集中ブロック出土石器⑤



第62図 第1号遺物集中ブロック出土土製品・石製品

第6表 第1号遺物集中ブロック出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面 調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	墳 帶	脇 部				
1	99	T-88	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR複節回転	ナデ	堅焼	IIIa	波状口縁	
2	99	T-89	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
3	99	S-89	4	深鉢	RL回転	隆帯なし	RL回転	ナデ	堅焼	IIIa		
4	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa	波状口縁。穿孔あり	
5	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa	穿孔あり。底部にもRLR回転。口縁がやや先振り。	
6	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
7	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
8	99	T-90	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
9	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
10	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
11	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
12	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
13	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
14	99	T-89	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
15	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	無文	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
16	99	S-89	4	深鉢	RLR回転	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
17	99	T-90	4	深鉢	RLR回転	RLR側面圧痕(位)	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa		
18	99	S-88	3	深鉢	RL回転	—	RL回転	—	堅焼	IIIa		
19	99	S-89	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa		
20	99	S-88	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa		
21	99	S-89	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa		
22	99	S-89	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa	穿孔有り	
23	99	S-88	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa	口縁がやや外反する	
24	99	S-88	3	深鉢	RLR回転	—	RLR回転	—	堅焼	IIIa		
25	99	T-89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	指揮圧痕・RLR回転	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIa	波状口縁。穿孔あり	
26	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIb	底面にもRLR回転	
27	99	T-90	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	ナミガ	堅焼	IIIb	波状口縁	
28	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕3条	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIb	底部にもRLR回転	
29	99	T-89	4	深鉢	RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIb	底部にもRLR回転	
30	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
31	99	T-88	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
32	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
33	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕3条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
34	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕3条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
35	99	S-89	4	深鉢	※單輪延形第1類回転・RLR側面圧痕1条	隆帯なし	※單輪延形第1類回転	ナデ	堅焼	IIIb	波状口縁	
36	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
37	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
38	99	S-89	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕3条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
39	99	S-88	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
40	99	S-88	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
41	99	S-88	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
42	99	T-89	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
43	99	T-89	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
44	99	T-89	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕2条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
45	99	S-88	3	深鉢	RLR回転・RL側面圧痕3条	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIb		
46	96	S-89	4	深鉢	R結節回転文・R側面圧痕	隆帯なし	R結節回転文	—	堅焼	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
47	97	S-89	4	深鉢	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
48	98	T-90	4	深鉢	L結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅焼	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
49	99	S-89	4	深鉢	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅焼	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 横			内面 調整	焼成	分類	備 考
						口 錄 部	隆 帯	脇 部				
50	99	S-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
51	99	T-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にRLR回転。穿孔あり	
52	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
53	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
54	99	T-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ミガキ	堅織	IIIc1	波状口縁。穿孔あり	
55	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
56	99	T-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
57	99	T-90	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
58	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
59	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR推進回転	ナデミガキ	堅織	IIIc1	波状口縁	
60	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。底部にもRLR回転	
61	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。穿孔あり。口縁がやや外反する。	
62	99	S-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
63	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	底部上半がやや裏出し。口縁が外反	
64	99	S-87	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデミガキ	堅織	IIIc1	穿孔あり	
65	99	T-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
66	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	底部にもRLR回転	
67	99	S-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	口縁に竹管状工具による痕。口縁がやや外反する。	
68	99	T-90	4	深跡	RL回転・L結節回転文	隆帯なし	RL回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
69	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	LR回転	ナデミガキ	堅織	IIIc1	波状口縁	
70	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RRL回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
71	99	S-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
72	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RR回転	ナデミガキ	堅織	IIIc1	波状口縁。口縁外反、穿孔あり。底部にもRLR回転	
73	99	T-90	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁	
74	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	RL側面圧痕	RL回転	—	堅織	IIIc2		
75	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	RL側面圧痕	RLR回転	—	堅織	IIIc2		
76	99	T-89	4	深跡	R結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	ミガキ	堅織	IIIc2		
77	99	S-89	4	深跡	R結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2		
78	99	S-89	4	深跡	R結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	波状口縁	
79	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	RLR側面圧痕(横位・斜位)	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	波状口縁。口縁部がくびれる	
80	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ミガキ	堅織	IIIc2	波状口縁	
81	99	T-89	4	深跡	R結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	波状口縁。穿孔あり	
82	99	T-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	波状口縁	
83	99	T-88	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	竹管による刺突	RLR回転	ミガキ	堅織	IIIc2		
84	99	S-89	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	竹管による刺突	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	口縁がやや外反する	
85	99	T-90	4	深跡	RLR回転・R結節回転文	指頭圧痕	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc2	波状口縁	
86	99	T-90	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。穿孔あり。直前にもRLR回転	
87	99	T-89	3	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅織	IIIc1		
88	99	T-90	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
89	99	T-90	3	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	口唇にもRの回転	
90	99	T-89	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
91	99	T-89	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
92	99	T-89	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
93	99	S-88	3	深跡	R結節回転文・RLR押圧1条	隆帯なし	R織織系条体第1 織物	ナデ	堅織	IIIc1		
94	99	S-89	3	深跡	R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1		
95	99	S-89	3	深跡	RBL回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅織	IIIc1	波状口縁。穿孔あり	
96	99	T-88	3	深跡	RLR回転・R結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	—	堅織	IIIc2	波状口縁	
97	99	S-88	3	深跡	R結節回転文	RL側面圧痕	—	ミガキ	堅織	IIIc2		
98	99	T-89	3	深跡	R結節回転文・R側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	—	堅織	IIIc2	波状口縁	
99	99	S-88	3	深跡	R結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転	—	堅織	IIIc2		

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面 調整	焼成	分類	備 考	
						口 縁 部	隆 帯	脣 部					
100	99	S-88	3	深鉢	R結節回転文	竹管の刺突	半輪結節体第1類(?)	—	堅緻	IIIc2			
101	99	S-89	—	深鉢	半管竹管による擬似結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIc	102・103・104・105と同一個体		
102	99	S-89	—	深鉢	半管竹管による擬似結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIc3	101・103・104・105と同一個体		
103	99	S-89	—	深鉢	半管竹管による擬似結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIc3	101・102・104・105と同一個体		
104	99	S-89	—	深鉢	半管竹管による擬似結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIc3	101・102・103・105と同一個体		
105	99	S-89	—	深鉢	半管竹管による擬似結節回転文	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIc3	101・102・103・104と同一個体		
106	99	S-89	4	深鉢	半輪結節体第1類(R)	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	IIIc4	波状口縁		
107	99	T-88	4	深鉢	R半輪結節体第1類	—	—	—	堅緻	IIIc4			
108	99	T-90	4	深鉢	R半輪結節体第1類	隆帯なし	R半輪結節体第1類	—	堅緻	IIIc4			
109	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第1類回転(L-R側面圧痕(横位))	R側面圧痕1条	R半輪結節体第1類回転	ナデ	堅緻	IIIc4			
110	99	S-88	3	深鉢	L半輪結節体第1類回転	—	—	ミガキ	堅緻	IIIc4			
111	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第1類回転(端位)	竹管状の刺突	R半輪結節体第1類回転	—	堅緻	IIIc4	112と同一個体		
112	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第1類回転(端位)	竹管状の刺突	R半輪結節体第1類	—	堅緻	IIIc4	111と同一個体		
113	99	T-88	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
114	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	不明	—	堅緻	IIIe			
115	99	S-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	不明	—	堅緻	IIIe	やや口縁が外反する		
116	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	—	—	堅緻	IIIe			
117	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
118	99	S-89	4	深鉢	RCL側面圧痕・R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	—	—	堅緻	IIIe	波状口縁		
119	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe	口唇にRの圧痕		
120	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
121	99	T-90	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	IIIe			
122	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
123	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
124	99	S-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	RLR側面圧痕	RLR回転	—	堅緻	IIIe	波状口縁		
125	99	S-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転	RLR側面圧痕	RLR回転	—	堅緻	IIIe	波状口縁		
126	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第5類回転・RCL側面圧痕	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIf			
127	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	不明	—	堅緻	IIIe	波状口縁		
128	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	不明	—	堅緻	IIIe			
129	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
130	99	T-88	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	RLR回転	—	堅緻	IIIe			
131	99	T-89	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転・RCL側面圧痕	RLR側面圧痕(鉤位)	RLR側面圧痕	LLR複節回転	ナデ	堅緻	IIIe		
132	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転(複位)	—	指頭圧痕	不明	—	堅緻	IIIe	波状口縁	
133	99	S-88	3	深鉢	R半輪結節体第5類回転	—	R半輪結節体第1類	—	堅緻	IIIe			
134	99	S-89	3	深鉢	RCL側面圧痕2度・R半輪結節体第5類回転	—	—	—	堅緻	IIIf	135と同一個体		
135	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第6類回転	—	—	—	堅緻	IIIf	134と同一個体		
136	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第6類回転	RCL側面圧痕	文様なし	不明	—	堅緻	IIIf		
137	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6類回転・RLR側面圧痕	文様なし	—	—	堅緻	IIIg			
138	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg			
139	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	—	—	—	堅緻	IIIg			
140	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	—	—	ミガキ	堅緻	IIIg			
141	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg			
142	99	T-88	4	深鉢	R半輪結節体第6A類・RLR押圧	なし	—	ミガキ	堅緻	IIIg	口唇にR押圧		
143	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	—	—	—	堅緻	IIIg			
144	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	—	—	—	堅緻	IIIg			
145	99	S-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転・RLR側面圧痕	文様なし	RLR回転	—	堅緻	IIIg			
146	99	T-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転・RLR側面圧痕	文様なし	—	ミガキ	堅緻	IIIg			
147	99	S-89	4	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	不明	—	ミガキ	堅緻	IIIg			
148	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第6A類回転・RLR側面圧痕	隆帯なし	—	ナデ	堅緻	IIIg	波状口縁。穿孔あり		
149	99	S-89	3	深鉢	R半輪結節体第6A類回転	隆帯なし	RLR回転	—	堅緻	IIIg			

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面 調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	隆 蒂	觸 部				
150	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	隆蒂なし	—	—	堅緻	IIIg		
151	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	隆蒂なし	RRL回転	—	堅緻	IIIg	216と同一個体	
152	99	S-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	隆蒂なし	—	—	堅緻	IIIg	口唇にもRLR回転	
153	99	S-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	—	—	—	堅緻	IIIg		
154	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	—	—	—	堅緻	IIIg		
155	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg	波状口縁	
156	99	T-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg		
157	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg		
158	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類・RLR側面圧痕	—	—	—	堅緻	IIIg		
159	99	T-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	隆蒂なし	RLR側面圧痕	—	堅緻	IIIg		
160	99	S-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	隆蒂なし	RRL回転	ナデ	堅緻	IIIg		
161	99	S-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕(斜面)	RLR側面圧痕	ミガキ	堅緻	IIIg	162と同一個体	
162	99	S-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	RLR側面圧痕	—	ミガキ	堅緻	IIIg	161と同一個体	
163	99	S-89	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	堅緻	IIIg		
164	99	S-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	指頭圧痕	R単軸結合体第1類回転	—	堅緻	IIIg	口唇にR側面圧痕2条	
165	99	S-88	3	深鉢	R単軸結合体第6A類回転	指頭圧痕	—	—	堅緻	IIIg		
166	99	S-89	3	深鉢	R多軸結合体回転・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	—	堅緻	IIIh			

第7表 第1号遺物集中ブロック出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石膏 記号	備 考		
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)					
99 1	T-90	4	29	14	5	2.0	珪	A1			
99 2	T-88	3	31	13	4	1.4	#	A1			
99 3	T-89	4	40	24	4	3.6	#	A1			
99 4	S-88	3	35	14	5	1.4	#	A2			
99 5	S-88	3	36	16	5	2.0	#	A2			
99 6	T-89	4	26	22	5	2.0	#	A2			
99 7	T-89	3	30	14	4	1.4	#	A2			
99 8	T-89	4	31	18	4	1.4	#	A2			
99 9	S-89	4	24	13	4	1.0	#	A2			
99 10	T-89	4	33	19	5	2.2	#	A2			
99 11	T-89	4	31	13	3	1.2	#	A3			
99 12	S-89	4	91	29	9	19.3	#	B			
99 13	T-88	3	42	26	12	9.2	#	C			
99 14	S-89	3	70	25	8	12.8	#	C			
99 15	S-89	4	39	28	11	7.7	#	C			
99 16	T-89	3	43	33	11	10.5	#	C			
99 17	S-89	4	39	29	9	6.3	#	C			
99 18	T-90	4	36	45	11	10.1	#	C			
99 19	S-89	4	66	34	11	17.7	#	C			
99 20	S-88	3	68	36	7	18.1	#	D1a			
99 21	T-88	3	72	26	13	18.3	#	D1a			
99 22	T-88	3	74	35	11	22.7	#	D1a			
99 23	T-90	4	66	26	9	15.3	#	D1a			
99 24	S-89	4	65	28	12	14.9	#	D1a			
99 25	T-88	4	71	38	9	23.3	#	D1a			
99 26	T-90	3	79	29	11	18.7	#	D1a			
99 27	T-89	4	69	21	7	12.0	#	D1a			
99 28	U-85・86 盆土	84	27	11	27.4	#	D1a				
99 29	T-90	3	67	21	7	9.6	#	D1a			
99 30	T-89	3	68	25	10	14.5	#	D1a			
99 31	S-89	4	69	24	9	17.8	#	D1a			

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
99 32	T-90	4	(63)	(24)	8	10.3	珪	D 1a		
99 33	T-89	4	62	23	7	10.4	#	D 1a		
99 34	S-89	3	87	25	9	18.8	#	D 1a		
99 35	T-88	4	84	24	8	14.4	#	D 1a		
99 36	T-88	3	66	24	6	8.8	#	D 1a		
99 37	T-90	3	69	27	8	13.2	#	D 1a		
99 38	S-89	4	65	30	9	15.4	#	D 1a		
99 39	T-90	4	(67)	(33)	9	20.0	#	D 1a		
99 40	T-88	3	77	34	9	16.9	#	D 1a		
99 41	T-88	3	(55)	(24)	9	10.1	#	D 1a		
99 42	T-88	3	47	25	6	6.0	#	D 1a		
99 43	T-89	4	74	39	9	21.0	#	D 1b		
99 44	U-89	4	84	31	7	#	D 1b			
99 45	T-89	4	97	28	8	19.4	#	D 1b		
99 46	T-88	4	66	41	8	14.8	#	D 1b		
99 47	T-90	4	67	39	10	17.9	#	D 1b		
99 48	T-88	3	73	35	8	19.3	#	D 1b		
99 49	T-90	3	78	33	9	13.8	#	D 1b		
99 50	U-87	盛土	64	31	6	14.7	#	D 1b		
99 51	T-89	4	(63)	(36)	7	13.6	#	D 1b		
99 52	T-89	3	57	35	7	11.4	#	D 1b		
99 53	S-89	3	53	29	10	12.2	#	D 1b		
99 54	T-89	4	(26)	(38)	5	5.7	#	D 1b		
99 55	T-90	3	77	44	11	14.4	#	D 1b		
99 56	T-90	4	47	27	5	3.2	#	D 1b		
99 57	S-89	3	46	46	7	13.2	#	D 1b		
99 58	T-90	3	61	52	7	18.8	#	D 1b		
99 59	T-89	4	69	60	17	31.9	#	D 1b		
99 60	T-89	3	95	52	19	30.6	#	D 1b		
99 61	T-90	3	86	31	12	14.7	#	D 1b		
99 62	S-89	4	75	40	10	26.5	#	D 1c		
99 63	S-89	4	75	30	9	18.0	#	D 1c		
99 64	T-88	3	66	32	9	16.5	#	D 1c		
99 65	T-89	盛土	76	39	8	16.4	#	D 1c		
99 66	T-89	4	53	53	9	10.7	#	D 1c		
99 67	S-88	3	75	28	9	15.1	#	D 1c		
99 68	T-89	4	80	23	8	8.9	#	D 1d		
99 69	T-88	3	59	25	6	7.9	#	D 1d		
99 70	T-90	4	26	17	4	1.5	#	D 1d		
99 71	S-89	4	54	37	11	10.6	#	D 1d		
99 72	T-89	4	49	34	9	11.1	#	D 1d		
99 73	S-89	4	72	40	10	25.2	#	D 1e		
99 74	T-89	4	81	50	9	35.3	#	D 1e		
99 75	T-88	3	66	47	12	25.6	#	D 1e		
99 76	T-89	4	48	42	7	14.1	#	D 1e		
99 77	T-88	盛土	(47)	(17)	6	3.6	#	D 1f		
99 78	T-88	3	70	29	5	11.6	#	D 1f		
99 79	U-89	4	67	31	8	16.7	#	D 1f		
99 80	S-89	3	68	45	7	16.5	#	D 1f		
99 81	T-89	4	71	49	8	21.8	#	D 1f		
99 82	T-88	3	50	28	5	6.7	#	D 1f		
99 83	T-89	4	64	34	9	13.9	#	D 1f		
99 84	U-87		51	41	8	15.4	#	D 1f		
99 85	S-89	4	38	20	7	4.6	#	D 1g		
99 86	T-88	3	(32)	(22)	7	4.2	#	D 1g		
99 87	U-87	盛土	(28)	(18)	5	2.4	#	D 1g		

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
99 88	T-88	3	34	25	10	5.7	珪	D1g		
99 89	5-89	3	52	25	8	7.8	#	D1g		
99 90	T-88	3	35	29	6	6.2	#	D1g		
99 91	T-90	3	55	36	6	7.7	#	D1g		
99 92	T-88	3	33	43	7	10.1	#	D1g		
99 93	T-89	盛土	(47)	(38)	9	10.3	#	D1g		
99 94	T-89	4	63	38	10	12.2	#	D1g		
99 95	S-89	4	44	60	9	26.4	#	D2		
99 96	S-88	3	38	44	8	11.5	#	D2		
99 97	T-89	4	49	75	8	25.9	#	D2		
99 98	S-89	3	30	40	8	6.3	#	D2		
99 99	T-88	3	57	23	8	13.0	#	E1		
99 100	S-89	4	(53)	(20)	9	11.9	#	E1		
99 101	T-89	4	64	24	10	14.4	#	E1		
99 102	T-89	4	89	34	25	63.3	#	E1		
99 103	T-89	4	120	50	16	67.2	#	E2		
99 104	T-89	4	84	39	12	38.2	#	E2		
99 105	T-89	4	73	38	16	41.5	石	E2		
99 106	T-89	3	97	28	11	22.2	珪	F		
99 107	S-89	4	100	49	16	41.9	#	F		
99 108	T-90	3	63	19	7	7.7	#	F		
99 109	T-89	4	71	44	18	43.9	石	F		
99 110	S-89	4	49	29	11	10.7	珪	F		
99 111	T-90	4	41	46	17	15.2	#	F		
99 112	T-90	3	76	44	22	56.4	#	F		
99 113	S-89	4	66	44	11	21.1	#	F		
99 114	U-89	4	42	53	15	21.1	#	F		
99 115	T-90	4	45	43	12	11.8	#	F		
99 116	T-90	3	53	64	16	41.9	#	F		
99 117	S-89	4	53	54	9	28.5	#	F		
99 118	T-90	4	98	53	19	82.0	#	F		
99 119	T-90	4	61	51	23	51.8	#	F		
99 120	S-89	4	40	37	9	10.7	#	F		
99 121	S-89	4	56	36	7	10.7	#	F		
99 122	S-89	4	73	48	13	30.9	#	F		
99 123	T-90	4	45	67	11	31.8	#	F		
99 124	T-89	4	81	46	33	94.7	#	F		
99 125	T-90	3	60	26	11	10.4	#	F		
99 126	T-88	3	35	21	8	3.9	#	F		
99 127	T-88	3	120	39	23	52.1	#	F		
99 128	T-88	4	(67)	(49)	9	27.1	#	F		
99 129	S-89	4	(51)	(24)	6	8.4	#	F		
99 130	T-89	3	(45)	79	(7)	22.1	#	F		
99 131	T-89	4	27	59	12	14.6	#	F		
99 132	T-89	3	45	41	10	7.6	#	F		
99 133	T-90	4	33	77	10	21.1	#	F		
99 134	T-89	3	56	38	10	20.0	#	F		
99 135	T-88	3	(47)	25	(10)	9.1	#	F		
99 136	T-89	4	67	34	8	17.8	#	F		
99 137	T-88	3	64	25	12	17.3	#	F		
99 138	T-90	3	(63)	(30)	8	14.8	#	F		
99 139	S-89	4	58	34	9	11.5	#	F		
99 140	T-90	4	44	28	11	8.4	#	F		
99 141	T-90	4	61	34	17	21.3	#	F		
99 142	S-89	4	63	44	18	28.9	#	F		
99 143	T-90	3	67	31	8	14.3	#	F		

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
99 144	T-89	4		68	42	12	20.3	珪	F	
99 145	T-89	4		78	44	19	40.2	#	F	
99 146	T-90	4		82	40	19	29.3	#	F	
99 147	T-90	4		61	52	14	34.5	#	F	
99 148	T-90	4		57	44	10	15.7	#	F	
99 149	S-88	3	(73)	(44)	28		148.9	輝	G	
99 150	T-89	4	(68)	(22)	12		31.4	泥	G	
99 151	T-89	4	(82)	(79)	20		145.5	安	H	
99 152	T-89	4		71	(112)	(20)	189.8	凝	H	
99 153	T-89	4		50	80	18	88.9	#	H	
99 154	S-89	4	95	120	35		418.6	#	IIb	
99 155	T-89	4	138	74	40		496.7	#	I2	
99 156	T-90	4	99	78	31		266.9	#	I2	
99 157	T-89	4	131	58	45		522.1	変	I3	
99 158	T-89	4	163	50	25		230.2	石	I3	

第8表 第1号遺物集中ブロック出土土製品観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	文様		内面調整	焼成	備考
					外面	裏面			
1 99	T-9 0	I	ミニチュア土器	R L R回転			ナデ	堅緻	
2 99	T-8 9	I	ミニチュア土器	無文			ナデ	堅緻	
3 99	T-8 9	II	ミニチュア土器	無文			ナデ	堅緻	
4 99	T-8 9	II	ミニチュア土器	無文			ナデ	堅緻	

第9表 第1号遺物集中ブロック出土石製品観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類記号	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
99 201	T-90	一括		(49)	(30)	(25)	35.9	石製品		擦痕が顕著に認められる

第3節 C地区の調査

C地区はグリッドライン125~139の遺跡範囲内における丘陵地部分にあたり、標高は22~24mである。本地区においては現地表面から1~3m以上の深さまで碎石や廃材が埋められていたことから、重機によってこれらを除去した結果、かろうじてわずかな土層の残存が確認できた。地形的にみると、南側から北側に向かって緩やかに下る、緩傾斜の平坦な地形である。

検出した遺構は、フラスコ状土坑1基、溝状ピット1基であり、これらは基本層序第III層からの検出である。遺物についてはこれらの遺構内及び遺構外において縄文時代中期~後期の土器が4個体、石器が1点出土している。遺構外の遺物は基本層序第II・III層からの出土である。

1. 検出遺構と出土遺物

1) 土坑・溝状ピット

SK-03(第63図)

[位置] G-135グリッドに位置しており、基本層序第III層上面において確認した。

[重複] なし。

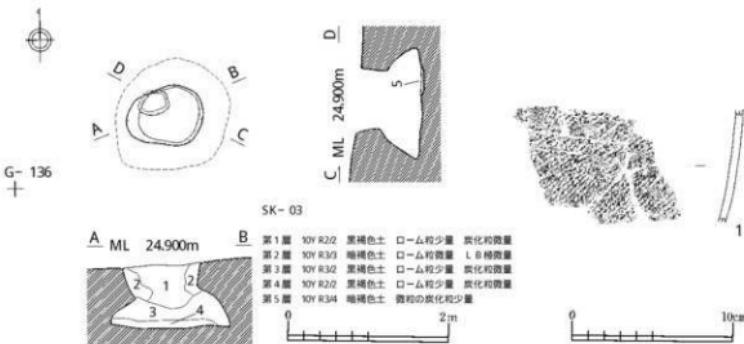
[平面形・規模] 開口部は橢円形を呈し長軸96×短軸74cmを測り、底部は橢円形を呈し長軸156×短軸140cmを測る。確認面から底面までの深さは78cmである。

[断面形・壁] 頸部がやや幅広の袋状を呈する。基本層序第V層を壁面としており、堅緻である。

[底面] 基本層序第V層を掘り込んで底面としている。底面の北側に長軸41×短軸32×深さ5cmの平面橢円形を呈する落ち込みが存在する。

[堆積土] 4層に分層した。壁付近にローム粒・ロームブロックを混入する暗褐色土、それ以外の部分はローム粒・炭化物を混入する黒褐色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 覆土及び底面から第V群土器が破片で出土した。外面の文様はLRが回転施文され、内面はナデにより調整されている。



第63図 SK-03・SK-03出土遺物

SK-04(第64図)

[位置] H・I-135グリッドに位置しており、基本層序第Ⅲ層上面において確認した。

[重複] なし。

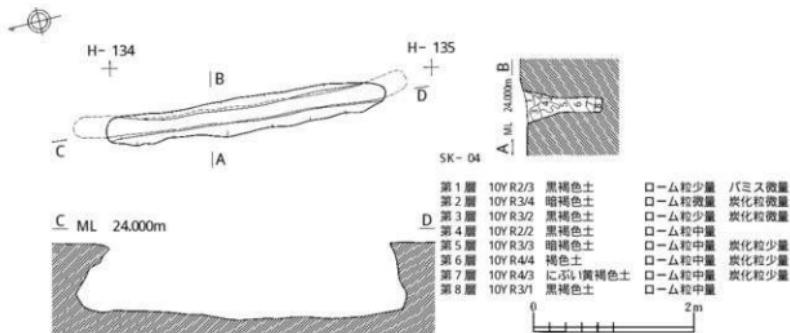
[平面形・規模] 溝状を呈し、開口部は長軸348×短軸48cmを測り、底部は長軸416×短軸20cmを測る。確認面から底面までの深さは93cmである。

[断面形・壁] 長軸方向の壁は内傾して立ち上がり、短軸方向の壁はほぼ垂直であるが開口部付近で外傾して立ち上がる。基本層序第V層を壁面としており、やや龍い。

[底面] 基本層序第V層を掘り込んで底面としている。壁に比べて堅緻である。

[堆積土] 8層に分層した。ローム粒・炭化物を混入する黒褐色・暗褐色を主体とする土層が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。



第64図 SK-04

2) 遺構外出土遺物

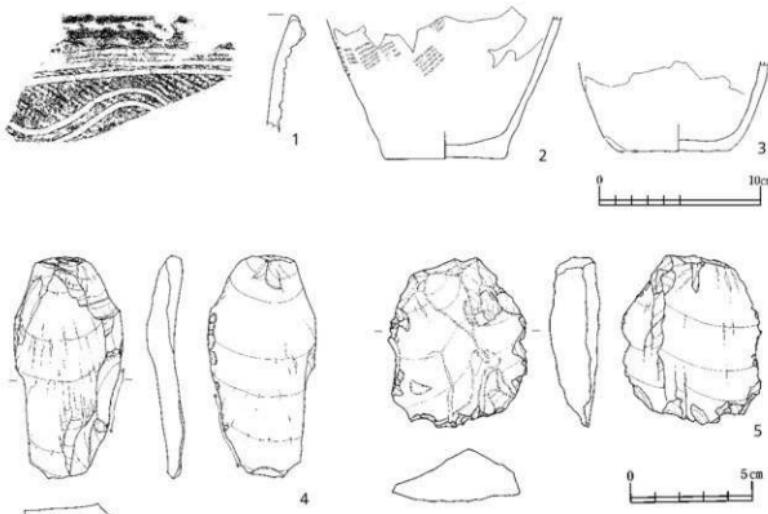
1. 土器(第65図1~3)

第V群土器 繩文時代中期後半~後期初頭の土器

3個体分が出土した。第65図1は口縁部の資料である。口縁はやや外反し、外面の文様はR Lを回転施文した後、直線状ないし波状の沈線が施されている。口唇部はR L繩文を斜位に押圧した上に、その両端に2条の粘土紐を貼り付けた後、ナデ・ミガキが丁寧に施されている。内面にもミガキが施されている。第65図2・3は胴部~底部の資料である。2はRが回転施文され、3は無文である。

2. 石器(第65図4・5)

不定形石器が2点出土した。4は縦長で背面右側縁に微細な剥離がみられる。5は平面円形を呈し、弧状を呈する縁辺に刃部調整が施されている。



第65図 C地区遺構外出土遺物

第10表 SK-03出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文様	内面調整	焼成	分類	備考
1	99	SK-03	底面	深鉢	脇部	LR回転	ナデ、ミガキ	堅焼	V	

第11表 C地区遺構外出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	遺物号	器種	部位	文様	内面調整	焼成	分類	備考
1	99	I-134	II・III	22	深鉢	口縁	粘土紹貼付・沈線・RL	ナデ	堅焼	V	
2	99	H-135	II・III	K-1	深鉢	脇・底部	L	ナデ、ミガキ	堅焼	V	
3	99	H-135	II・III	K-2	深鉢	脇・底部	なし	ナデ	堅焼	V	

第12表 C地区遺構外出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類	備考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
1	99	E-135	II・III	91	44	18	50.1		F	
2	99	E-135	II	69	57	21	79.5		F	

第IV章 自然科学的分析

大矢沢野田(1)遺跡の古環境について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大矢沢野田(1)遺跡(青森市大矢沢字野田所在)は、青森平野と後背に広がる丘陵地との境界付近に位置する縄文時代前期初頭～後期の遺跡である。遺跡は平野部から丘陵部にかけて広がるが、今回分析調査を実施するのは平野部である。平野部には縄文時代前期初頭の遺構や遺物が検出されているが、その上位には泥炭層が厚く堆積している。このような層相により、当初平野部にて生活が営まれていたが、その後低地部が湿地化したため、生活の中心が丘陵部へと移ったものと考えられる。そこで今回は、低地部での環境変遷をとらえるために、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定を行う。

1 . 試 料

試料は、低地部(ドレンチ 2 東壁)で採取された 5 点である。X III 層は腐植を含む砂質シルト、X II 層は分解が進んだ泥炭質シルトである。これらは縄文時代前期初頭の遺物を包含し、X III 層が遺構掘り込み面になっている。VII 層～ XI 層は無遺物の泥炭層質シルト層で、ヨシの地下茎を多量に含むが、下位ほど分解が進んでいる。これら 5 試料に関して、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を行なう。なお、種実の分類・同定過程で木材を検出し樹種同定を行う予定であつたが、同定可能な木材が検出されなかつたため、分析を行わなかつた。

2 . 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する。種の同定は、Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991a, 1991b) Krammer, K. (1992), Reichardt, E. (1995), Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996), Lange-Bertalot, H. et al. (1996), Metzeltin, D. & Witkowski, A. (1996)などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 200 個体以上の試料については、産出率 3 % 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤(1990), 陸生珪藻については伊藤・堀内(1991), 汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T. (1995)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸=9:1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(3) 植物珪酸体分析

試料を湿重約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(4) 種実同定

土壤試料約150gを瓶に入れ、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗させたあと、残渣を集め。双眼実体顕微鏡で観察し、その中から同定可能な種実遺体を抽出・同定する。

3. 結 果

(1) 硅藻分析

結果を表1・図1に示す。硅藻化石はX層・XⅢ層を除いて100個体以上産出する。産出種は淡水生種が優占する。産出分類群数は20属64種、完形殻の産出率は約50~65%である。以下、硅藻化石群集の特徴を、下位から述べる。

・ XⅢ層

硅藻化石の産出数が21個体と少ないが、陸生硅藻A群の*Navicula mutica* が10個体産出する。陸生硅藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する硅藻であり、中でも、乾燥に耐性のある種がA群とされる。

・ XⅡ層

全体の約70%を、陸生硅藻が占めることが特徴である。中でも、陸生硅藻A群の*Hantzschia amphioxys* が約40%産出する。流水不定性種（止水域にも流水域にも普通に出現する種）・沼沢湿地付着性種の*Navicula elginensis* が約20%産出する。沼沢湿地付着性種とは、沼よりも浅く水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼澤や、さらに水深の浅い湿地に生育する種とされる。

・ XⅠ層

全体的には、貧塩不定性種（小量の塩分があつてもこれによく耐えることができる種）・流水不定性種（止水域にも流水域にも普通に出現する種）が多産する。また、好+真酸性種（酸性水域に生育する種）とpH不定性種（pH7.0付近の中性水域で最もよく生育する種）が、それぞれ約35~40%を占める。中でも、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の*Pinnularia viridis* が約30%産出する。その他は流水不定性

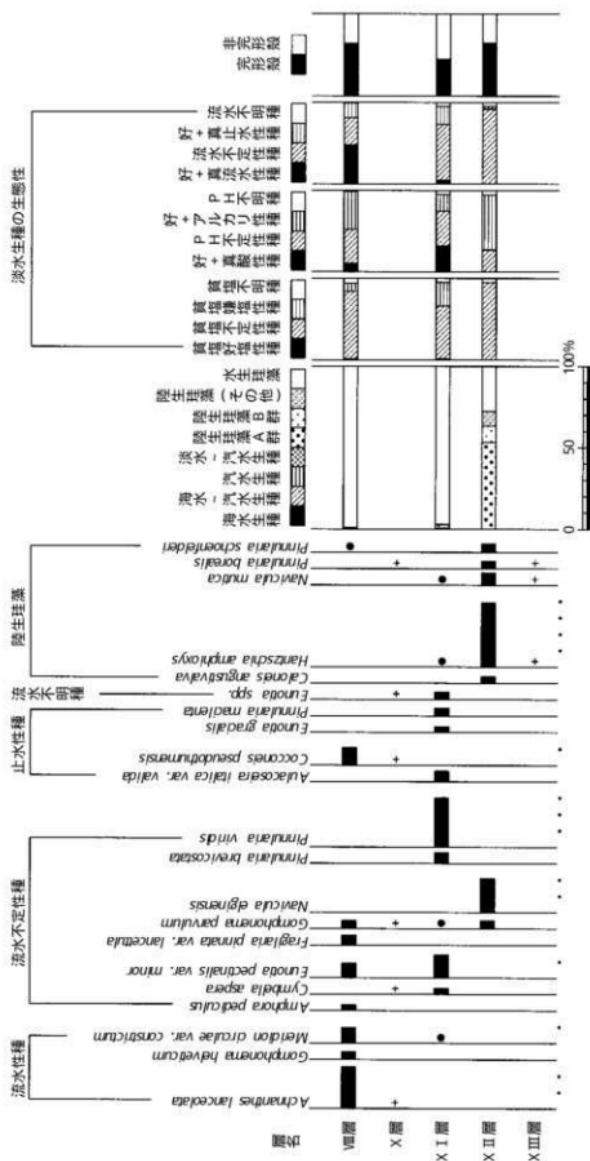


図1 主要な化石群の層別分析
淡水生種出率・各種生種出率・各層別出率について示す。なお、+は3%未満、*は100個体以上検出された試料について示す。

表1 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	V層	X層	XI層	XII層	XIII層
	場分	pH	流水						
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Müller	Ogh-Meh	al-il	ind	-	1	1	-	2	-
Achnanthes elevata Grunow	Ogh-Ind	al-il	I-ph	-	4	-	-	-	-
Ochnanthus acuminatus Grunow	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"K,T"	52	1	-	-	-
Achnanthes rostrata Grunow	Ogh-Ind	al-il	I-ph	U	1	-	-	-	-
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-Ind	Ind	c-ph	T	1	-	-	-	-
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-Ind	al-bl	ind	T	7	-	-	-	-
Alulaconceria italicica var. valdiviana (Ehr.) Simonsen	Ogh-Ind	al-il	I-ph	-	-	7	-	-	-
Calones angustivalva Pettit	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	B	-
Calones leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-Ind	Ind	I-ph	RB	-	-	-	6	-
Ceratoneis arcus var. recta (C.L.) Krässke	Ogh-Ind	Ind	c-ph	T	3	-	-	-	-
Cocconeis placentaria (Ehr.) Cleve	Ogh-Ind	al-il	ind	U	4	1	1	-	-
Cocconeis pseudohumilis (Ehr.) Cleve	Ogh-Ind	al-il	I-ph	T	1	-	-	-	-
Cocconeis pseudohumilis Reichardt	Ogh-Ind	al-il	I-ph	-	22	2	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-Ind	al-il	ind	"O,T"	-	8	4	-	-
Cymbella cupisoides Kuetzing	Ogh-Ind	Ind	ind	-	-	1	-	-	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-Ind	Ind	I-ph	"K,T"	4	-	-	-	-
Diatomella hyemalis var. mesodon (Ehr.) Kirchner	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"K,T"	3	-	-	-	-
Diploneis elliptica (Kuetz.) Cleve	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"RA,T"	1	-	-	-	-
Eucyclotis rotula (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	I-ph	-	-	-	1	-	-
Eudora granata Meister	Ogh-hob	al-bl	ind	-	-	4	-	-	-
Eudora implicata Koepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	-	3	-	-
Eudora pectinata var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	18	-	15	-	-
Eudora praemuta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	I-ph	"RB,O,T"	-	1	-	-	-
Eudora spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	2	5	-	-	-
Fragilaria construens f. ventre (Ehr.) Hustedt	Ogh-Ind	al-il	I-ph	S	-	2	-	-	-
Fragilaria prima Ehrenberg	Ogh-Ind	al-il	I-ph	S	3	-	-	-	-
Fragilaria planula (Schum.) Hustedt	Ogh-Ind	al-il	ind	S	12	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh-Ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-
Fragilaria vaucheriæ (Kuetz.) Petersen	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"K,T"	1	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-Ind	Ind	I-ph	O	5	1	1	-	-
Gomphonema angustum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-Ind	al-il	I-ph	O	2	-	-	-	-
Gomphonema angustum A gardh	Ogh-Ind	al-il	ind	1	-	1	-	-	-
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh-Ind	al-il	ind	1	-	1	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-Ind	al-il	ind	1	-	1	-	-	-
Gomphonema heterostoma Ehrenberg	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"O,U"	1	-	1	1	-
Gomphonema microcephala Kuetzing	Ogh-Ind	Ind	I-ph	T	10	-	-	-	-
Gomphonema olivaceum (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-Ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-
Gomphonema panulum (Grun.) Kuetz. et Lange-Bertalot	Ogh-Ind	Ind	I-ph	U	3	-	-	-	-
Gomphonema punctatum (Grun.) Kuetz. et Lange-Bertalot	Ogh-Ind	Ind	I-ph	U	10	1	2	10	-
Gomphonema sunatrum Fricke	Ogh-Ind	al-il	ind	-	6	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-Ind	Ind	I-ph	J	-	1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-unk	unk	unk	1	1	1	-	-	-
Mentidium elongatum (Constance) (Ralfs) V. Heuck	Ogh-Ind	al-il	ind	"RA,U"	-	-	1	79	4
Navicula elongata (Eng.) Ralfs	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"K,T"	19	-	3	-	-
Navicula elongata var. neglecta (Krauss) Patrick	Ogh-Ind	al-il	I-ph	"O,U"	-	-	-	42	-
Navicula granata Krause	Ogh-Ind	al-il	I-ph	U	-	-	1	-	-
Navicula granata var. palustris (Hust.) und	Ogh-Ind	Ind	ind	RB	-	-	5	-	-
Navicula mobilisensis var. minor Patrick	Ogh-Ind	Ind	ind	RB	-	-	1	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-Ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	-
Navicula saophillii Bock	Ogh-Ind	Ind	ind	"RA,S"	-	-	1	15	10
Navicula semimarginata Grunow	Ogh-Ind	Ind	ind	"RB,S"	-	-	1	-	-
Navicula tenuis Grunow	Ogh-unk	unk	unk	1	-	-	1	1	-
Nodularia nodosa (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	I-ba	O	-	-	1	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-Ind	Ind	ind	RA	-	2	-	9	3
Pinnularia borealis var. solaris (Ehr.) Rabenhorst	Ogh-Ind	Ind	ind	RA	-	-	3	1	-
Pinnularia brevis costata Cleve	Ogh-Ind	al-il	ind	RA	-	-	7	-	-
Pinnularia macilenta (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	I-ph	-	-	5	-	-	-
Pinnularia obscura Kuetzing	Ogh-Ind	Ind	ind	RA	-	-	2	-	-
Pinnularia rupestris (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	2	-	-	-
Pinnularia schenckii Krammer	Ogh-Ind	Ind	ind	RI	1	-	-	10	-
Pinnularia similes Hustedt	Ogh-Ind	Ind	ind	-	-	-	1	-	-
Pinnularia subrotundophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	I-ph	-	1	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-Ind	Ind	ind	O	-	-	32	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-
Rhoicosphenia abbreviata (A.g.) Lange-B.	Ogh-hob	al-il	I-ph	"K,T"	3	-	-	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-Ind	Ind	ind	RB	-	-	-	6	-
Stauroneis phoenixcenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-Ind	Ind	I-ph	O	-	-	2	-	-
Stauroneis phoenixcenteron var. signata Meister	Ogh-Ind	Ind	ind	-	-	3	-	-	-
海水生種合計				0	0	0	0	0	0
淡水生種合計				0	0	0	0	0	0
淡水-汽水生種合計				0	0	0	0	0	0
淡水-汽水生種合計				0	1	1	0	2	-
淡水生種合計				205	22	106	202	19	21
珪藻化石總數				205	23	107	202	21	-

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

C.R. : 流水に対する適応性

Ogh-Meh : 淡水-汽水生種

al-bl : 真アルカリ性種

I-bi : 真止水性種

Ogh-hob : 対地性種

al-il : 好アルカリ性種

I-ph : 対止水性種

Ogh-ind : 貧地不定性種

ind : pH不定性種

ind : 混流水性種

Ogh-hob : 貧地嫌性種

ac-il : 好酸性種

r-ph : 対淡水性種

Ogh-unk : 貧地不明種

unk : pH不明種

unk : 混水不明種

環境指標種群

J : 上流性河川指標種, K : 中-下流性河川指標種, O : 沼澤湿地付生種群 (以上は安藤, 1990)

S : 好汚水性種, U : 底域適応性種, T : 好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T., 1986)

R : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, RI群, 伊藤・堀内, 1991)

種・沼沢湿地付着性種の*Eunotia pectinalis* var. *minor* が約15%産出し、*Eunotia gracilis*、*Pinnularia macilenta*などの止水性種も若干産出する。

・X層

珪藻化石の産出数が23個体と少ないが、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の*Cymbella aspera* が8個体産出する。

・VII層

全体的には、貧塩不定性種・好+真流水性種（流水域で生育する種）が多産する。また、pH不定性種・好+真アルカリ性種（アルカリ性水域で生育する種）が、それぞれ約40~50%を占める。中でも、好流水性種の*Achnanthes lanceolata* が約25%産出する。その他に、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、好止水性種の*Cocconeis pseudothumensis* などが約10%産出する。

(2) 花粉分析

結果を表2・図2に示す。X II層、X III層は、花粉化石がほとんど検出されず、わずかにみられる花粉化石も保存状態が悪い。VII層～X I層は花粉化石が多く検出されるが、木本花粉の割合が高くなっている。木本花粉ではハンノキ属、ブナ属、コナラ属が多産するが、ハンノキ属は上位で減少する。その他、クルミ属、クリ属、トチノキ属、トネリコ属などを伴う。草本花粉は、産出する割合が低いが、イネ科が多くみられ、コウホネ属、ミツガシワ属などの水生植物も若干みられる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表3、図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態は比較的良好である。

X III層ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やスキ属などが認められる。X II層やX I層、X 層ではタケ亜科が減少し、ヨシ属の産出が目立つ。VII層では再びタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やスキ属などが認められる。

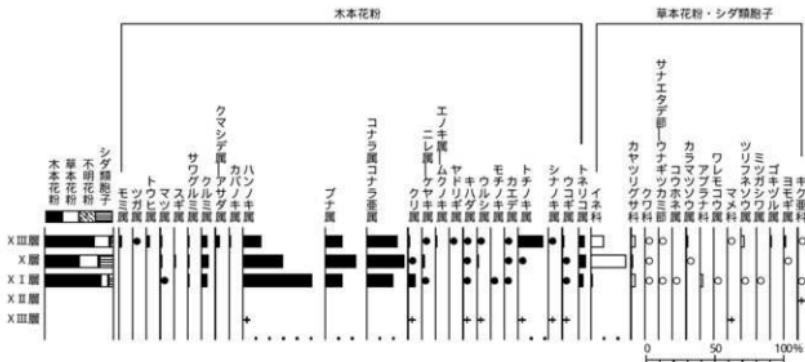


図2 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、
• ○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

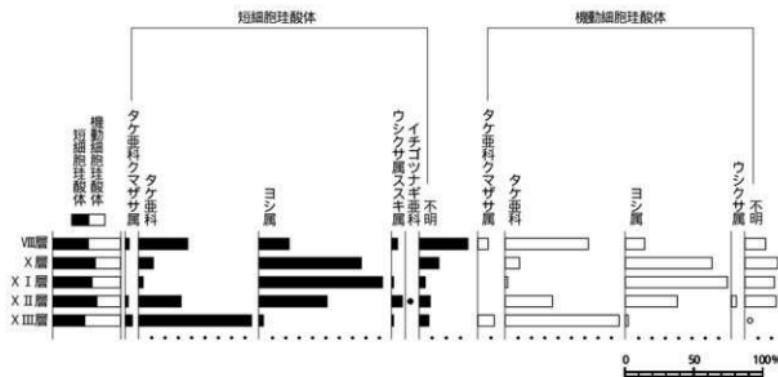


図3 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

なお、●○は1%未満の種類を示す。

(4) 種実定

結果を表4に示す。X II層、X III層からは、種実遺体がほとんどみられず、主にVII層～X I層で検出される。木本類はほとんどみられず、大部分が草本類である。以下に、検出された種類の形態的特徴を示す。

- ・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核が検出された。黒褐色。大きさは5 mm程度。半円形。表面には細かい亀甲状の浅い網目模様がみられる。表面は薄くて堅く、やや光沢がある。

- ・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科

核が検出された。茶褐色で側面觀は半円形、上面觀は卵形。長さ2 mm程度。核はやや厚く硬い。核の表面には、不規則な瘤状突起がある。

- ・ヒルムシロ属 (*Potamogeton*) ヒルムシロ科

果実が検出された。褐色、広卵形で、大きさ4 mm程度。背面の皮ははずれやすい。表面は看くてやや堅く、ざらつく。

- ・スゲ属 (*Carex*) カヤツリグサ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。褐色で3稜がある。先端部は急に細くなる。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

- ・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒色。堅く光沢がある。大きさは2 mm程度。偏平で背面が高く稜になっている。腹面は平らである。片凸レンズ状の広倒卵形。先端部はとがり、基部はせばまって「へそ」がある。表面には細かい凹凸があり、横軸方向に平行な横しわがあるように見える。数本の針状の花被がみられ、先端には逆刺がある。

- ・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。3稜形で表面は薄くて堅く、ざらつく。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色。側面觀は円形で、上面觀は凸レンズ形を呈している。大きさは1mm程度。側面に「へそ」がある。表面は、細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・タガラシ (*Ranunculus sceleratus L.*) キンボウゲ科キンボウゲ属

種子が検出された。円盤状で、直径は1mm程度。周辺部は白色で厚く、中央部が黄色でやや凹む。表面はざらつく。

・オトギリソウ属 (Hypericum) オトギリソウ科

種子が検出された。長楕円形で大きさは1mm程度。種皮は黒色で薄く、柔らかい。表面は亀甲状の模様がある。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。半球状で淡褐色。大きさは2mm程度。球面側では数本の縦方向に大きく裂けた溝があり、内部が露出している。果実が分離した面では、中央に縦軸方向に延びた鋸歯形のくぼみがあり、内部が露出している。

・ミツガシワ (*Menyanthes trifoliata L.*) リンドウ科ミツガシワ属

種子が検出された。側面觀はややつぶれた円形で、上面觀は扁平である。褐色で、種皮は厚くて堅く、光沢がある。表皮には、細長い形状の細胞が全面を覆っている。

・キク科 (Compositae sp.)

果実が検出された。黒褐色。大きさは2mm程度。情円錐形で、上面觀はひし形。

4. 考 察

(1) 低地の水域環境と植生

X III層は珪藻化石の産出数が少ないから、基本的には堆積環境の詳細が不明である。しかし、陸生珪藻A群の*Navicula mutica* が若干産出することや、X II層と同様に陸生珪藻が多産することから、X III層とX II層は比較的乾い

表2 花粉分析結果

種 種	試料番号	VII層	X層	XI層	XII層	XIII層
木本花粉						
モミ属	5	-	-	-	-	-
シガ属	1	-	-	-	-	-
トウヒ属	6	-	-	-	-	-
マツ属	3	3	1	-	-	-
スギ属	-	3	-	-	-	-
ヤナギ属	-	-	1	-	-	-
サワグルミ属	3	3	3	-	-	-
クルミ属	10	10	9	-	-	-
クマシダ属- アサガホ	8	-	-	-	-	-
ハビバシ属	3	-	1	-	-	-
カバノキ属	4	-	-	-	-	-
ハンノキ属	30	60	109	-	4	-
ブナ属	28	47	26	-	-	-
コナラ属-コナラ属	50	56	42	-	-	-
クリ属	3	2	12	-	6	-
ニレ属- ケヤキ属	2	4	2	-	-	-
エノキ属- ムクノキ属	3	-	-	-	-	-
ツリガナ属	1	-	-	-	-	-
キバダ属	2	1	1	-	3	-
ウルシ属	1	3	-	-	2	-
モチノキ属	-	-	1	-	-	-
カエデ属	2	1	-	-	-	-
トドノキ属	41	2	-	-	6	-
ブドウ属	1	-	-	-	-	-
シナノキ属	1	-	-	-	1	-
ウコギ属	3	1	1	-	1	-
イボタノキ属	1	-	1	-	-	-
トネリコ属	9	10	7	-	-	-
草本花粉						
イネ科	27	100	4	-	-	-
カヤツリグサ科	11	7	8	-	-	-
クワ科	2	2	1	-	-	-
サンエイ科- ウナギツカミ群	1	-	1	-	-	-
コウホネ属	-	-	1	-	-	-
カラマツクワ属	4	1	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	5	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	1	-	-	-
マメ科	1	-	-	-	1	-
シリフネ属	6	-	1	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	1	-
ミツガシワ属	-	-	1	-	-	-
ネナシカラタケ属	1	-	-	-	-	-
コキヨリ属	4	-	-	-	-	-
ヨモギ属	5	3	-	-	-	-
オナモ属	2	-	-	-	-	-
モクナガ科属	1	-	1	1	-	-
不明花粉	-	-	2	2	-	-
シダ類孢子	9	-	7	2	-	-
合計	9	81	12	5	-	-
木本花粉						
草本花粉	221	206	218	0	23	-
不明花粉	65	113	24	1	5	-
シダ花粉	9	4	7	2	1	-
不明類孢子	9	81	12	5	0	-
無計 (不明を除く)	295	400	254	6	28	-

表3 植物胚胞分析結果

種 種	試料番号	VII層	X層	XI層	XII層	XIII層
イネ科葉表面細胞壁胞体						
タケモチクマサワ属	5	-	-	5	10	-
タケモチ	74	22	8	85	186	-
ヨシ属	46	161	217	134	7	-
ウシクサ属ススキ属	7	-	2	20	2	-
イチゴノギサ属	-	-	-	1	-	-
不明キビ属	12	9	4	12	3	-
不明ヒグマバ型	29	15	2	6	5	-
不明ダントク型	32	5	2	4	8	-
イネ科葉表面細胞壁胞体						
タケモチクマサワ属	15	-	-	-	31	-
タケモチ	118	15	4	55	220	-
ヨシ属	27	91	144	61	5	-
ウシクサ属	-	-	-	4	-	-
不明	29	34	40	35	1	-
合計	204	212	235	267	221	-
イネ科葉表面複雑細胞壁胞体						
イネ科葉表面複雑細胞壁胞体	89	140	188	155	257	-
無計	393	352	423	422	478	-

た環境であったと思われる。これらの層では、花粉化石と種実遺体の保存が悪い。地形的に考えると、河川堆積物が離水して微高地となり、これが縄文時代前期初頭の生活面として利用されたと考えられる。珪藻化石の結果から、当時の地表面は比較的乾燥していたと考えられるが、好気的状況下では花粉化石や種実遺体は風化を受けやすいことから、これらの層ではほとんど検出されなかったと考えられる。植物珪酸体分析結果をみると、X III 層ではクマザサ属を含むタケ亜科が多産する。冷温帯植生におけるタケ亜科は、ブナ林などの林床に広く分布するほか、何らかの理由で森林の一部が失われた時、先駆的に侵入してササ群落を作るなど重要な意味をもつ。十和田火山周辺の風成層の植物珪酸体分析成果によれば、最終氷期が終わってから縄文時代にかけてタケ亜科由来の植物珪酸体が優占しており（細野ほか、1992；佐瀬ほか、1993）。後背山地にはタケ類が広く分布していたことが推測される。おそらく、人為的に切り開かれた場所や、林縁部などにはササ類を中心とする草地が広がっていたものと推測される。X II 層になると、タケ亜科に混じってヨシ属が多産するようになる。X II 層は腐植が多くなるが、これはヨシ属が腐植の由来となっているものと考えられる。一方、X II 層からは沼沢湿地付着性種の *Navicula elginensis* などの水生珪藻もみられ、湿地化したことが伺われる。生業の中心が低地部から丘陵部に移った原因として、低地部の湿地化が挙げられているが、これらの成果からみても、調和的といえる。

X 層と X I 層はともに未分解の泥炭層である。X I 層は水生珪藻が多産し、沼沢湿地性種の *Pinnularia viridis* が多産する。また、沼沢湿地性種の *Eunotia pectinalis* var. *minor* や止水性種が数種類産出することから、沼澤地的な環境であったと推定される。X 層は珪藻化石の産出数が少ないことから、基本的には堆積環境の詳細が不明である。しかし、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の *Cymbella aspera* が若干産出することから、X I 層と同様な環境が推測される。一方 X 層と X I 層の花粉化石群集では木本類が、種実では草本類が、植物珪酸体ではヨシ属がそれぞれ多産し、化石により組成が大きく異なる。これは、各化石が反映している植生が異なるためと考えられる。分析地点の局地的な植生をよく反映しているのは、種実と植物珪酸体である。種実の種類構成をみると、スゲ属、ホタルイ属、オトギリソウ属、ミツガシワなど水生植物ならびに水生植物を多く含む種類が多産する。植物珪酸体では、ヨシ属が多産するが、ヨシ属の地下茎は X 層と X I 層中に大量にみられる。また、花粉化石でもコウホネ属とミツガシワ属の花粉化石がみられる。これらは、水深が数十センチ以下の浅い水域に生育することから、珪藻化石でも推測されているように、ヨシ属、スゲ属、ホタルイ属、オトギリソウ属、ミツガシワなどが生育する水深の浅い沼沢地であったことが伺われる。一方、花粉化石ではハンノキ属が多産するが、泥炭層中にはハンノキ属の球果や果実がみられない。また、種実同定の結果からは、木材はみられず木本類の種実もほとんどない。このことから、当時の周辺は草本類主体の植生で、花粉化石で多産するハンノキ属は、離れた場所（岸近くなどもっと水深が浅い場所）に生育していた可能性が高い。

表4 種実同定結果

	VII層	X層	XI層	XII層	XIII層
分析量	140g	128g	138g	141g	210g
木本類					
キハダ	-	-	1	-	-
タラノキ	-	-	-	1	-
草本類					
ヒルムシロ属	-	1	-	-	-
スゲ属	8	88	4	-	-
ホタルイ属	-	1	5	-	-
タデ属	1	1	1	-	-
アザガ科	-	-	-	2	-
タガラシ	-	3	1	-	-
オトギリソウ属	9	100	14	-	-
セリ科	1	1	4	-	-
ミツガシワ	2	18	47	-	-
キク科	-	1	-	-	-
不明	2	6	11	1	1
昆蟲	破	破	破	-	-
兩相	-	-	-	6	1

VII層では珪藻化石群集は流水性種が多産し、若干の止水性種を伴うことから、河川などの影響を受けた環境に変化したと推測される。ただし、ヨシ属の地下茎や植物珪酸体が多く含まれ、水生植物の種実もみられることから、基本的にはX層やXI層と同様沼沢地的な環境であったと推測される。しかし、水生植物の種実の数が減少している点、タケア科の植物珪酸体が増加している点、花粉化石ではハンノキ属が減少し、トチノキ属などが増加している点を考慮すれば、各化石が湖岸縁辺部の植生も反映するようになってきたと考えられる。おそらく流水の影響を受けるようになったため、河岸や丘陵縁辺部などの化石も流れ込んで堆積するようになり、各植物化石群集が広範囲な植生を反映するようになったと推測される。

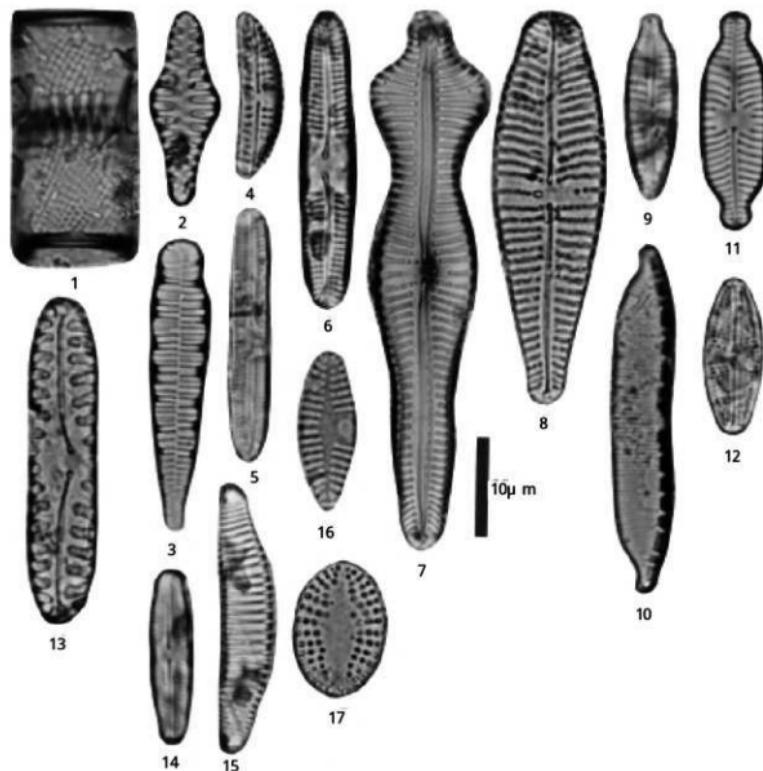
(2) 周辺の森林植生

検出された花粉化石のうち、ハンノキ属や草本類は、沼沢地内の植生を反映していると考えられる。これ以外で多産するブナ属、コナラ亜属、クリ属、トチノキ属、トネリコ属、クルミ属などは、後背山地の植生を反映していると考えられる。ブナ属をのぞけば、これらの大部分は低地との境界部分など林縁に生育すると考えられる。なお同様な種類が、小三内遺跡の下部層（縄文時代前期末とされている）で行われた木本質泥炭でも多産しており、低地には種類数の豊富な森林が作られ、その林床は比較的乾いていたことが推測されている（辻ほか、1994）。このことから、本遺跡周辺でも小三内遺跡と同様な景観をもつ低地林が近くに存在していたと考えられる。なお、ブナ属は山地深くに安定した森林を作る種類であることから、山地の植生を反映していると思われる。

引用文献

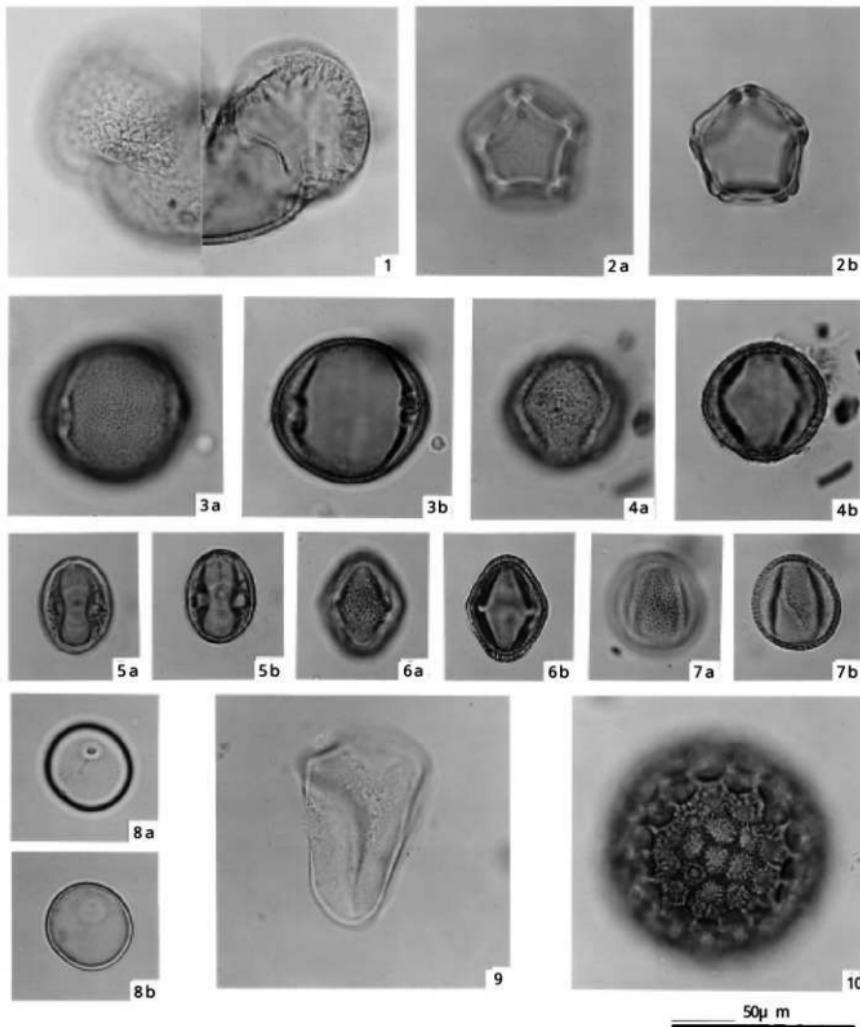
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 . 東北地理 , 42 , p.73-88 .
 Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species
 into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous
 and saproxenous taxa . Diatom , 10 , p.35-47 .
- 細野 衛・佐瀬 隆・青木潔行 (1992) 示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定- 十和田火山
 テフラ分布域場ノ台地区を例にして - , 地球科学 , 46 , p.121-132 .
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 硅藻学会誌 , 6 p.23-
 45 .
- 近藤謙三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析 , その特性と応用 . 第四紀研究 , 25 , p.31-64 .
- 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 , 27 , p.1-20 .
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA , eine Monographie der europäischen Taxa . BIBLIOTHECA
 DIATOMOLOGICA , BAND 26 , p.1-353 ., BERLIN - STUTTGART .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae , Teil 1 , Naviculaceae .
 Band 2/1 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa , 876p ., Gustav Fischer Verlag .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae , Teil 2 , Epihemiaceae ,
 Bacillariaceae , Surirellaceae . Band 2/2 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa ,
 536p ., Gustav Fischer Verlag .
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae , Teil 3 , Centrales ,
 Fragilariaeae , Eunotiaceae . Band 2/3 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa ,

- 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae,
Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lindbladaceae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die
Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Lange-Bertalot, H., Kuebs, K., Lauser, T., Noerpel-Schempp, M. & Willmann, M. (1996)
Dokumentation und Revision der von Georg Krässke beschriebenen Taxa. Iconographia
Diatomologica 3, 358p., Koeltz Scientific Books.
- Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996) Oligotrophie-Indikatoren 800 Taxa
repräsentativ für drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica 2, 390p.,
Koeltz Scientific Books.
- Metzeltin, D & Witkowski, A. (1996) Diatomene der Baeren-Insel, Süßwasser- und marine Arten.
Iconographia Diatomologica 4, 287p., Koeltz Scientific Books.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomene (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von
Cayenne, Guyana Gallica (1843). Iconographia Diatomologica 1, 107p.,
Koeltz Scientific Books.
- 佐瀬 隆・細野 衛・青木潔行・木村 準 (1993) 示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定と
火山灰土壤生成に関する一考察 - 十和田火山テフラ分布域 川向・赤坂両地区を例に - , 地
球科学, 47, p.391-408.
- 辻 誠一郎・植田弥生・南木睦彦 (1994) 小三内遺跡低地域の古環境.「青森市埋蔵文化財調査報告書
第22集 小三内遺跡発掘調査報告書」, p.125-133, 青森市教育委員会.



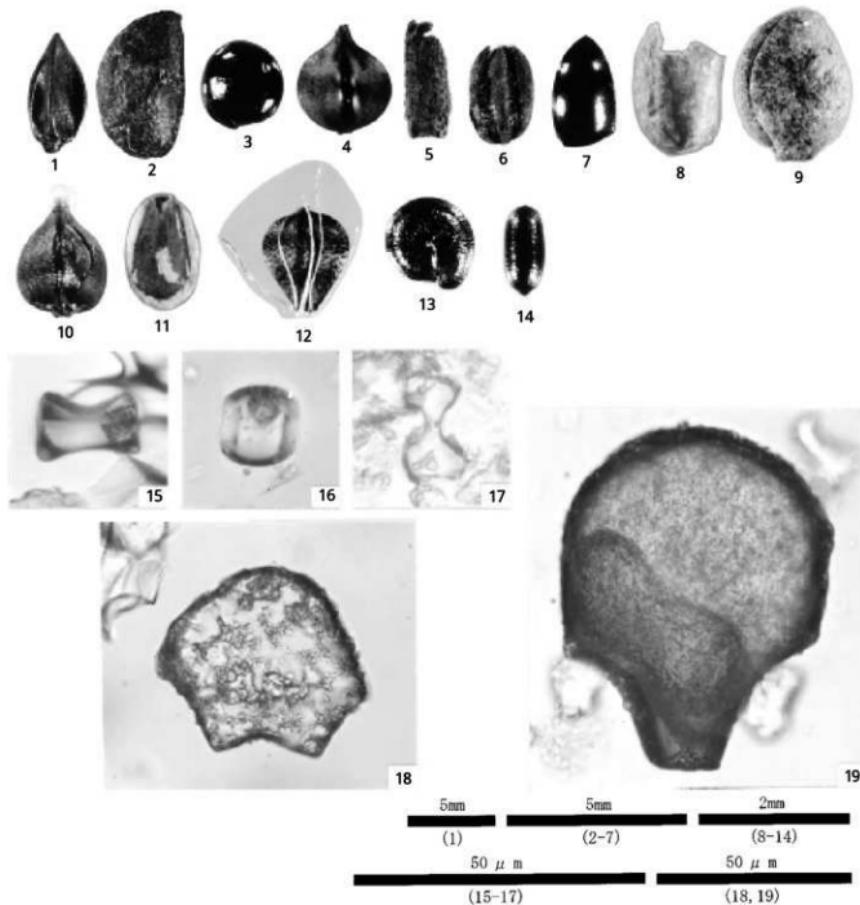
1. *Aulacoseira italica* var. *valida* (Grun.) Simonsen (X I層)
2. *Fragilaria pinnata* var. *lanceolata* (Schum.) Hustedt (VII層)
3. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (X I層)
4. *Amphora pediculus* (Kuetz.) Grunow (VII層)
5. *Caloneis angustivalva* Petit (X II層)
6. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (X II層)
7. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (VII層)
8. *Gomphonema helveticae* Brun (VII層)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (X II層)
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (X II層)
11. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (X II層)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (X II層)
13. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (X II層)
14. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt (X II層)
15. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (X I層)
16. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (VII層)
17. *Cocconeis pseudothumensis* Reichardt (VII層)

図版1 珪藻化石



1. マツ属 (XIII層)
 2. ハンノキ属 (XIII層)
 3. ブナ属 (XIII層)
 4. コナラ属コナラ亜属 (XIII層)
 5. トチノキ属 (XIII層)
 6. ウコギ科 (XIII層)
 7. トネリコ属 (XIII層)
 8. イネ科 (X層)
 9. カヤツリグサ科 (X層)
 10. サナエタデ節—ウナギツカミ節 (X層)

図版2 花粉化石



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. タデ属 (X層) | 2. キハダ (X I層) |
| 3. ミツガシワ (X I層) | 4. タデ属 (VII層) |
| 5. キク科 (X層) | 6. セリ科 (X I層) |
| 7. 昆虫 (X I層) | 8. タラノキ (X II層) |
| 9. ヒルムシロ属 (X層) | 10. スゲ属 (X層) |
| 11. タグラシ (X層) | 12. ホタルイ属 (X I層) |
| 13. アカザ科 (X II層) | 14. オトギリソウ属 (X層) |
| 15. クマザザ属短細胞珪酸体 (X III層) | 16. ヨシ属短細胞珪酸体 (X I層) |
| 17. ススキ属短細胞珪酸体 (VII層) | 18. クマザザ属機動細胞珪酸体 (X III層) |
| 19. ヨシ属機動細胞珪酸体 (X I層) | |

図版3 種実遺体・植物珪酸体

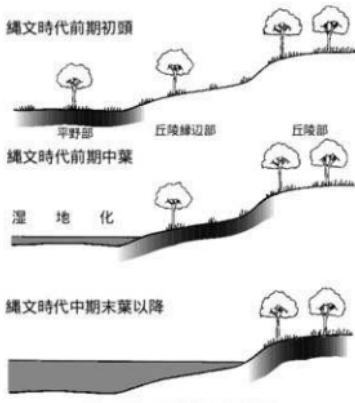
第V章 分析と考察

第1節 遺跡の時期と地形の相関からみた本遺跡における環境推移について

前述したように、本遺跡は地形的にみて平野部、丘陵縁辺部、丘陵部に区分することができる。そして、調査の結果、平野部に相当するA地区においては縄文時代前期初頭、丘陵縁辺部に相当するB地区においては縄文時代前期中葉、丘陵部に相当するC地区においては縄文時代中期後半～後期前半の遺構・遺物を主体としており、標高が高位の地区ほど遺構・遺物の主体となる時期が新しいという傾向がみられる。B地区・C地区においては削平を受けている部分もみられたものの、各地区で検出された遺構・遺物は上記したような時期にそれぞれ限定され、各地区を個別に見た場合、長期間にわたる継続性は認められない。遺構・遺物の主体となる時期と地形的条件におけるこのような相関に加え、平野部の第XII・XIII層及び丘陵縁辺部の第1号遺物集中ブロック3・4層の上位に泥炭層が堆積している状況を考慮すると、本遺跡においては時間が下るにつれて当時の生活の舞台が丘陵地側へ推移していったと想定することが可能であろう。これは、縄文時代早期後半～前期中葉に最盛期を迎えたとされる縄文海進の影響により、標高の低い部分が徐々に湿地化していったことが要因であると考えられる。恐らく縄文時代前期初頭において集落を営むことが可能であった平野部は、前期中葉の頃までには湿地化し、丘陵縁辺部へ遷移し、丘陵縁辺部は中期の頃には湿地化したと考えられる。平野部における泥炭層について、珪藻分析及び植物硅酸体分析を行った結果（第IV章参照）縄文時代前期初頭の遺物を包含する第XII・XIII層からは比較的乾いた環境、その上位の第VII～XI層からは沼沢地的な環境であったことが推定されており、平野部が徐々に湿地化したこと裏付けるものである。縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡が検出された地区的標高は約7.5m、前期中葉の第1号遺物集中ブロックが検出された部分の標高は約10.5mであり、前期初頭を約6,000年前、前期中葉を約5,500年前とすると、約500年の間に湿地面が約3m上昇したと推定することができる（注1）。



写真1 遺跡近景 (N→)



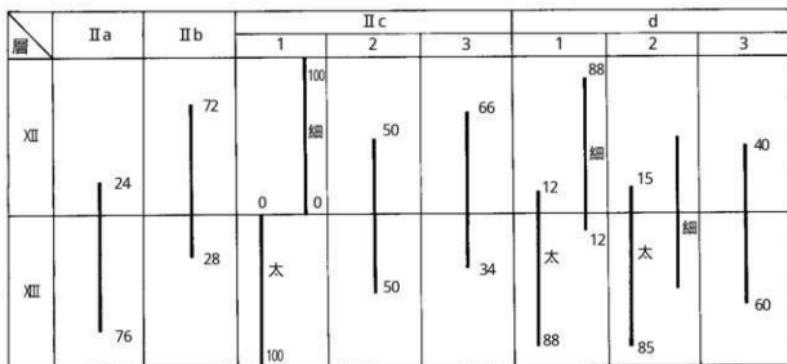
（注1）ここで推定したのは海水面ではなくあくまで遺跡周辺に形成されたと考えられる湿地面のことである。

第2節 第II群土器について ~表館式・早稲田6類の先後関係とその変遷~

第II群土器は県内における既知の型式では概ね表館式・芦野I群(以下、表館式)及び早稲田6類土器に比定される土器である。両型式は縄文時代前期初頭の長七谷地Ⅲ群直後に位置付けられているが、その先後関係については未だ統一的な見解が得られていないのが現状である。これまで提示されている見解は、三沢市早稲田貝塚及び六ヶ所村表館遺跡の調査によって両型式を検出した佐藤達夫氏による早稲田6類→表館式という案(佐藤・渡辺 1960、佐藤・二本柳 1961)と、熊谷常正氏や武藤康弘氏などによる表館式→早稲田6類という変遷案(熊谷 1983、武藤 1989、大沼 1981、三宅 1989)に集約される。このような見解の相違は、これまで両型式の土器を出土した遺跡において、その先後関係を明らかにし得る良好な層位的状況に恵まれなかつたことにより、当該期の編年を構築していく上で型式学的手法に大きく依存せざるを得なかつたことに起因すると考えられる。両型式の細別案・変遷案もいくつか提示されているが、それらは両型式の先後関係の如何によっては全く逆の変遷をたどる可能性がある。

本項では、本遺跡の基本層序第XII・XIII層から出土した第II群土器の各類型を層位ごとにその個体数を調べ、表館式と早稲田6類の層位的な先後関係及び両土器の型式的な変遷について若干考察してみたい。

本遺跡において第II群土器は平野部に相当するA地区の第XII・XIII層から出土している。いずれの土層も黒色を呈し、下位のXIII層には浮石粒・砂粒が少量混入する。第II群土器の各類型における出土層位ごとの個体数の量比を集計したところ、第67図のような結果が得られた。上位の第XII層からは押し引き沈線文が施され典型的な早稲田6類に比定されるb類、全面にループ文が施されるc1類のうち細い原体によるもの、胴部・底部破片ではループ文及び縄端回転文が施されるもののうち細い原体によるものが主体的に出土し、下位のXIII層からは刺突文・コンバス文が施され典型的な表館式に比定されるa類、全面にループ文が施されるc1類のうち太い原体によるもの、胴部・底部破片ではループ文及び縄端回転文が施されるもののうち太い原体によるもの、斜繩文・羽状繩文が施されるものが主体的に出土している。c2・c3類については出土量が少數であり、胴部・底部破片のうち細い原体による縄端回転文が施されるもの、斜繩文・羽状繩文が施されるものについては第XII・XIII層から一定量出土している。表館式に比定されるa類と早稲田6類に比定されるb類の地文に用いられる原体を比較してみると、前者に用いられる原体はかなり太いものが多いが、後者では太い原体は全く用いられず比較的細い原体



(5:16) (18:5) (0:1)(9:0) (3:3) (2:1) (3:22)(15:2)(1:16)(16:18) (8:12)

第67図 第II群土器各類型における層位ごとの出土量比

が用いられていることから、胴部破片については第XⅡ層から主体的に出土した細い原体によるループ文及び縄端回転文をもつものはb類に、第XⅢ層から主体的に出土したかなり太い原体によるループ文及び縄端回転文をもつものはa類に帰属する可能性が高いと考えられる。このことから表館式と早稲田6類の先後関係については、表館式が先行し、早稲田6類がこれに後続する可能性が高いと考えられる。

次に両型式の変遷について考察してみたい。

本遺跡から出土した刺突文とコンバス文が施される典型的な表館式土器は第XⅢ層から主体的に出土しており、文様構成から、a1・a2・a3・a4・a5の5種類に分類される。a1・a2は刺突列による三角繋ぎの区画が構成されその内部にコンバス文が充填されるもの、a3・a4は口縁上部及び胴部下半に両者が1単位ずつ限定向に施されるもの、a5は口縁上部に刺突列、胴部にコンバス文が施されるものに分けられ、これにa5として縄文のみ施されるものが加わるが、層位的にはそれらの先後関係は不明である。これまで当該型式の細分・変遷に関しては金木町芦野遺跡出土土器について細別を行なった名久井文明氏の論考(名久井 1971)や表館式と早稲田6類の変遷案を示した前掲の武藤氏の論考、関山式との関連から細分した三宅氏の論考(三宅 1985)があるが、早稲田6類のそれに比べてあまり論及されていない。前に出の熊谷・武藤両氏は表館式を長七谷地Ⅲ群に後続させる根拠の一つとして、長七谷地Ⅲ群に併行する東北南部の上川名Ⅱ式、関東地方の花積下層式の文様モチーフにおいて三角形・菱形・蕨手状の文様が用いられていることを挙げており(熊谷、武藤 前掲論文)それを肯首すれば、刺突列によって三角形のモチーフが描出されている第11図15・16が古いタイプに相当する。第11図9~11の個体には刺突文とコンバス文のほか沈線文が認められ、さらに半裁した竹管の内側によって押し引いたような文様が施されており、表館式に後続する可能性が高い早稲田6類のメルクマールとなる押し引き沈線文と手法が類似していることから、これは押し引き沈線文の原型と考えられ、新しいタイプに相当すると考えられる。沈線により前もって区画をし、その部分に刺突を施す第10図12もこれと同様の文様効果と解釈することができよう。熊谷によれば、表館式の口唇部断面において認められる「内削ぎ」の形状も長七谷地Ⅲ群及びこれに並行する東北南部の上川名Ⅱ式、関東地方の花積下層式に系譜が求められるとしており、本遺跡から出土した表館式のほとんどにおいて内削ぎが認められるのに対して、9~12の口唇部には内削ぎが認められず口唇部がほぼ平坦に整形されており、むしろ早稲田6類の口唇部形状に類似していることも本資料を新しいタイプとし得る傍証となろう。地文に着目すれば、第10図14に施されるループ文は比較的細い原体により施されているものであり、太い原体が用いられていることの多い本類において唯一の資料である。早稲田6類においてみられる地文は比較的細い原体が用いられていることから、本資料についても新しいタイプに属すると考えられる。本遺跡における刺突文・コンバス文をもつ土器に関してはa2がもっとも古いタイプと考えられるが、それ以外のものに関しては早稲田6類においてもみられるような要素を具備しているものが多く、現時点では明確な変遷過程は不明である。しかし、先に想定した本遺跡における表館式の古いタイプと新しいタイプを比較すると、刺突文に関しては個々の刺突の幅が狭くなっていることが看取でき、時期が下るにつれて刺突の手法ないし施文具の先端形状に変化が生じたと想定され器形に関しては口頸部にみられるくびれが次第に緩やかになり、直線的なものに遷移したことが想定される。本遺跡では刺突文・コンバス文を有する表館式の典型的な土器に共伴して、ループ文が施される第13図51などのように縄文のみの施文と推定される土器も出土している。これは表館遺跡・芦野遺跡のような標識遺跡をはじめ、当該期の各遺跡においても同様であるが、これまで提示されている縄文時代前期初頭の土器編年に関する論考ではその位置付けについてはあまり触れられていない。これらの縄文のみが施される土器については破片資料が多いため、本来、表館式・早稲田6類のメルクマール文様が施されていたものも存在していると考えられるが、当該期の各遺跡の様相と

比較すると本遺跡においても少なからず存在していることは明白である。第XIII層から出土した土器において施される縄文はループ文のほか、斜縄文、羽状縄文（結束・非結束）が認められるが、ループ文は表館式・早稲田6類を通じて認められ、羽状縄文（特に非結束）や斜縄文は前型式の長七谷地Ⅱ群、後型式と想定される早稲田6類においても認められるものであり、刺突文・コンバス文が施される典型的な表館式と縄文のみ施される土器が併存するのか、それとも前後関係を示すのかという問題については、当該期における他地域との並行関係を踏まえ、今後検討が必要であろう。早稲田6類土器における羽状縄文のみが施されるものと押し引き沈線文が施されるものとの関係について、前者を「装飾されない土器」、後者を「装飾された土器」として併存する可能性が高いとした三宅徹也氏による指摘（三宅1984）のように、現時点では表館式においても縄文のみの「装飾されない土器」と刺突文・コンバス文をもつ「装飾された土器」が併存していたと考えたい。

本遺跡から出土した早稲田6類土器は押し引き沈線文と地文の文様構成から、b1. 地文を有し数条の押し引き沈線文が口縁部ないし底部に限定的に施されるもの、b2. 器面全面に押し引き沈線文が施されるもの、b3. 縄文のみ施されるものに分けられる。当該型式を設定した佐藤達夫氏は早稲田6類をa-c類、尾駄式（尾駄例）に細分している（佐藤ほか 1960、佐藤ほか 1957）が、これに照射すると本遺跡におけるb1は6b類と尾駄式、b2は6a類、b3は6c類に相当する。早稲田6類の変遷案については、佐藤氏による6a類（姉沼）→6b類→尾駄、大湯氏や成田氏による6c類→6a・6c類・尾駄（大湯 1980、成田1980）のほか、押し引き沈線文の施文箇所の相違を各期のバリエーションと捉えた三宅氏による鷹架II群→春日町式→和野前山8群（三宅 1984）、武藤氏による器面全面に連続刺突による横位の波状ないし沈線文をもつもの・6c→6a→6b（武藤 前掲論文）などがあり、武藤氏による変遷案以外は基本的に早稲田6類が表館式に先行することを前提にしている。本遺跡においては、早稲田6類は第XII層から主体的に出土しているが第XIII層からも少量出土している。押し引き沈線文が施される土器について、第XIII層出土資料と第XII層出土資料を比較すると、前者は口縁部ないし底部に押し引き沈線文が限定的に施されるもののが出土しており、後者はそれに加え、前者のものより口縁部における押し引き沈線文による文様帯幅が広くなっているもの（仮にb1bとする）さらに器面全面に押し引き沈線文が施されるものが加わっている。このことから押し引き沈線文で構成される文様帶は古いタイプが狭く、それが次第に広くなり、やがて器面全面に至るという過程を看取できる。したがって、本遺跡における押し引き沈線文が施されているものの変遷についてはb1→b1b→b2と考えられ、佐藤氏の細分した類型をこれにあてはめると尾駄→6b類→6a類となり、器面に占める押し引き沈線文の密度に関して言えば、粗から密への変遷が想定される。八戸市和野前山遺跡の報告でも、出土状況において、器面全面に押し引き沈線文が施されるものよりも縄文の地文上に押し引き沈線文による幅広の文様帶をもつものの方が古い様相を示すことが示唆されており、本遺跡の出土資料から想定される変遷と合致する。しかし、表館式と同様にここでも問題となるのが縄文のみ施されるb3、即ち佐藤氏の分類における6c類である。本遺跡から出土したb3に施される文様は、ループ文・縄端回転文・斜縄文・羽状縄文（非結束）がある。表館式でもこれらの文様は認められるが、前述したように本遺跡から出土した表館式においてみられるループ文・縄端回転文は太い原体によるものが主体であり、細い原体によるものについては早稲田6類（6c類）に帰属する可能性が高いと考えられる。また、コンバス文・刺突文が施される表館式の地文にはループ文が多く、押し引き沈線文が施される土器の地文に縄端回転文（細い原体）が多いことから、縄端回転文は早稲田6類における主体的な文様であると考えられる。押し引き沈線文による文様が粗→密へと至る消長過程を踏まえれば、縄文のみが施され押し引き沈線文が施されない土器については「粗」と捉えることもでき、押し引き沈線文が施され

る b 1・b 2 に先行する可能性も想定できる。ただし、前型式とした表館式において刺突文・コンバス文が施される土器と縄文のみ施される土器が併存していた可能性があることは前述したとおりであるが、縄文のみ施される土器は第X II・X III層のいずれにおいても一定量出土しており、前掲した三宅氏の指摘のように「装飾された土器」と「装飾されない土器」、即ち押し引き沈線文が施される土器と縄文のみが施される土器が併存する可能性も否定できないことから、現段階では両者の関係については断定できない。なお、早稲田 6 類を主体的に出土した第X II 層からは、大木 1 式に比定される略完形の土器が出土しており、早稲田 6 類と大木 1 式の併行関係を示すものである。第X II 層から出土した土器の中にはこの他にも大木 1 式に比定されるものが含まれている可能性があるが、破片資料であり、厳密には早稲田 6 類との判別が困難である。

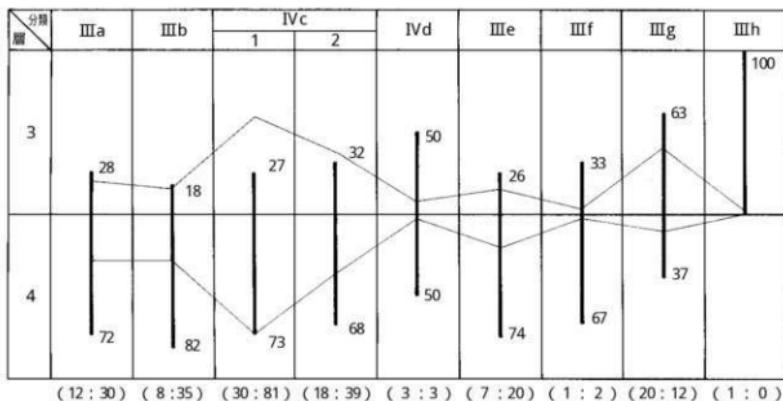
本遺跡から出土した表館式・早稲田 6 類についてその先後関係及び両者の変遷過程を考察したが、大局的には表館式から早稲田 6 類にいたる過程は、特に刺突文・コンバス文が施されるものと押し引き沈線文が施されるものというような両型式の典型的な土器における文様に着目すれば施文手法の簡略化即ち「手抜き」の過程と解釈することができよう。その代表的なものとして、連続刺突によって施した文様列が工具を押し引くことで描出した文様列へ変化したことの他に、環を作出した原体を回転させたループ文が閉じた縄の末端を強く押し付けながら回転させた縄端回転文に変化したことが挙げられる。そして、その文様構成においては次第に押し引き沈線文が占める部分が大きくなり、最終的には器面全面が押し引き沈線文で埋めつくされ幾何学的な文様が描出されるようになる。このように表館式から早稲田 6 類の連続性は両型式における典型的な土器における主に文様の施文手法の変遷によって解釈することができるが、両型式における縄文のみ施される土器の位置づけについては明らかにしえなかつた。さらに、表館式・早稲田 6 類に先行・後続する土器を含めてその型式序列を構築しようとした場合、表館式とそれに先行する長七谷地Ⅲ群・早稲田 6 類とそれに後続する芦野Ⅱ群・深郷田式における系譜関係については、文様モチーフの連続性や平底から尖底への移行過程などいくつかの課題がある。これらについては太平洋側と日本海側の地域性や東北南部・関東地方の当該期の土器との併行関係を踏まえつつ今後改めて検討したい。

第3節 第III群土器について

第1号遺物集中ブロックの3層と4層から出土した第III群土器は、円筒下層 a・b 式土器に比定されるものである。本報告では、口縁部に施される文様から第III群土器をⅢ a~Ⅲ h に分類した。

円筒下層 a・b 式土器は八戸市中居貝塚出土資料を基に山内清男氏によって設定された型式である。その後、江坂輝彌氏（江坂 1970）・村越潔氏（村越 1974）・三宅徹也氏（三宅 1974）によって細分案が提示されているが、見解は一致していない。これらの細分案について逐一紹介しないが、下層 a 式と b 式を区別するメルクマールとしてこれまで着目されている主要な属性については、隆帯の多寡、口縁部文様帶の広狭と施される文様の変化、斜縄文から絡条体回転文への胴部文様の変化、底面における縄文の有無などに集約されるが、各氏において基準とする属性は微妙に異なる。このような見解の相違は、前期初頭における編年研究と同様に良好な層位的事例が少なく、これまで両型式を分類するにあたって型式学的手法に主眼が置かれていたことが大きな要因と思われるが、三宅氏（三宅 前掲論文）や鈴木克彦氏（鈴木 1978）により当該期における狭い範囲での文様等の地域差（小文化圏）が存在していたことが指摘されているように、示準とした遺跡の所在する地域による差異も考慮される。下層 a・b 式の類型把握において両型式を判別する明確なメルクマールの同定が困難であることから、口縁部文様と胴部文様の構造的な把握によって最大公約数的なものを類型し、その位置付けを層位の観察によって行うべきとする方法論

的指針が鈴木克彦氏により指摘された（鈴木 1978）が、以降、当該型式を出土した遺跡においては両者を下層a・b式として一括して報告している例が大方であった。しかし、近年、木造町田小屋野貝塚から出土した一括資料を基に下層a式を結節回転文が施される土器を主体とする群、下層b式を絡条体による回転文が施されるものを主体とする群に分類する案が、工藤大氏によって提示されており（工藤 1995）。層位的には北海道戸井町戸井貝塚・碇ヶ関村大面遺跡出土資料によって支持されるという。同氏は、前者は口縁部には隆帯が多用され胴部文様は繩文・絡条体により斜行するものが多く、後者は区画文として側面圧痕が多用され胴部文様は繩文・絡条体により縱走するものが多いとしており、同氏の細分案は山内清男により設定された型式内容を解体し再構成したものと捉えることができる。



第68図 3・4層における第III群土器の出土量比

第68図は本遺跡における第1号遺物集中ブロックから出土した第III群土器を細分した各類型の個体数について、各層位における諸類型の個体数の量比（折れ線）と、各類型における層位ごとの出土個体数の量比（棒線）を示したものである。両層位における出土量を比較すると4層出土のものは3層出土のものの2倍以上である。第3章第2節でも述べたが、本ブロックは削平により平面的な範囲がかなり減じられており、本来の様相ではない可能性が高いが、3層と4層における諸類型の量比を比較すると、両層位ともに口縁部文様帶に結節回転文が施されるIIIc類が突出し、各種絡条体回転文が施されるIIId～IIIfが少なく、単軸絡条体第6A類が施されるIIIf類以外はほぼ同様の量比を示している。一方、各類型における層位ごと出土個体数の量比をみると、これまで提示されている細分案では統一的に下層b式に比定されているIIIf・IIIh類は上位の3層において高い比率を示すほかは全体的に出土量が多い4層において高い比率がみられる。以上の量比の比較結果を総合すると、3層・4層から出土したIIIf・IIIh類以外の類型については両層位においてほぼ同様の構成と量比を示していることから、層位的には分離できず、両層位から出土した土器群を別型式として類別するよりも、両層位の出土土器を同一型式として一括して捉える方が妥当であると考えられる。その場合、この土器群においてはIIIc類の量比が最も多いことから「結節回転文土器群」と捉えられる。したがって、本遺跡の第1号遺物集中ブロックから出土した第III群土器の様相については、これまで提示されている細分案に照射すると工藤氏の細分案と調和的であるといえる。

ま　と　め

本遺跡の調査は南北に細長く走る全長約600mの工事用道路とその一部西側に隣接する遊水地の法面部分を対象に平成11年度から13年度まで実施した。約12,000m²の調査対象面積に対して調査面積は3,700m²であり、これは平成11年度の発掘調査と併行して行った試掘調査によって調査面積を絞り込んだ結果による。3,700m²の調査に3箇年を要したのは、調査区である工事用道路が工事車両の通行にのみ使用されていただけなく、隣接する農地に出入りするために不可欠な道路であったことにより、農繁期を回避した調査期間の設定、工事用道路と農地を連絡する取り付け道路部分に配慮した調査区の設定など様々な面で制約を受けたことに起因する。ただし、調査委託者である青森土木事務所並びに青森市都市整備部からは、工事工程の変更、砂利道への水の散布など最大限のご配慮・ご協力をいただき、調査を無事完了することができた。

3箇年にわたる調査の結果、遺構については縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡1軒、土坑2基、焼土遺構1基、ビット47基、縄文時代前期中葉の遺物集中ブロック1箇所、縄文時代中期末葉～後期前葉のフ拉斯コ状土坑1基、Tビット1基が検出され、縄文時代早期後半～後期初頭にわたる遺物が出土した。

南北に長い調査区のために地形的に平野部・丘陵縁辺部・丘陵部が含まれ、平野部・丘陵縁辺部においては、現地表面から最大3mの深さまで泥炭層が堆積しており、縄文時代前期初頭～前期中葉の遺構・遺物は泥炭層の下位から検出されたものである。縄文時代前期初頭～前期中葉の遺跡調査例はこれ以降に帰属する遺跡に比べて少なく、特に縄文時代前期初頭に帰属する遺構・遺物がある程度まとまって検出された例は本市において初めてである。当該期に帰属する表館式・早稲田6類土器については、これまで県内における各遺跡において良好な層位的状況に恵まれなかったことから、その先後関係が不明確であったが、本遺跡では基本層序第XII層から早稲田6類、下位の第XI层から表館式が主体的に出土しており、表館式が早稲田6類に先行する可能性が高いことが判明した。

遺跡内の地形と各時期の遺構・遺物が出土する地点を併せてみると、標高が高位になるにつれて主体となる時期が下っており、その各地点においては時期の継続性が認められない。第V章でも述べたが、このような各時期の変遷と標高との相間は縄文海進の影響によると考えられ、これは自然科学分析結果によって裏付けられる。本市においては平野部に立地する遺跡が少ないのでに対して、丘陵地上に立地する遺跡が多く、これまでには丘陵地に立地する遺跡が数多く調査されてきたが、前述のとおり縄文時代前期中葉以前の遺構・遺物の検出例は少なく、本遺跡において縄文時代前期初頭～前期中葉の遺構・遺物が平野部分に堆積する泥炭層の下位から検出されていることを踏まえれば、本市の平野部分において縄文時代前期中葉以前に帰属する未発見の遺跡が数多く眠っている可能性が高い。

本遺跡は、これまで本市においてあまり確認されていない時期の遺構・遺物が検出されたことに加え、平野部に堆積する泥炭層のほか、平成10年度に確認された縄文時代・旧石器時代の埋没林、縄文時代の河川跡の存在から、考古学だけに留まらず植物学・地質学など諸分野においてもその学術的価値は高く、当時の生活とそれをとりまく環境を総合的に復元するうえで極めて貴重な遺跡であると考えられる。

最後となりましたが、本報告書を刊行するにあたり、調査委託者である青森土木事務所並びに青森市都市整備部をはじめとした関係各機関、遺跡周辺の土地所有者の方々、雨の日でも真夏の炎天下でも水気を含んだ重い土と格闘し一生懸命作業して下さった発掘作業員の方々、急な指示にも快くかつ的確に対応して下さった整理作業員の方々、発掘調査・整理作業において至らぬ担当者を補助して下さった調査補助員の方々、その他関係各位のご指導・ご協力に対しまして深く感謝の意を表する次第であります。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1977 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県教育委員会 1980 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 青森県教育委員会 1980 『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 青森県教育委員会 1980 『鷹架遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 青森県教育委員会 1981 『発茶沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 青森県教育委員会 1982 『山崎遺跡(1)(2)(3)』発掘調査報告書『青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
- 青森県教育委員会 1983 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1985 『表館遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 青森県教育委員会 1990 『李沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第130集
- 青森県教育委員会 1993 『小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第154集
- 青森県教育委員会 1996 『畠内遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第187集
- 青森県教育委員会 1996 『三内丸山遺跡VI』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
- 青森県教育委員会 1998 『三内丸山遺跡VII』青森県埋蔵文化財調査報告書第230集
- 青森県教育委員会 1999 『畠内遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
- 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 1999 『青森県遺跡詳細分布調査報告書XⅠ』青森県埋蔵文化財調査報告書第267集
- 青森県教育委員会 1999 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第270集
- 青森県教育委員会 2000 『三内丸山(6)遺跡II—東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
- 青森県教育委員会 2000 『青森市横内川遊水地埋没林調査報告書』
- 宮城県教育委員会 1986 『今熊野遺跡II』繩文・弥生時代編『宮城県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局 1985 『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第92集
- 山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局 1987 『新山A遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第109集
- 国立歴史民俗博物館 1999 『[歴博国際シンポジウム]過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史』国立歴史民俗博物館研究報告第81集
- 青森県立郷土館 1995 『木造町田小屋野貝塚—岩木川流域の繩文前期の貝塚発掘調査報告書—』青森県立郷土館調査報告第35集 考古—10
- 戸井町教育委員会 1992 『戸井貝塚』
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚II』
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚III』
- 木古内町教育委員会 1999 『木古内町釜谷遺跡—南渡島地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書IV- a II遺物編』
- 青森市教育委員会 1965 『四ツ石遺跡調査概報』青森市の文化財2
- 青森市教育委員会 1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第26集

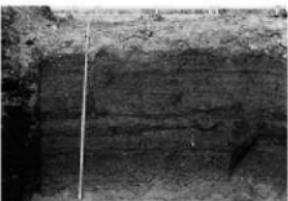
- 青森市教育委員会 1997 「桜峯（1）遺跡発掘調査報告書」*青森市埋蔵文化財調査報告書第32集*
- 青森市教育委員会 2000 「熊沢遺跡発掘調査報告書」*青森市埋蔵文化財調査報告書第48集*
- 青森市教育委員会 2000 「大矢沢野田（1）遺跡調査報告書」*青森市埋蔵文化財調査報告書第52集*
- 青森市教育委員会 2001 「新町野遺跡発掘調査報告書II・野木遺跡発掘調査報告書II」*青森市埋蔵文化財調査報告書第54集*
- 青森市教育委員会 2001 「大矢沢野田（1）遺跡発掘調査概報II」*青森市埋蔵文化財調査報告書第58集*
- 階上町教育委員会 1989 「白座遺跡・野場（3）遺跡発掘調査報告書」
- 盛岡市教育委員会 1986 「大館遺跡群 - 昭和60年度発掘調査概報 - 」
- 相原 淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期前葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に—」*考古学雑誌* 第76巻第1号
- 阿部 千春 1993 「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺」*月刊考古学ジャーナル* 第362号
- 江坂 輝彌 1970 「石神遺跡」
- 大沼 忠春 1981 「道央部の縄文前期土器群の編年について」*北海道考古学* 17
- 大沼 忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」*北海道考古学* 20
- 大沼 忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について」*北海道考古学* 22
- 小笠原雅行 2000 「円筒下層A式といわゆる白座式について- 現状とその問題点の把握-」*村越潔先生古稀記念論文集*
- 佐藤達夫・二本柳正一・角鹿扇三 1958 「青森県上北郡早稻田貝塚」*考古学雑誌* 第43巻第2号
- 佐藤達夫・渡辺兼庸 1961 「六ヶ所村表館出土の土器」*上北考古学会誌* 2
- 佐藤達夫・二本柳正一・1961 「六ヶ所村尾駒出土の土器」*上北考古学会誌* 2
- 鈴木 克彦 1978 「第IV章 總括」*熊沢遺跡* *青森県埋蔵文化財調査報告書第38集*
- 鈴木 克彦 2001 「北日本の縄文後期土器編年の研究」
- 興野 義一 1967 「大木式土器理解のために（Ⅰ）」*月刊考古学ジャーナル* 第13号
- 興野 義一 1968 「大木式土器理解のために（Ⅱ）」*月刊考古学ジャーナル* 第16号
- 興野 義一 1984 「大木式土器について」*宮城の研究* 1
- 工藤 大 1995 「第6章 考察 第1節 縄文土器」*木造町田小屋野貝塚—岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書* *青森県立郷土館調査報告第35集 考古-10*
- 工藤 竹久 1989 「縄文尖底系土器様式」*縄文土器大観* 1
- 黒坂 祐二 1993 「羽状縄文系土器の文様構成（点描）- 2 -」*研究紀要* 第10号 *埼玉県埋蔵文化財調査事業団*
- 小林 達雄編 1999 「縄文土器の編年と社会」
- 白鳥 良一 1989 「前期大木式土器様式」*縄文土器大観* 1
- 津村 宏臣 2000 「GISを利用した遺跡環境評価の方法-考古学における空間分析（1）」*動物考古学* 第15号
- 名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」*考古学雑誌* 第57巻第2号
- 成田 滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様」*縄文土器大観* 4
- 松井 章・牧野 久実 2000 「古代湖の考古学」
- 三宅 徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」*北奥古代文化* 第6号
- 三宅 徹也 1977 「円筒土器の概念とその崩壊」*青森県立郷土館調査研究年報* 第3号

- 三宅 徹也 1981 「円筒土器」『縄文文化の研究』3
- 三宅 徹也 1984 「第3節 分析と考察 2 土器」『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 三宅 徹也 1985 「第II群土器について」『表館式遺跡発掘調査報告書II』青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 三宅 徹也 1986 「円筒下層式様式」『縄文土器大観』1
- 三宅 徹也 1989 「早稻田6類と表館式との関係」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム資料
- 武藤 康弘 1989 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究- 表館式、早稻田6類土器をめぐって-」『考古学雑誌』第74巻第2号
- 村越 潔 1974 「円筒土器文化」
- 山内 清男 1929 「関東北における縄維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号
- 山内 清男 1979 「日本先史土器の縄文」

写 真 図 版



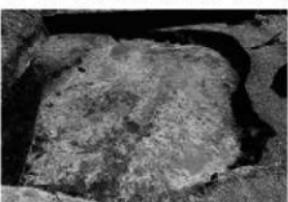
遺跡遠景 (N →)



AE- 22- 24グリッドセクション (W →)



AA - AC - 15 - 23グリッド実掘 (S →)



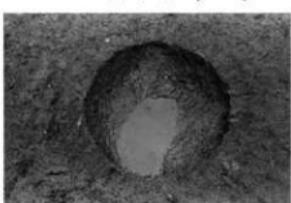
SI- 01完掘 (W →)



SI- 01セクション (S →)



SN- 01 (W →)



SK- 01完掘 (W →)



SK- 02完掘 (W →)



AC- 27グリッド遺物出土状況 (W →)



作業風景

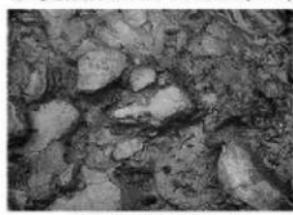
写真 1



第1号遺物集中ブロックセクション (W →)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況 (N →)



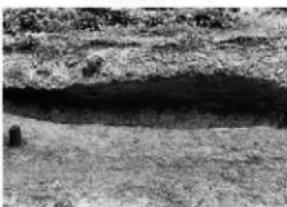
石槍出土状況 (W →)



作業風景 (E →)



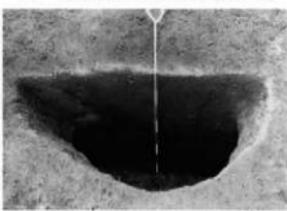
C地区盛り土 (E →)



G ~ H ラインセクション (N →)



SK- 03完掘 (S →)



SK- 03セクション (S →)

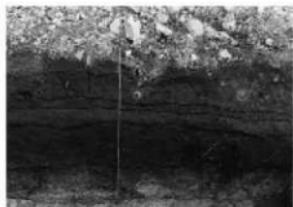


SK- 04完掘 (S →)



SK- 04セクション (S →)

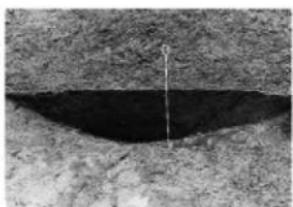
写真 2



AA- 60~61ラインセクション (W→)



SK- 01セクション (N→)



SK- 02セクション (W→)



AC- 18グリッド遺物出土状況(E→)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況 (N→)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況 (N→)



C 地区遺物出土状況 (W→)

写真 3

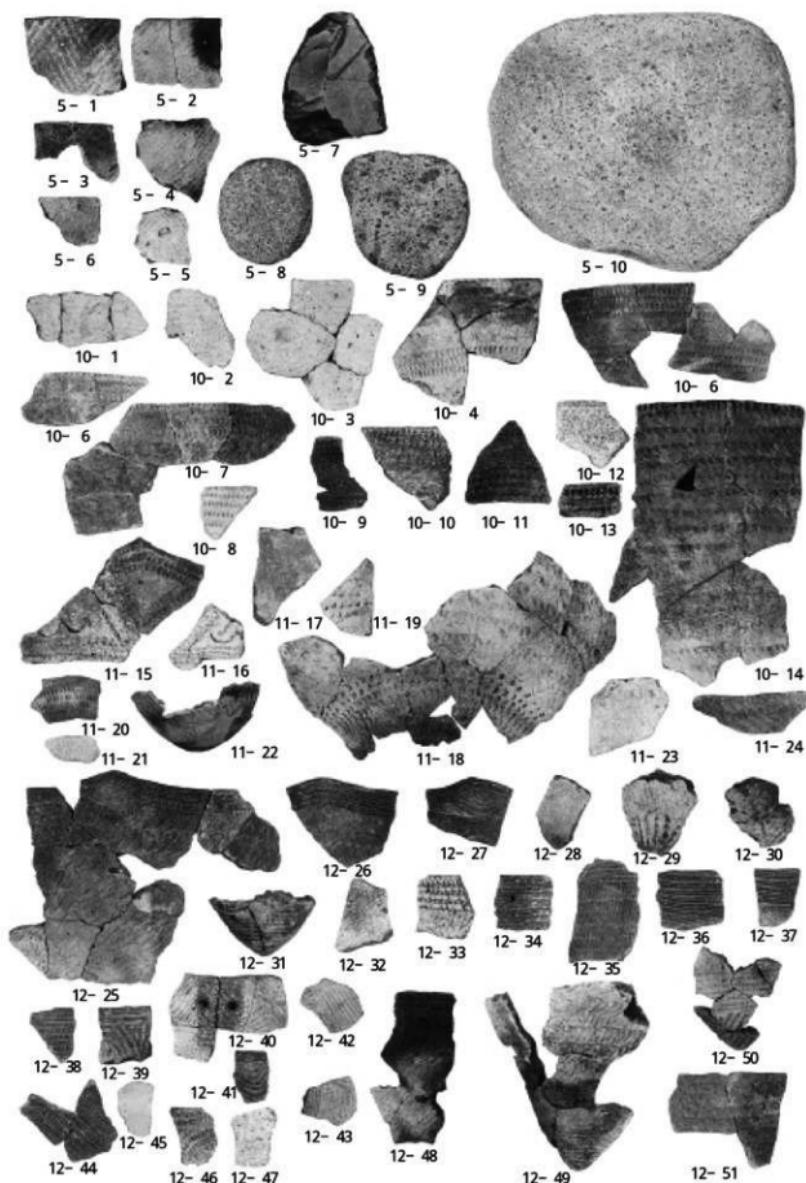


写真4 出土遺物

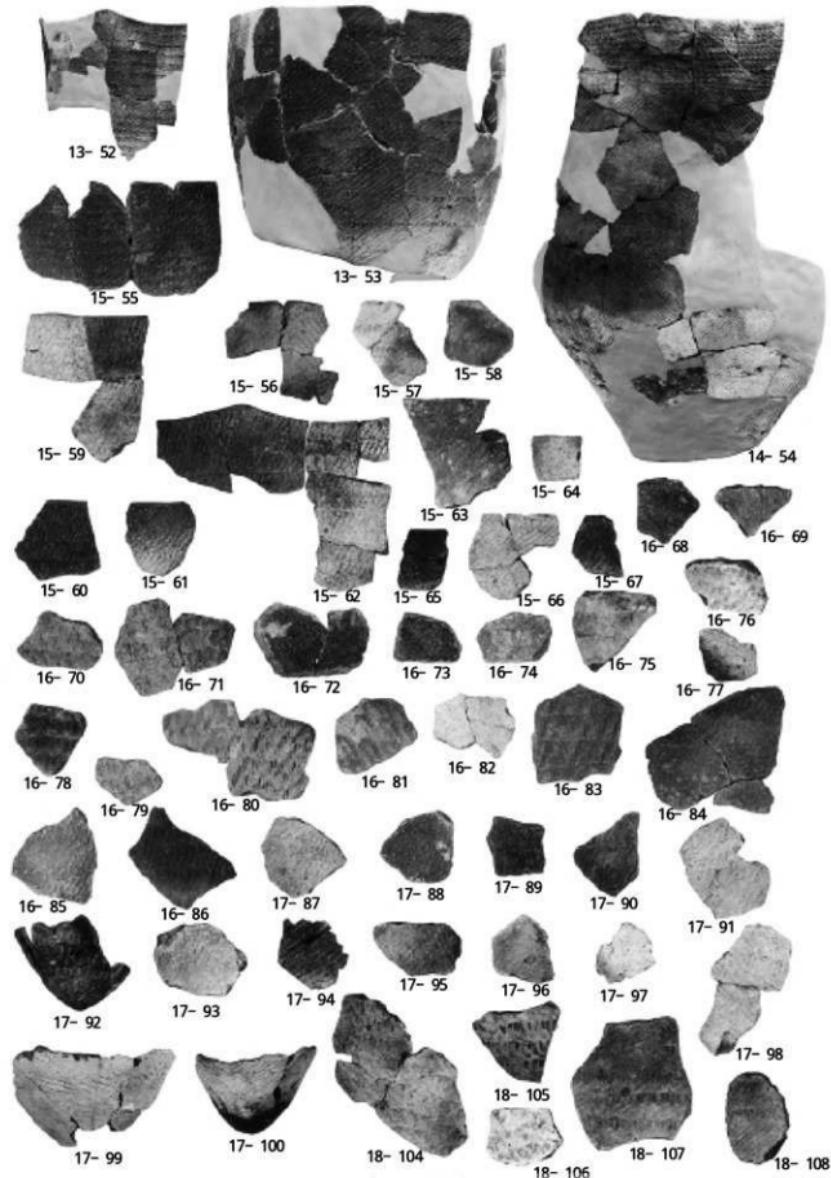


写真5 出土遺物

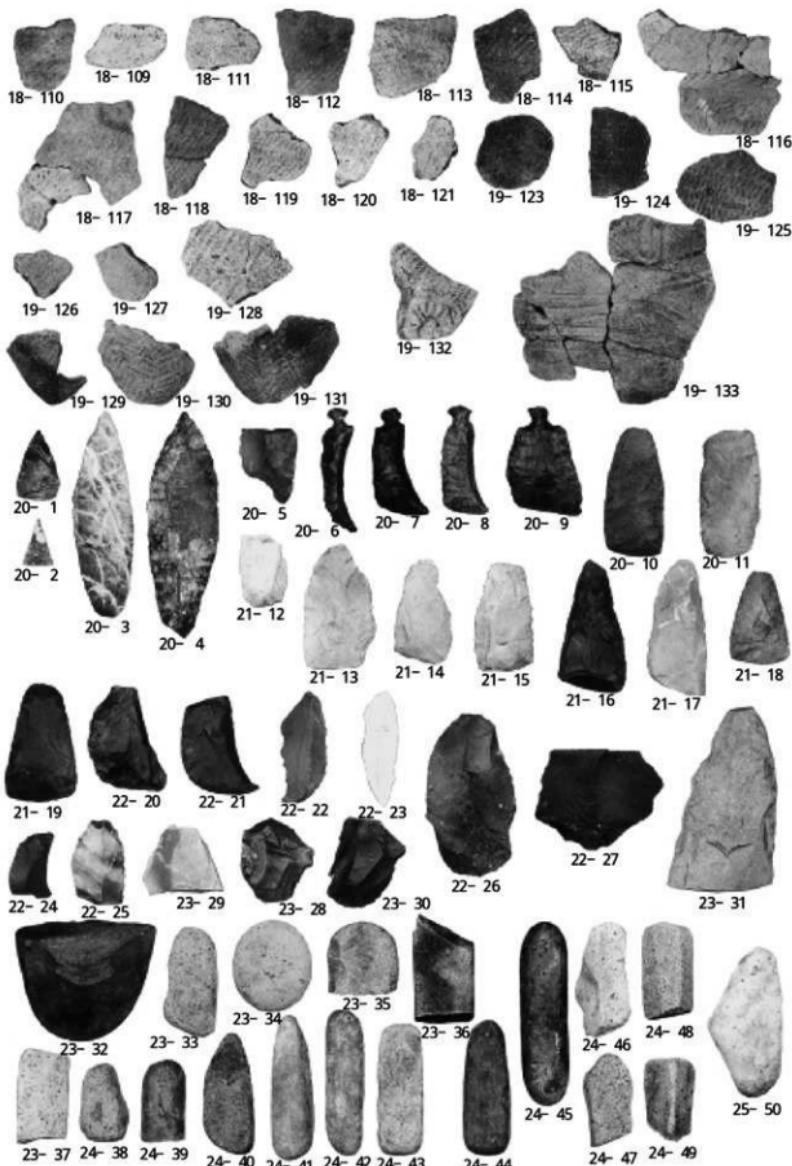


写真6 出土遺物

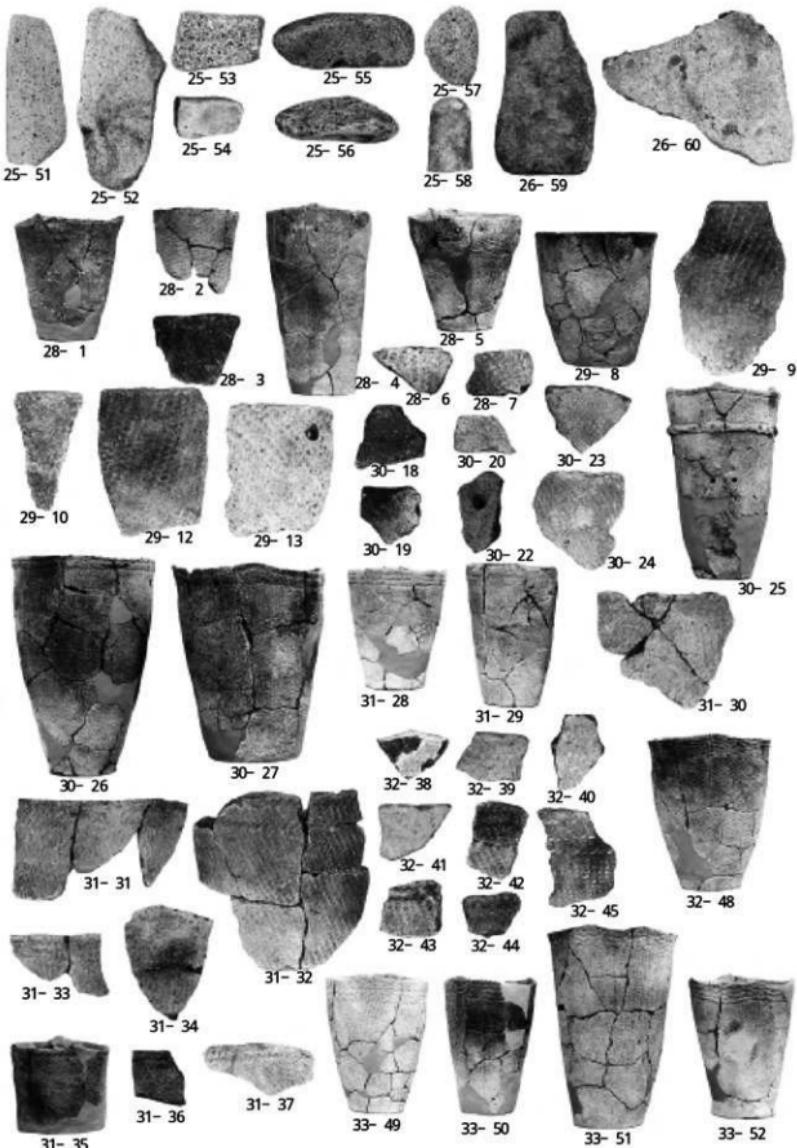


写真7 出土遺物

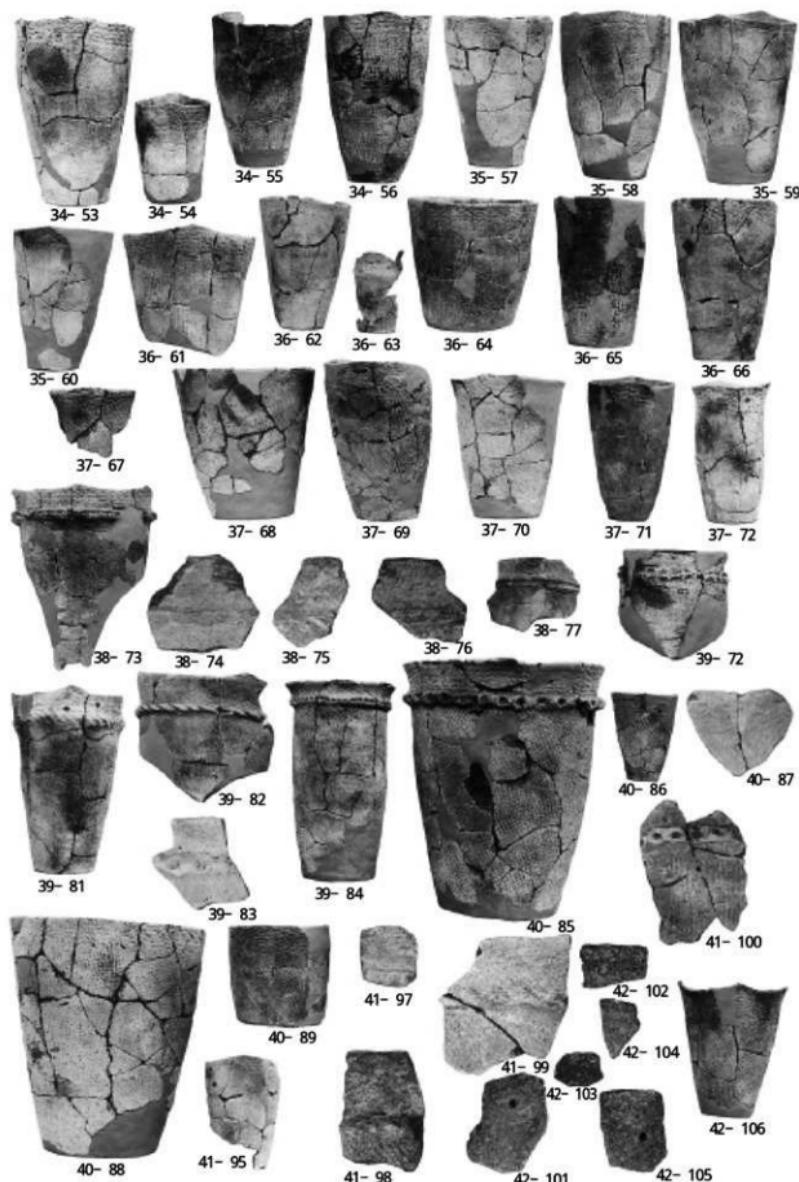


写真8 出土遺物

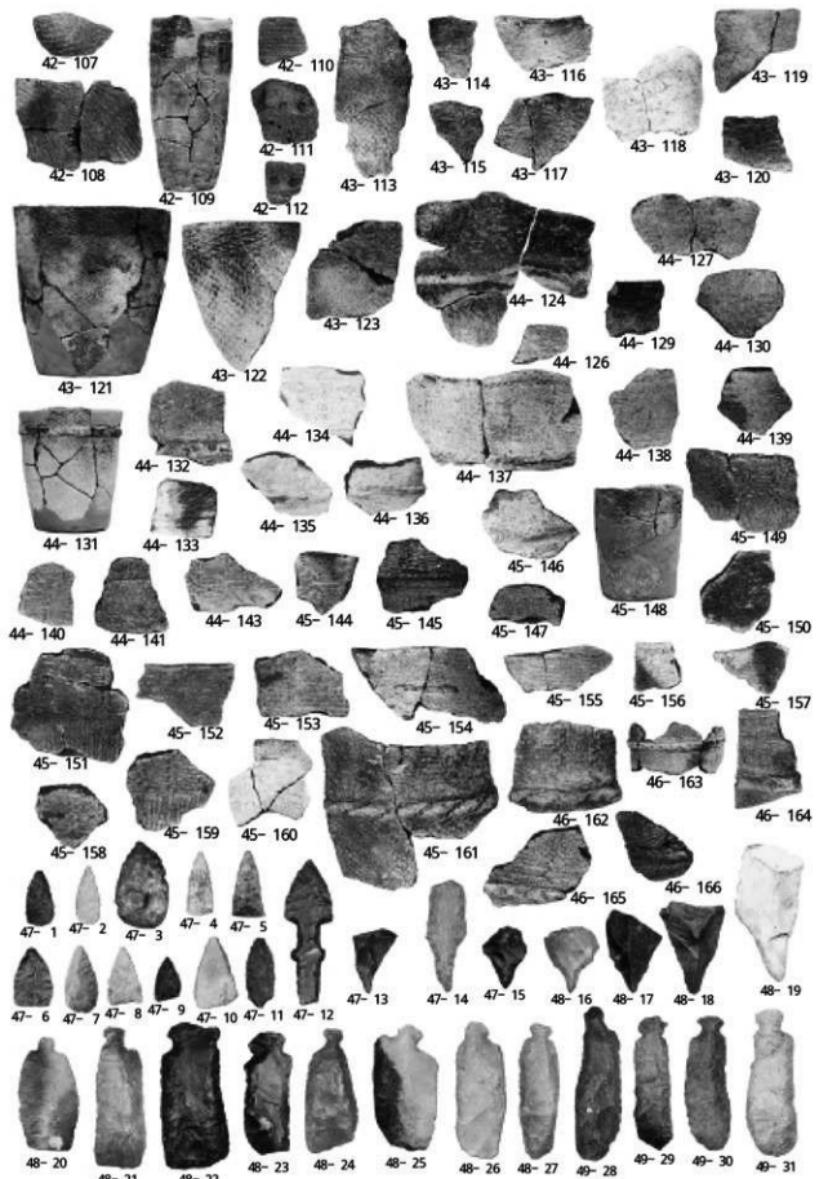


写真9 出土遺物

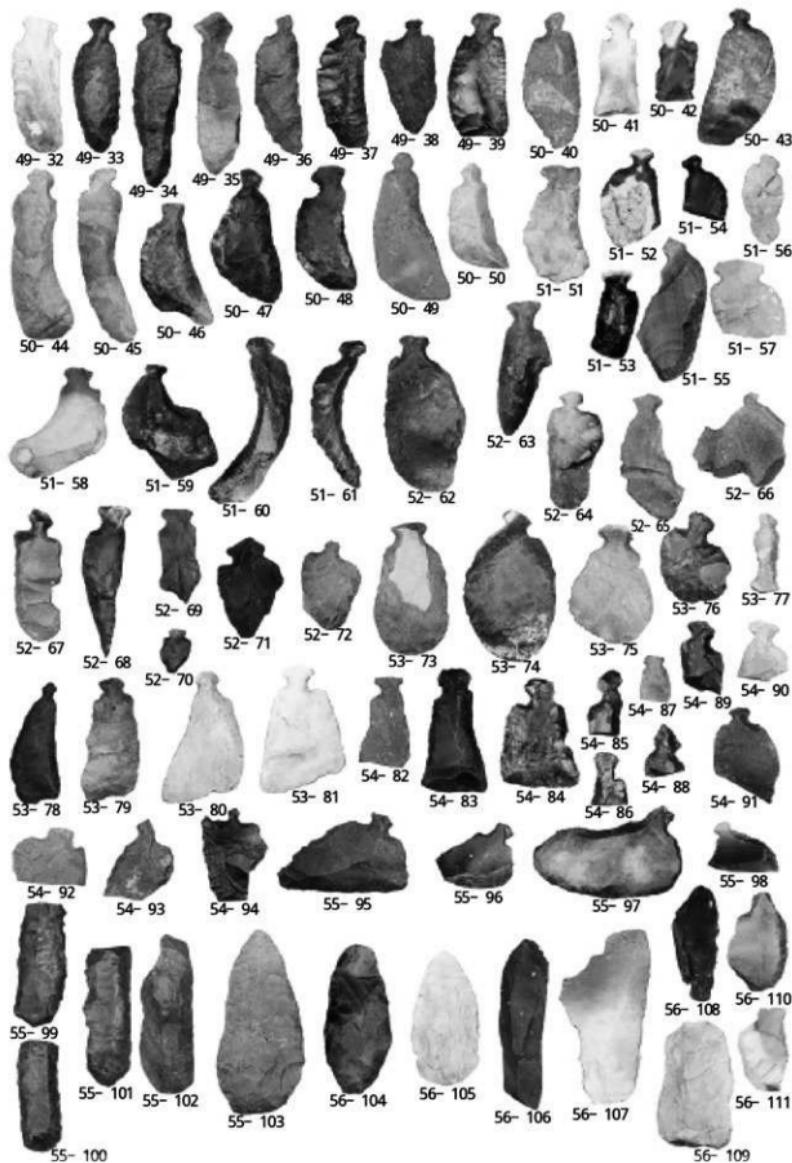


写真10 出土遺物

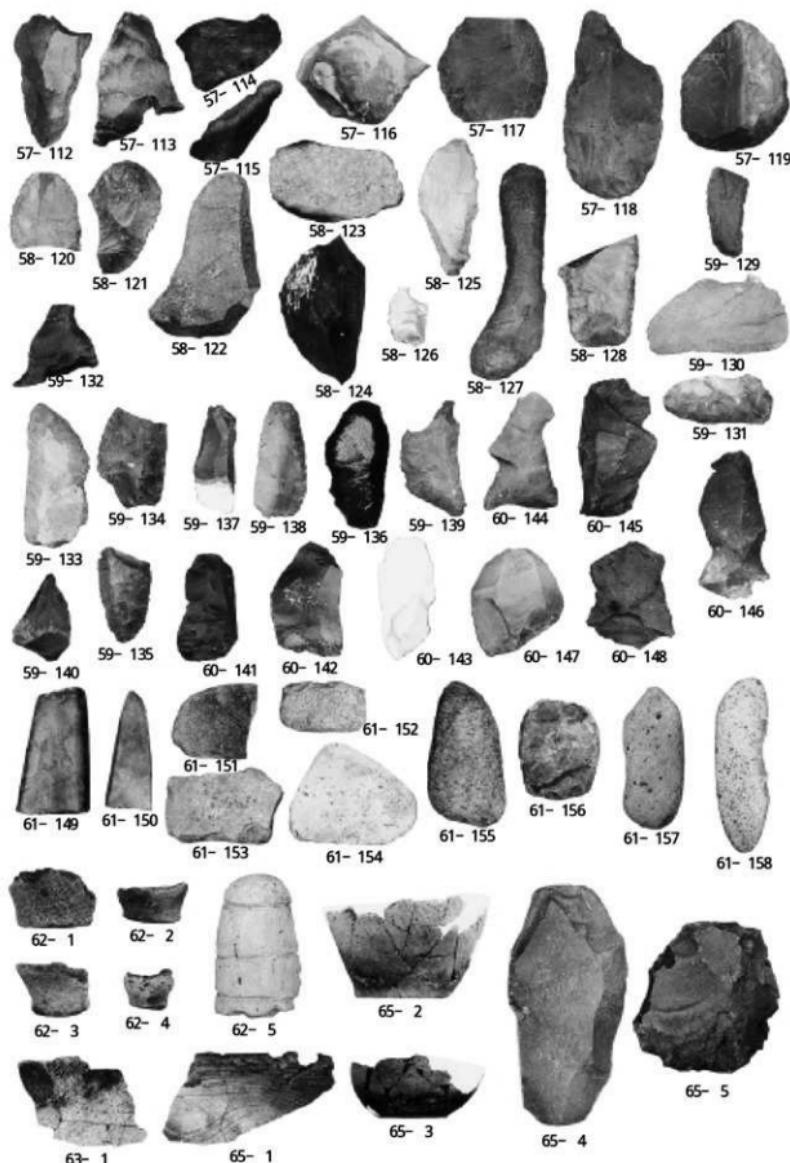


写真11 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あおやさわのだかっこいちはくつちょうさほうこくしょ							
書名	大矢沢野田(1) 乱世発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第61集							
編著者名	設楽政健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 017-734-1111							
発行年月日	西暦2002年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あおやさわのだかっこいち 大矢沢野田(1)	あおもりし おおあざ 青森市大字 あおやさわのだの だ 大矢沢字野田	01	292	40° 47' 30"	140° 39' 77"	19990614 - 19990930 20000817 - 2001031 20010711 - 20010809	3,700	堤川広域基幹 河川改修事業 及び市道簡井 幸畠団地線特 殊改良一種特 定事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大矢沢野田(1)	集落跡	縄文	竪穴住居跡 土坑 フラスコ状土坑 Tピット 焼土遺構 ピット 遺物集中ブロック	1軒 2基 1基 1基 1基 47基 1箇所	縄文土器 石器 土製品 石製品	本市で初めて 縄文時代前期 初頭の遺構を 検出		

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内丸山遺跡調査概報』	"	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書II』 ^a
"	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	"	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』	"	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	"	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』 ^a	"	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a
"	6	1971	『玉清水III遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書III』 ^a
"	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』 ^a	"	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』 ^a
"	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』 ^a
		1979	『豊沢遺跡』	"	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』 ^a	"	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書II』 ^a
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野寺遺跡』	"	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書IV』 ^a
"		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』 ^a
"		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第47集	1999	『稻山遺跡発掘調査概報』 ^a
"		1987	『横内城跡発掘調査報告書』 ^a	"	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』 ^a
"		1988	『三内丸山I遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第49集	2000	『稻山遺跡発掘調査概報II』 ^a
青森市埋蔵文化財調査報告書				"	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書V』 ^a
"	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』 ^a	"			『大浦遺跡II・野木遺跡II・稻山遺跡II・小牧野遺跡II・
"	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』 ^a	"	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』 ^a
"	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』 ^a	"	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書II』 ^a
"	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a	"			『野木遺跡発掘調査報告書II』 ^a
"	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書VI』 ^a
"	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第56集	2001	『稻山遺跡発掘調査報告書I』 ^a
"	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第57集	2001	『稻山遺跡発掘調査概報III』 ^a
				"	第58集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報II』 ^a
"	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a	"	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第60集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書VII』 ^a
"	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』 ^a	"	第61集	2002	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』 ^a	"			『稻山遺跡II』 ^a
"	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a	"	第62集	2002	『稻山遺跡発掘調査報告書II』 ^a
"	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』 ^a	"	第63集	2002	『稻山遺跡発掘調査概報IV』 ^a
"	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』 ^a	"	第64集	2002	『市内遺跡発掘調査報告書』 ^a
"	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報II』 ^a				
"	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』 ^a				
"	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』 ^a				

青森市埋蔵文化財調査報告書第61集

大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成14年3月22日

発 行 行 青 森 市 教 育 委 員 会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 017-734-1111

印 刷 東 北 印 刷 工 業 株 式 会 社

〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12

TEL 017-742-2221